

も即座に皆癒たるは是全く佛恩ありぬ今來降の御佛の定めて早本土に返らせ給はん斯る御佛の御容ありとも此土に留めて末代の凡俗等に結縁致させ度思へば御容を摸す事の若し我等如き力及ばし論し給へど請ひ願へば世尊の微笑まじくして汝が能聞今來降まじくたる阿彌陀佛の西方にて六十万億那由佉沔沙由旬の御丈あるを今方便にて御姿を締め給へども八万四千の御相の一つも欠ず又觀音勢至の容も亦是に等し扱長者儘に聞よ汝が慳貪の幾世にも止す又濟度にも及びたき者ゆへ文殊菩薩の夫を憐みて汝が子と生れて恩愛よりして竟に發起させたるの誠に嬉しからずや今三寶の報恩を思ひて三尊の御姿を此土に留んどの願ひの實に尤も有り今夫を達せんと思ひ先千金を調へよと仰せられば開の辱けあし其願ひの適りし千金の思ひ万金も已に貯へありぬイヤイヤ汝が是迄欲心を以て貯へたる金の仮令須彌山程積とも尊き佛の摸されず是を摸すに南海の底ある十六万由旬往て龍宮と云ふあり茲に九万八千の龍の司八大龍王の中なる遮羯維龍王の秘藏する閻浮檀金ありんば輒く求め難し「這の如何にせん求め難きもの有りとも無が如くならずやと答へける其所へ目蓮の進み出「慳貪長者が思ひ立たる善根あれば争て其願ひを空くせん取れぬ寶を

此の目蓮が刹那に取て與へんと云ふは月蓋の道に目蓮殿面自あし越方の無禮も咎ずして仇を思ふ我願ひを適へて下さることの有難さと敬ふ此方より富婁那の戒めてコヤ目蓮汝の過し頃世尊の御聲を試さんとて神通もて八億二千里程飛行て光明幡國へ半時に往たりし大神通力に皆く感服する所あるが夫を試しに今十六万由旬の龍宮へ赴きて万一遲刻する事もあらば汝が計りの耻さらず世尊を初め羅漢達の名の汚れとあるを知よ「イヤ富婁那案事まじ縦令十六方にまれ百万にまれ奈落の底の底迄も此目蓮が往すと思へば方に一つの違ひのあしと云ふ隙に我れ往て戻ると言ひ棄つ北の椽へ踏出すが否其一足のはや龍宮へぞ到りける去程に目蓮の神通もて龍宮へ赴きて見けるに白銀の門に玉の費を並べ瑠璃の扉を閉たれば之を開きて入んとせし時門外を守る手長足長と云ふ者出來りて目蓮を看より築地の廻りへ追除とするを目蓮の是何程の事有りんとて衣の袖をまくし舉無二無三に入んどするを渠等の目蓮を取押へて突除る其力の宛然力士の如くされば今の進む事も適らぬ然る裏手より入んか又虚空より入んかと猶豫其所へ門を開きて赤衣の官人出來りて這の龍宮と云ふて人倫の界を隔ちたる所されば凡人の來べき所に非ず急ぎ立去給へど制止ければイ

ヤ某しの世尊の御使に態々来る目蓮と云ふ者あり此の由を急ぎ龍王へ言上せよと述べければ
 扱ひ世尊の御使あるか夫どの知ずして警護共々無禮を免し給へ先此方へ入り給へと案内し
 て南殿へ誘ひつゝ慰勸に待遇けるに間も亦く遮那羅龍王の綾羅錦緞の衣服を装ひて立出つ
 目蓮を供養し終りて扱今此海底へ有難くも世尊の御使を下さるゝ仔細のと聞ければ「然
 ば我此度茲へ来りたるの名に聞つらん慳貪の月蓋長者の我子の愛に引れて漸く佛門に入り
 西方の佛を鑄摸さんか爲に閻浮檀金を千兩望るゝ故速りに渡し給へと述べければ龍王の須臾
 猶豫しつゝ這の思ひも依らぬ事ありき此龍宮の素より田畑なければ五穀も亦し桑を植る園あ
 ければ絹布を造る業もあらぬに今何不足なく衣食するの是れ全く此閻浮檀金の徳に依れば
 龍宮第一の寶として秘置ことされば是已の贈り難しと辞けるに目蓮の膝を進めて某し世尊
 の御使として茲へ来る上の龍王如何程に惜み給ふとも其金を我が神通にて取り易けれども
 夫にての法に背く故先禮儀を述て望まり其昔世尊提施太子たりし時龍王の如意寶珠を惜み
 給ふ事よりして龍宮の大難ありたるを今も猶覺へありや夫已ならず今世世尊の恤を蒙りた
 る事も數あるに其思も顧みずして過つる年世尊の御母の摩耶夫人の再來ある天女に懐胎の

思を報じ給ひんとて切利天へ上らせられて一偈九旬報恩の御說法ある時に難陀跋難陀の二
 龍王己れらが住所の上を御通行有を見て我々の世尊の生れ給ひし時初湯を洒ぎ進らせし者
 あるを今我住居の上を打越給ふとの腹立しやとて二龍の共に怒りを發して忽ち大身に變化
 して八万由旬の須彌山を纏ひ頭を切利天に差延て黒雲を吐出し世尊の御通行道を暗さんと
 せしうべ我又神通力を以て大身を現し須彌山を踏て頭を梵天に差延つゝ口より清風を吹出
 して其黒雲を吹拂ひ又八万四千の虫と變じて二龍の鱗を惱せし事を余もや知ぬ事ありら
 ん仮令龍王に秘藏の寶ありども生死穢心の身を持者の無常の期の免れ難し夫れを思ひ其
 方よりして其金を佛に獻じ後世の得脱を願ふべきにと諫ければ龍王の微笑して實に尤もの
 諫りも我是迄大恩ある世尊の事ゆへ速かに獻金せんとし思ひしと待て須臾是を惜まば世尊
 の自ら入せらるゝ事もやあらば龍宮の大幸ありと全く心よき事を述たりしと今其甲斐有
 て貴殿より詳細ある論を受たれば我悦び少からず望の金を渡すべし此方へと與の
 一間は誘ひつゝ珊瑚の柱に那瑠瑪瑠及び琉璃を以て鑲めたる唐戸を開き給へば其眞面に三
 重の寶塔ありて其麗美ある事詞にも盡されぬ装ひされば目蓮の這の如何ある寶殿又侍る

と聞ける故龍王の其内へ目蓮を誘ひて先第一重の扉を開きて諸々の御經を拜せ又其次を開きて過去千佛の沙利を拜せ次に又一重を開きて此内よりして閻浮檀金を千兩或は又千七百兩とも云ふ是を敬しく錦の囊に納めて渡し給へば目蓮の謹んで之れを請取つゝ此功德は無量ありと贊嘆して其寶殿を立出けるに早元の座にあらゆる珍味を並べて饗應状されば目蓮の我此儘暇ゆさんと云ふにぞ龍王の先暫時留り給へ逢難き沙門の姿を我女の寶錦女無垢金女を初め八万四千の眷族等にも拜せたとし留る心を目蓮のはや悟りて茲に長居せば龍の眷族に引留れぬ又嚮にマ、夫よと手疾く袈裟を脱て其座に置つゝ大林を念じて忽ち容を隠しける扱又大林にては世尊の御前に月蓋長者の侍りて目蓮の龍宮へ赴きしを見て其安否を待ける時しも已に午の刻されば月蓋の家にては斯る取込の其中からも僂侍主も御寺に在せば世尊を初め羅漢達へ晝の齋を進らせんとて即座に三千人の齋を調理へて大林へ贈りければ月蓋の能も心附しと打悦びて是を舍利弗に告れば即ち世尊へ言上せしに世尊の進施の齋施主の功德あり我も進らん羅漢も進れど仰せあれば世尊へも膳部を進め羅漢達も一列に並びて齋を進らんとして三婆の偈をノフマクサラバ、マ、キヤタ、パロキア、イ、ナンサンバラ、

サンバラウンと唱へけるに世尊も御箸を取給ひて若得食時當願衆生と唱へさせ給ひしが忽ち御箸を措せられて立せ給ふ故羅漢達は何事やと猶豫所へ北の椽より目蓮の入來れば世尊の左りの御手を舉て解脱の御杖を開き給へば目蓮の携へたる閻浮檀金を御杖の内へ納めしうば世尊の目蓮の頭を二度撫させ給ふ形狀を月蓋の打守り居けるが其座を進みてわら不思議や目蓮殿の何の因縁に依りて斯る不思議の神通ありやと問ければ世尊の渠の先つ世尊の敷者されば寶を以て親を孝養する事適いぬばとて惡き路の邊を平らげ又の渡りあき川へ舟或ひの橋を架たる其功德に依りて今世の飛行自在の身とありしうば我今頭を撫て其を褒美せり今渠が龍宮へ往返せし時刻を漏り見るに此齋を調へる其際ありきいと齋を進れど座に着給へば富貴那の目蓮に齋を進れど云へば目蓮のイヤ長者の齋の我戻る道にて一會の大衆と同等箸を取たりと云ふを聞皆々其神力を感じける諸世尊の羅漢達の齋を仕舞たるを御覽じて月蓋さらば今より汝ちが宿へ赴きて望を達せんとて即座に羅漢達を引連れ給ひて大林をぞ出させられしが途中にて月蓋に向ふて先づ頃汝ちが家へ分に赴く時の此の道筋の地獄道なりしが今の又極樂へ出るの道ありと仰せあれば月蓋の赤面しつゝ頓て宿へ赴き看には

長者万燈



千三百四十二

や三尊佛の毘舍利臺上の西の樓門の上に立せ給ひて金光を輝かせ給へば國中の外道魔神の皆逃去て人馬鳥獸に至る迄のほの病も瘳らず癒て萬民渴仰する様あれは世尊の月蓋の庭前を清めさせつゝ清き鉢に彼の閻浮檀金を入れて御袈裟を以て三尊を招かせられ印咒を結び給へば不思議や三尊の光明の鉢の内へ輝きければ恰も鏡に羅し如くにて檀金の沸上るよと見へしがわら尊や忽ち三尊佛の御容とありて夫よ

りも光明を放ち給ひて虚空へ飛行して本佛に並び給ふ様を月蓋を初め親族の者共の皆を感伏して拜ぬ者のありしが如何なる仔細にや六躰俱に西方の天へと赴かせ給へば月蓋の大音に之れを惜み歎きて世尊に嘆にぞ世尊の微笑まじくて心安りれ今本佛の本土に返らせらるれども新佛の隙なく戻らせらるゝと宣ふ所へ果して新佛の戻らせらるれば世尊の自ら姫の居室へ安置し奉りて羅漢諸共に御供養ありて大林へと戻らせらる諸此三尊佛の後又西國に渡りて一千七百年御座在しか夫よりして我國へ渡り給ひしに守屋の爲に難波の堀江に沈み居給ひしを本多善光と云ふ者が背負ひ奉りて我本國又到る是れ即ち信

貧女一燈



濃國ある善光寺の御佛は是なりとぞ。去程に月蓋長者の娘如是姫の命助りたる其報恩の爲に三尊の光明を擬りて万燈會を行へんと日を定て件の趣きを大林へ言上し又我親族等へも觸けるに問も無く其日と成ければ遠近の者共ハ大林に集りて今日大長者の万燈會ハ見物あらんとて其時刻をぞ待ける内に月蓋ハ美々敷打拵にて如是姫と同じ車に乗て數多の眷属を引連つゝ道を練して頓て大梵の卒塔婆の下より歩にて大堂に入が否や一時に万燈に火を點じければ花紅葉の譬へハ愚か宛然星の天降りて天地に輝く如くあれハ參詣の群集ハ眼を驚かして此世も來世も金次第あり羨敷ハ長者の身とぞ贊嘆しける頓て世尊を初め羅漢達も皆本堂へ出させられて諸神の御名を唱へ或ハ十方無量無遍恒河沙數不可思議の諸佛を讚嘆して御供養の其半に舍利弗ハ粗末ある燈籠を持出て万燈の中へ釣ければ見物の者共ハ目々に此万燈の輝く中へ那の見すぼらしき一燈ハ何の功德にある事ぞ月夜の筈なりと笑ひつ誹りつする其時しも一塵の塵の吹來りて万燈の火ハちらちらとちらめきしが残らず滅てあら何とせん一時に暗とありければ群集の者ハあら恐怖や怪しやと騒ぎ惑ふ其中に初めの有か無かと誹りたる彼の一燈の光りのみハ万燈にも勝りて輝きければ月蓋ハ堪へ兼て世尊の

御前へ進み出て今万燈の火ハ風の爲めに一時に消るハ是非も無れども那の一燈のみ消ぬを見てハ那處ころ外道身の者我佛心を妨ぐる業あらん急ぎわの一燈を打破りて再度万燈を輝かさせんと述べければ世尊ハ能も問たり今其仔細を委敷言聞さん汝ちハ佛門に歸し乍もまた名聞を飾る万燈あれハ其消たるを見て來世の暗をも思ひ知れそも貧乏者の施物とせし那の一燈を誹る驕慢心ハ即座にランパヒランパの國風とありて忽ち万燈を消たるハ是自業自得ならずや如何に舍利弗彼の一燈の施主を是へと宣へハ舍利弗ハ厨の片陰よりして一人の尼を連來りて月蓋に打向ひ如何に長者定めて此女を見覺へあらんといふにぞ長者ハある程渠ハ我下司の利徳あらん然ハあり日外や貴殿の方へ我ハが分に赴く道にて渠世尊へ値遇し奉りて尼とあり夫車匿悴林丹の菩提を吊ふ身とハ成ども初生の小屋のわび住居あれハ法施にする物もあければ迫て羅漢の衣服の穢ありども洗を功德として居たりしが今回貴殿の万燈會を聞傳へて此法會に結縁したとて切し髪を二錢又換て一燈を携へ來れども見らるゝ如き姿あれハ人中へも出られぬとて厨の陰に身を潛め云々の物語りを能く推量あれと述べければ世尊ハ辱けなくも利徳の頂を撫給ひて進施の一燈ハ万燈に勝る功德あれハ風雨の爲

めに消ぬ光りを見て後の世を安心せよ夫悴も今ハ早や得脱せり汝ぢも亦た三十一劫を経て燈光如來とあるぞと宣へば月蓋の之れを聞よりも利徳の手を取てあら羨まじや取じき此老朽あり千万金を費して功徳にあらと思ひの外内外の者に恥を晒せり是を見て越方の恨を免して今よりの法の友に成てたべと下司の手を押戴く長者の誠を御覽ありて世尊のヨヨ長者出来したり今の一言に依りて臨終の罪障ハ消滅せり今其効をイテ見せんとて其儘御印を結び給へば不思議や今まで無明の暗の万燈も自から再び元の如く耀きければ月蓋を初め親族等の面々に至るまで万燈の火と侶俱に蘇生し心地して此時初めて誠の信者といかりて過し穢名を雪ぎける

釋迦八相倭文庫五十七編終

釋迦八相倭文庫五十八編

夫れ天下の名玉も其光りの現れされば石瓦の如くどうや然らば夫に均しき法名の母清羅の世に尊き賢女あれども時至らずして悼しや我子の切ある遺書を看て悲歎の泪に眼も泣潰して黒白も別ぬ身といあれども子を思ふ闇は愚痴とありて家の内を探り索て我思ふ品々を手頃に押包て背負つ竹を杖として若しやと思ふ心より常に薪を拾ふ嶮き山の九十九折を苦もせず法名の在さぬ我子の何處ぞと呼子鳥わら嬉しや今答へし法名ありと再度呼ばも思ひぬ女の一念強くも五体の勞れ果て足腰痛みて木の根に嘸き岩根に轉びつゝ見へぬ眼よりして溢るゝ泪を押拭へば袖潤へども聲の枯野の蟋蟀通りく不圖も家路の方へ廻り出岩根を探りて腰打掛ア、情あや是も宿世の約束事よ神佛の如き聖りだにも世は遇て常に貧苦を爲ると聞ば我々の貧苦は是非も無れど余りと云は情あし親として唯一人の子を養ふ事の出来ぬよりして杖柱とも頼む我子を不便や失ふ事にもありぬ开も天の祿あきに民を産すと聞けるが妾二人の何故に祿も無して天道の産せ給ふか恨めし、斯く眼さへ見へぬ上

の争て思案も有べころ子何様ぐ致もせん筆そ一思ひに此身を投てありとも死がまじあ
 りナ、夫にの見覺へのある彼の裏手ある土橋ころ宜けれと其所にて覺悟を極めつ、隙ま行
 駒の足取もまどろもどろに歩み行て橋の上より臨み觀れば混々ど流る、水の音より外に人
 音もあければ那方の天に向ふて今が此の世の別れあり法名の何處に在する兩親の不運を憐
 みて必ず強面親と恨んで呉れ其方々孝々の忘れのせぬぞ何率今一目逢て死たしと最期の泪
 の恰も雨の如くに落ければ不思議も法名の容の目前に現れければ思はず聞をふり揚てヤ
 ン法名う懐しやと手を差延しガア、我ながら愚かあり心に逢たひくと思ふ迷ひにころ川
 の中に人の居るべき謂れもあしと既又身を投んとすれば又もや法名の姿現のれて死の易し
 生るの難しと云ふを聞より這の不思議や姿計りう今物言しと須更猶豫しガイヤく此も心
 の迷ひぞかし然れども双手を張て川底へと一思ひに突ど其身の飛入よける然れ清羅の川中
 へ飛入しに違のねども不思議と元の所に猶有る夢の如くに駭きつ、今死の易し生るの難し
 と聞へし果して法名の一念り但し我心の迷ひにもせよ斯る奇異の事ありて今少し尋ね
 て見んと自ら心を取直して夫よりの又も足任せに尋ねけるが竟に知ぬ市へ出つ、我子の童

子に在さぬと叫喚する者うらふ市の童等の友を集めて童子替の狂人を嘲つて遣らんと杖を
 取又往先を妨ぐれども固より柳のもつれ髪風に逆のぬ優しさに悪童の親達の其を氣の毒
 かりて食物杯をかひ包み後より追掛往て是を進れど渡しければ妾の食物のほしくあし何卒
 我子に會せてたべ童子の在所を教てよと聞も憐に鳴鳥夕告鳥も栖に入る日のとぼく、此
 市の年寄の妹へ走り来ていふやう子を尋ねる人を見ゆるが何處の者にて名の何と聞けれ
 ば然れ妾の舍衛國の片傍りに見る陰もあき羽生の内に親子の住る名を云ふ迎も知る者断
 てあし我尋ねる子の年の八才にて名の法名と云ふありと告げ、れの如何様其様呼名を未
 だ聞ず舍衛國の聚落の音に聞へし街道おれば人の往來も繁きゆへ其道に出て數多の人に傳
 へるに遅くも知ぬ事やある此先辛苦を盡しても由縁なき地の益もあし此の年寄の悪き事を
 教ぬ程に今宵の我方に休つ、明日古郷へ往れよと教ければ是の宜事を云ふて下されたり如
 何にも其事あり子よ逢迄の眠たふも無れば少も疾く其處へ往んずと一心不亂杖を頼に夜
 道を歩行て其翌朝の舍衛國の街道へぞ出にける宿妓の元憐み杯請ふて能く知る家のわれは
 先財徳と云ふ者に便りて云々の事を語りければ僥倖に橋の元に明地のわれは夫へ飯小屋を

掛て取すとて奴僕に木竹庭ちと持せやりて形ばりの小屋を造りて與へければ清羅の是を深く悦びつゝ、晝の小屋の外に出で年八才名法名知る人有て教てたもと往來の人聞へつゝ、又夜に入つ小屋の内に入りて楚を垂ちがらも橋の上に人音さへすれば晝の如くに呼ける折しも此所の長者ある摩訶南の今月蓋の方より戻り來りて橋を渡りしに見馴ぬ小屋の出來て其内にて怪き事を云ふ者うら供の燈を我手に持て小屋の内へ差入て何奴あるぞ此所へ誰免してむさくるしき事をせしぞ此物騒ある時節も知ぬ不届者は一面を見せよと囁付やうに呵りければ清羅の身も縮上る程に恐れて慄く探り出其咄咄恐れ入るあり然るがら妾の怪き者よての聊うもあしといふに長者の「馬鹿を吐せ何様を怪き者ありとて自分うら怪敷者と云ふ奴が有者う見れば女の物貰ひあり其方の様は唯人の物を貰ふて喰潰すゆへ頃日の米の直が高ひぞ手も足もあなる女あつらへ機を織ども糸を取どもすれば糊口の出來る者そのらくらとして世を渡る事の嚴くあらぬきりく其處を去ぬと縛目に縋りて引渡す所が有ぞ我見る前て往ふれく」と責ければ清羅の「ハイ」今宵の中も身を售たる子の行方が知さへすれば御禮を述て立去ますゆへ追て今宵一夜さ御勘辨と云へば「イヤ勘辨の出來ぬ

其身を售た子の名何と云ふぞ「我子の名法名年の八才に成まする」扱の夫てよめた己の中々太ひ奴あり見度てもあの子を大金千兩にて月蓋へ賣附て其態をして居るに定めて仔細があるべし夫を聞いて彌々置ぬ其千兩の金を渡さへ何迄も置て遣るべし我地の内に唯貸所の少しもあし是れ能く聞千兩の金を取代りに汝ちが子の山神の犠牲に供りて何の事う早命のあし我子を金で殺す者の犬猫にもあるまじサア金を出すう立去うと小屋を蹴倒して罵るに此世の鬼と知れける斯る所へ摩訶南の怒りの聲音を聞附て財徳の走り來り先摩訶南を押隔てつゝ、お腹立の尤もあれども決して怪き者にあらざるの我能く知ゆへ須臾が内我に此處を貸て下されとて長者を無理無体に其場を退せつゝ、打毀したる小屋を大畧は結び繕ひて泣伏たる清羅を呼起してコレ「今心安うれ慄貪の正札附と諱名する長者のどの誰も知りぬ大畧小屋も繕ひしゆへ茲へ遣入て休まれよと最懇切云ければ清羅のいふやう最前よりの仰せ事の有難う存じます子に會んど思へばころ生取も搔ものを我子の已に山神の御供とされば最早妾の生ても詮なき躰ゆへ今宵の内に死ますると云張りて更に面を撞くるゆへ財徳の聞兼ねてアノ長者の云ふ事に何て誠が有うぞや其様を事に氣に掛すとも尋

ぬられよ日外法名が我家へも來た事の有る其方の子あれども懐しく思ふなりと云へば清羅の涙あがらに貴方ほどの様に云ふて下された迎那様も言れし所に争て居らるべきぞ然るも我れ其處を思ふがゆへ今茲を借たる故改めて我れより其方に貸す時の長者に恩の更にありし此夜更に何處へどうして往るべき氣を取直して居られよ今に便宜も知るともあらめと世にも優しく云ければ清羅の両手を合せつゝ有難ふ存じますすれからばお詞も從ひますとて立戻る財徳が後まで伏拜み軒に巢を組蜘蛛からて仮家の破れをば取繕ふぞ哀れある○夫れ天定まらざる時の人天に勝天定まりて人天に勝事能はずとの真あるうか然る先先に説し衆龍王の山神の名を騙りて犠牲を取しが今天定りて佛法擁護の神の謀計にて不圖法名を犠牲に取て拜殿に至る時衆匪の通力を以て法名を見るに豈圖ん是れ我身を亡す者ある故俄に三熱を發せし上に身の瘻の堪難ければ洞の頂きを突破りて出しし是れ先に天地の震動せし事有しが其時からん夫どの知らず法名の洞の内へ入りて難途が吾身を清めたる劍を錦の囊に入れて渡しつゝ是を岩屋の中の山神に捧ぐべしと教しうば其如くせんとて黑白も別々洞の中を窺ひ見るに渡すべき山神も見へずして幽々鐘の音を聞けるが其傍らに人の屍あぞ

の有ければ法名の我も斯の如くにある事りと案事ながら唯母の無事をのみ祈念しつゝ猶豫けるに洞の頂きに火焰の見ゆれば是唯事ならず仮令身を賣べとて其故も知らず死るとの口惜や斯る時に臨んで只劍より外に頼む物のなし僥倖に此劍を身の守りにせんと雲より取出し抜放ちて能く之れを眺むれば其光りの恰も氷の如くにして閃々たる中に移る餘を見て駭きアラ不思議や我の瑤瑤の冠りを戴きしに影に其瑤瑤もあくして年寄たる人の影の見るが此れ違ふ方無き我三才の特別れたる父の面ざしあるべし我れ幼き時父に別れたれば今其面貌を能く知ぬとも日頃戀しく思ひ寐の夢も見たる顔に其儘あれば此劍こそ父の賜物あれと押戴く折しも風の腥さく吹よと覺へしが萬雷の一時に落たる如くに邊りを轟くせて龍女の岩根にぞみて口には血を洒ぎ手に人の頂を引提て火焰の息を暫時吐つゝあら苦しや無念や其處を稚よく聞今の汝ちに隠すも隠されぬゆへ身の眞を明すあり我の眞の山神も非ず實の歡喜大王の女衆匪と云ふ者にて此山に住山神の名を騙りて佛法信者の子一人取喰ひての百人の魔人を現し早是迄に犠牲を取しも多ければ今魔神の夫に百倍せしに乾陀標めの怨心にて汝を千金にて月蓋に賣しより我茲の住居も是迄されぬ最前汝が洞に入

以前の龍女が云ふやう過去を知る事斯の如し今一度眼を閉よ未來の状を見せしめんと云けるにぞ法名の再度眼を閉けれバ今迄紺瑠璃の地も忽ちに草花々と生茂りたる荒野の中に數万の蟻の群り居れば法名の心の中にて茲に開も如何なる處と念ずれば一匹の蟻忽ちに沙門と化していふやう此處の昔世尊の佛法を信じて須達長者が大金を抛ちて光りを輝かせたる祇園精舎あるが末世の今に至りては佛法も已に退轉して國に法を守る者も亦なくして遂に斯る荒野と成果て今昔しの金閣の草葉の露の玉と消へ唯朽殘るの苔蒸たる柱石のみありき此數万の蟻の其精舎に住し數多の佛弟子ありしが法滅の時節に至りて皆破戒無慘の罪を作り佛の戒めを背きし其報に依りて今蟻となりて茲に輪廻するあり我も亦其中の一人ありと教しうバ法名の駭きつゝ眼を開けバ以前の龍女又いふやう未來を知る事斯の如し况んや現在を知る事をやいて佛法の淺間敷事を論せば今より速くに我法に歸せよと其處を宜雅賢き子と促しければ「汝が法に歸せば何とするや」我法に歸せば世界も有と所有虫の司となりて鱗ある者の皆我臣下あり又何れの池にても魚二千六百の數に滿れば我其地に行て其長とありぬ早世界の地に於て佛門を信せずして我眷屬とある者又其數を知ず其上に我父歡喜の怨

念を繼バ瞿曇を破滅させて我妹の鬼子母摩尼鉢及ひ姪の千子をも取戻し其上に八大龍王の頭とありて万劫盡せぬ樂しき身とあるの如何に「汝が左程の奇特を持あがら今天地四方に住事も成ぬどの不思議あり」此跡の世の飯物かれバ棄る時到来れば恰も鬚眉を捨るよりも易し汝見ずや野邊の草木の枯るども一念の根さへ絶ねバ又も花咲春の有ものありイザ我徒よかれよ「イヤ成まじ先に破戒すれば沙門も蟻と成て輪廻するとの因果眼面を論すも此佛法の徳にあり」汝が執念く我が眷屬とある事を辭バ千日の問汝が其爪の問を我栖に貸せ千日に及ば、我必ず佛法を破滅させ夫を見せ我徒に入ん「汝が我爪の間が栖と成や」爪の間の愚かり小身を現する時にしやると云ふ虫の腹の裏にも住又大身を現する時の七金山を七廻りも卷或の星とあり又人となりぬる其通力の自在なれば我毘舍利國を惑す時に宮中の床柱の節の穴に住て國王を誑りして國中を我物と爲し國王の名をも竟に惡毒と呼せたるも此れ我力あり「汝が毘舍利國に因あらバ高祿と云ふ者を知や」其高祿と云ふ者の唯一人り我法を妨げて國王を諫しうバ我國の寶傳國の劍と千香の玉を盗て渠に自滅をさせてより獨り我儘自在を働きしが過し頃我眷屬の跋難陀といふ者過つて彼の王の牛を取たるに依

りて罾罟の徒弟等其隙を附込て竟に佛法に歸依させて我法を妨げしが夫も千日の内に我物にして王の鼻面をこすりて呉んず「其奪ひ取し二ツの寶の如何せしぞ」「其傳國の劔此拜殿にて犠牲を清めさせ即ち犠牲に其劔を持せて洞に入れ是を我に渡す我其手を取て犠牲を喰ふを神とす又千香の玉の格別光りも無物ゆへ舎衛國の山中へ棄置ぬと聞て法名の扱の紛ふ方なき父の敵にて此劔の即ち國の寶さればこそ不思議も有しり是天の與へかり仮令命を失ふとも杯り此場を見通さんと件の劔を扱手も見せず一念凝して飛掛り我こそ其高祿が子息法名と云ふ者あり父の敵國の難世尊の罪人思ひ知と切掛し瘦腕に神佛の護りも有し一太刀に其首を打落しければ首の忽ち虚空へ飛のぼりて火焰を吹又骸も瞋恚の餘りにや切口よりして火焰の出で首諸共瞋火に燃盡せしぞ不思議ある此時の早夜も明方に及びて晴天と成たるに鉦太鼓を鳴して大勢が篋笠に柄物を携へて茲へ來りて山神の社の焼失たるを見て打駭き邊りを見れば岩根の上に一人の童の氣絶したるを見付て恐怖近寄つゝ夫ある此山神にて御座在りと云ければ法名の不圖心附イヤ我の夕べ此山の犠牲に供はりし者あるが運命強くして父の敵國の難又佛法の罪人ある此山神を討取たれども痛其惡氣に惱されし

が今のはや心の慥ありと口にい云と最五体の勞れたる状あれば村長ある者近く進み出て實に御手柄駭き入たり我等の此邊りの者あるが此山に山神のまじくてより毎々田畑を荒されて困窮に及びけれども只神の業と諦めて居りしが昨夜の荒にて家作を壓され人死も御座れば此上の神でも佛でも堪忍成ぬとて一同命を的に掛て妻子に水盃を爲して此社を打壊しに來る所あるが今其方の御働きにて惡神を退治給へば我々の幸ひ此上も亦し兎も角も我等が方へも連ずて御介抱致さんず夫々と數多の者に指揮して法名を勞りつゝ連立ければ死を決たる數多の者の勞もあくして功の立しを打悦び初めに異りて聲音も高く一同豊年くと勇立頼て村長の家に入て厚く介抱さしけるに固より天運の強き身あれば間も無くして快よき状を見ければ此家の主の種々の饗應を持出て嬉しやゝ早速に御快よきこと幸ひあり今改めて云ふ事ありぬ开も御身の何方の御子にて御座在や包ず御名乗れへ我々が爲に大恩人されば御身の族を今より是へ呼取て永く養育さん斯る御方に隠すの返て恐われの有し事どもを告るあり昨夜此の邊大に震動して荒渡り人死も多き中に不思議と南風に金の交りて降しを拾ひし者も夥ありぬ其仔細の未だ分らずと語りければ法名の點頭て今夫を思へ

乾陀婆と云ふ者我身の代金千兩の一を渡して後を己れが懐にせしを彼の山神に擲れて
 虚空を引れし時落し散せし物されば彼の山にも未だ有べし是所謂天の與へされば普く拾ひ
 取て是迄不作の不足を補われよ扱我の舍衛國の片傍に母と俱に在しが貧苦に迫りて身を
 賣たる法名と云ふ者ありと語る折柄表の方に大勢の人音して一人の沙門が先に立て我の世
 尊の徒弟ある阿那律と云ふ者あり此家に法名といふ者在せば夫に對面致したしと有ければ
 是非も亦く居室へ案内しけるに阿那律の上座に直りて如何に久しや法名どの御身の形勢を
 世尊の祇園精舎に於て已に逐一知し召るゆへ我を擇び其御使にお越されし事之餘の儀に非
 ず毘舍利王の未だ御世繼も無に豫て入道し給へば世尊の深く其方を憐み給ふ御一念の天に
 通じて忠孝全き時節今到來すればとて先の日未然を察し給ひて毘舍利王へ御世繼の太子を
 奉つらんと約し給ふに何が扱世尊の御媒妁ゆへ重役を初め誰有て是非を云ふ者も亦く已に
 今我を案内として毘舍利國より玉の御輿を昇せて其方を御迎に參れば直に其役人へ對面
 れど其座へ夫々の役人を進せてければ法名の打駭き寔に世尊の神通力且の貴殿の天眼通不
 思議ども又有難しども詞に述難ければ我の開も賤者あるを以て争て國王の位に即べき

謂れやあると辞めば阿那律のやう開の理りされども一度世尊の結脉を受れば即ち世尊の
 子あり豈憚りの有べきかど無理に勸る折柄此家の主が進み出て恐れ乍ら私し此村の長に
 侍るあり此御稚の我々の爲に大益有べ何卒茲に留め置せ給ふやう願ひ度と述べれば毘舍利
 の役人等開の尤もの願ひされども是の元我國の重役ある高祿の伴されば他へ譲る事もあら
 ず如何に御方いさせ給へど勸めければ法名の無狀様にて寔に天の與へを受ざれば却て禍
 ひ有ぬと聞けるが吾の是より先母の許へ參り度ゆへ暇を給われと云ふ阿那律の母人の其方
 の後を尋ねて今の家に居らぬと聞け夫に附ても疾く王位に即て速に國中へ宣旨を下さば忽
 ちに其在所も知れ母の悦びも如何あらん時移りて我等の失策あり世尊も今王宮に待せ給
 ふいて服を召替給へとて已に取認めたる形狀されば此家の主も是を見て今是非も亦くしと
 て村中へ残らず觸を廻し家毎に或の七五三を張せ盛砂をして道を清めつゝ又御迎の者へも
 手厚く饗應て我家の幸ひをぞ悦びて頓て法名に暇を告げれば問も無く御輿を昇上ける去程
 に太子御迎の人々の道を急がせけるゆへ日あらずして毘舍利の王宮へ着ければ先世尊の在
 す方へ案内せしに法名の世尊を拜し奉りて身の上を述んどせしに世尊の直ちに法名の御前

に連出給ひて是ころ君の臣家ある高祿の伴ありと御披露あるゆへ法名の法王を拜しつゝ身の上の事を具に奏聞して彼の携へたる寶劍を奉れば法王の夫を受取給ひて法名の頂を撫させられ扱も父高祿に能も似たり我父の諫を容すして國を痛く乱せしが世尊の慈悲を以て惡法を改めし已ならず國の寶の再度宮に入からん今より汝を以て太子と爲ゆへよく國家を持給へ扱衆匿の手に千香の玉の無りしかと宣へば然れりあり千香の玉の光りも無ればとて舍衛國の山中へ棄たるよしありと申上れば然れば夫を索ねて國の寶を二つ揃へたる上にて賊祚の披露を四方に告んとあれは世尊の曰く千香の玉の法名位に即ち自ら王宮へ入ん急ぎ其夜も明る日とあれは法名の玉の冠りを戴き王衣を着て大王の座に着つゝ群臣の敬賀を受させ給ひて其日より法名王とぞ披露せしか昔を知る者共の忠義の人の寶あり高祿の忠死の子を以て世に現れしと賞賛せぬ者あり斯て法名王の一の大臣を召れて我身今政事の始めに當り先忠孝の道を先にせんと思ふあり夫に附我母あり貧苦に逼りしゆへ我身を賣て其まゝ別れたるが今の家に御座在ぬと聞け何卒急ぎ尋ね進めて此宮に迎へ入れ

たし御名の清羅と名乗せ給ふと告ければ大臣の實に御尤もの論言あり其儀の疾く阿那律尊者より承まれば君斯成せ給ふ上の乘置難しはや御在所を尋ねさせ侍れば御心安かれと言上する處へ奏聞の役人の進み出唯今舍衛國へ赴きし檢非違使が立戻りて云々の橋の邊に怪き小屋を作りて童子懸しやと呼盲目の女われは邊りの者に尋ねければ身を賣たる子を尋ね者といふにぞ諸の尋給ふ御子の御名の何と名乗給ふと聞進らすれば法名ありと宣ふ故に然らば我と俱に毘舍利國の王宮へ參内めされよと勸ければ其毘舍利國の我古郷あれども我良夫の君の御心又適ひて果られてより親族の目も懸す夫より斯く流浪して此様にありたれば君より召請れもよし我も參内する願ひもよし唯願ふに我子に逢たき計あり會せてたべど我手を取て泣給ふ已にてはと言上すれば法名王の御涙にくれさせ給ひ我母の御事をのみ案事て夜の目も合ざりしが今御在所の知る上の直ちに其所へ自ら赴きて連奉らん尤も其川意の穩密にせよと宣へども新王此度初めての御幸といひ殊に他國のとあれは迎御車も美を盡し御供の大臣達の云も更あり群臣仕丁に至る迄皆服を改めて御供に列ありつゝ程なく舍衛國を指て入せらるゝに是を早其邊りの者の聞傳て世に珍敷御幸あり我もくど老若男女の見物

共の各々押合て橋の麓の小屋を竟に押倒せし清羅の此れ何事やらんと片端に身を縮めて居たる所へ檢非違使の邊りの人を追拂ひて御案内をさしければ法名王の願て御車より下させ給ひ一目母の御姿を御覽するに色黒々として面疲給ひ御髪のおどろに乱れしゆへ儘に夫との別たねども衣服の固より襤褸の御覺へわれ近々と御前に進ませ給ひ是の如何なる御姿と泣伏給ふ御泪の玉の冠の紐に傳りて砂にまぶるゝも知し召す須臾歎かせ給ひしが稍有て御泪を拂ひせ給ひてノッ懐しや母人我の法名にて侍るあり斯る御身に爲せまじと心を盡せし甲斐ぞあき左のわれ生て見ゆる事の夢の如しと宣へばわら怪しや妾が眼の見へぬ迎我子の音聲を作りて又何者の嘲るや今毘舍利國の帝の御幸ありと聞け古へを思ひれて見へぬ眼にも拜みたし其處退と押遣れは其御手を取て押戴きアラ情なき御身との成せ給ふ者か我の毘舍利國の王と成て今名を法名王と披露せり茲へ來りたるは全く母人を迎へ奉つらん爲あり此玉の冠を御覽せよと返答させ給へば清羅の能々探りつゝ遣り彌怪き者あり我子の物乞とあらば實にもと思へんが國王との思ひも依らず實の國王あらば妾如きの穢れたる手の餘も取じつちつま合ぬ事をして我包をも取巧みあるか此中への金錢のさし只我子の遺

物の書置の外よりの眼を懸る物のさし疾と退よと杖を振上げて打計りの形狀されば法名王の其座を退き給ひて母に仕ふにの理を理とせざる例有りとて玉の冠りを解綾羅の王衣を脱棄給ひて御車の舍人の服を上に乗せられ平人の容にて再び母の御手を取て我こそは實の法名あり我身の代に添し此身の見覺へ有んと親しき詞に那處此處と撫摩り給ひしが是の實の我子ありエ、懐しや法名かと抱き附て泣給ひしが稍有て宣ふやう汝が何故に身を售しぞ汝令千金万金たりとも争て子に増物のあるべきぞ其身の代の金と云ひ全く偽り物との知ずやと聊か御心の安堵させ給ふを見給ひて私しの身を售云々の事よりして本國の太子に備はりしが御心を休めん爲に今舍人の服にて見へたり其仔細を委敷語り侍らん先我王宮へ入せ給へ茲の道中のとゆへ長居せし市の妨げあり疾々と勸めければ夫の奇異の事あるが其仔細の退て聞もせん汝が今大國の王と成れば我願ひを先適へて見よとの仰を聞て國王の夫の何ありとも望み給へ然れば此等一面の地の摩訶南長者の物と有れば是を母に求めて呉よとのとあらば仰せ拜承しとて即座に市政の役人へ命ぜられければ役人の直に摩訶南を呼出し此一圓の地を求めん事を云ければ摩訶南の恐怖と出しが地面の事ある故欲心を發して先に須達が

祇陀太子の園を求めたる例に任せて地の有限りに金を敷給ひ、皆迄も賣んどあれ、然らば此一圓を屹度求めたる証に地割を添て本國へ持來れ地割に任せて金を渡すと云聞つ、摩訶南よりも其証を取て帝へ奉つれば帝の母上に今御望の適へりと聞ゆれば、あらず不思議や夫にて、實に汝の王にあり給ふ然らば此地を云々に計ひ給へと宣へば帝の仰せを受給ひて母君を初め自らも衣服を改め給ひて附々の官人へ還幸を促しけるに帝の御車を摩訶南が家先に留めさせて摩訶南と財徳を召出されければ、摩訶南の身に過りの覺へ有らば胸の中を蹴かせて扣へしに帝まづ財徳に宣ふやう汝は是迄朕か親子の貧苦を憐みし已ならず朕母の此所へ行吟來りしを勞りし事満足せり其報の爲に汝を初め是迄憐みを掛與し者へ普く此一圓の地を賜へば宜しく別ち取べし、扱摩訶南の儘に聞貧苦に迫りて朕の山神の犠牲に供はりて疾にも死せしが今本國毘舍利王の太子と生れて斯の如し朕母汝が地に暫時在て恤を受たる報に望の代にて此地を求むと宣ひければ、吠と計りに兩人共平伏あしつ、頭を土に着たる状の同く見ゆれども其志しは同じからずとて人々口々に云罵りつ、或の感じ或の譏り寔に昨日の襦褌を脱棄て今日の錦の袖を連ね給ひ古郷へ入り給ふ此御二方の實に神佛あるべしと數

多の者共の低頭して拜つ伏つ見送りけるの偏に天の恤ありと知られたり

釋迦八相倭文庫五十八編終

釋迦八相倭文庫五拾九編

過去人壽六萬歲の世に帝
 沙佛天眼通を以て未來世
 を覽みされ彌勒成道の世
 に釋迦有縁の衆生の人
 間に生じ護明正覺の時ハ
 彌勒有縁の衆生多しとい
 はれしより釋迦世尊深谷
 の岩窟に足を翹て頭上兩
 肩兩臂兩掌の七處に燈
 明を燃し七日七夜帝沙佛
 を讃嘆供養せられて佛法
 を信じ給ふ功德に依て彌
 勒同時の發心も九劫を超
 て正覺を遂られしとあり



釋迦八相倭文庫五十九編

千三百六十九

千三百六十八

釋迦八相倭文庫五十九編

夫聖語に古より皆死あり民信なくんば立すとあるの實に宜かる哉總て此世へ生し者の始
 め終の有りさながら東に旭の出て其夕西に入が如くかれ譬へ天子將軍の位勢あるも聖賢
 君子の道徳あるも病の有無に揭らず庶人普く通ざる其身を知らず信を棄て生を貪る者ありて
 人倫の道立ことなきされば信の諸道の根元功徳の母ともいへり諸毘舍利國の長臣高祿の
 男法名童子の年八才にして信と孝厚かりしかば世尊の執柯を以て臣下の身より王位に昇り
 幼帝されば輔相の臣を添られて百事自由あるゆへ國政の始めに先孝を以てせんと行方知ざ
 る母の有處を尋ね求めさせ既に聚落より同車まで還幸あり庭前の離宮を閑室とせられて國
 母の命われば御服所三食を進る膳司もあれど幼帝日々に輔臣を具せられて自から配膳の
 慇懃も又固からず心を慰められしかば或時母公備へ膳を傍へ推除られて幼帝に向ひ「斯
 日々輔臣諸共に見舞るゝの嬉しけれども又痛みいる扱御身能間給へ君を諫るゝ臣の常かれ
 ば其諫の納と納ぬゝ時の幸と不幸あるものゆへ譬へ諫の納られざればとて敢て君を恨ざる
 が誠の忠臣されば御身の父高祿殿の忠死といへども御勘氣を受し家族ゆへ妾御身を連て他

國へ移りしが其勅勅免て臣の本地へ立戻るさへ難有きものを御身の地虫の天龍とかりし如
 き立身出世の結構より妾まで斯の加く尊敬せらるゝ冥加の程の言葉を以て述盡されず是と
 いふも皆世尊の御影されば何卒今一度世尊の御顔を拜し度又御身の装をも見度思へば此
 美服珍膳を粗服麤菜に換てありども此開き眼を癒し度と物の見ぬと物を見る心の目より際
 り出る泪を拭いせ給ふより幼帝も涙に呉給ひて「ソハ御尤の御託我身も夫を念ずれ
 ば此程名譽を穿索致さすれば今暫し御不自由を忍ばせられよと逸途に宥め給へば「夫の何
 より忝けなければども妾斯成始めより心中に世尊を念じければ御身も名譽より是を世尊へ只
 管に願ひ呉るやう致したし「然らば自から此程大林精舎へ參詣して萬謝かたゝ願度一義
 もわれば其參詣を急ぎ夫をも歎願いたし御救助の仰もあらば早速告進らさん未だ國民の訟
 をも聞残す事われば又御機嫌を伺いんと其坐を立給いんとせられし折から古老の上階進み
 出て「御孝心厚く絶ずの御歩運誠難有し諸輔相殿に告まいらす昨夜中宮女錯つて此御
 閑室の燈火を消けるに不思議あるかを閑夜とひあらず其明き事白晝の如し妾年ふるく此宮
 中に勤けれども斯る例を是迄見し事なし是の正しく御母公の身に餘る御威光杯と局達を取



沙汰もあれど異し事ゆへに聞に入ると告れば輔臣眉を蹙めて「ソハ不思議あるかお譬へ母公に威徳あれど夜に闇が常なれば爾ある故に有まじく思へど是は凡慮を以て計り知がたければ明日陰陽寮へ相達して其善惡を占ひせんといふを母公聞給ふより「喃輔臣其事も相成可い表沙汰及ず夫をも幼帝より世尊へ聞へるやうに頼とあれは君臣共に詞を揃へて仰の如く仕つれば御心安かれと夫にて暇を乞れる情又六林精舎にて今日凡俗を除く法坐を立られしかば十大弟子を始め沙彌に至るまで威儀を繕ひ法堂の坐並揃しを見て長老舍利弗開口の啓を打鳴せば世尊獅子の高坐に於て頻伽の御聲を張しめられ「善哉々々我法敵たる爰匿龍王其眷屬等も法名童子の孝心憤發より亡滅せし善ければ又是が爲に張本の提婆達多千慮百計圖らざる怨念彌まし集に組す惡趣等も疾敷ふるに足ざるに及べども渠等の皆邪謀抜群の者なれば此先何等に身を變じて我徒弟等を恐惑さする光も見ゆれば其密計に落入者有ては法中の一大事あるゆへ夫等を防ぐ爲又惡魔外道退滅して世上普く我法界に靡き従ふ出家至要の法坐されば凡俗を除きしゆへ羅漢以下聲聞緣覺沙彌等の殊に是を能聞て身を堅固に持べし扱我法の世理を放れし甚深の意の智慧才能にての知こと難し是

戒持

を悟るの唯信の一方に頼ものあれば各々信を盡して能諸行の温奥を察め善智識と成て萬民を利益するに先出家諸門の掟に立る戒を能守るべし此戒の家を建る礎の如くあるものあれば是を持たざれば萬行も成就することなし又戒の百穀を實らす田圃の如くあれば是を持て百善の果福を受て一切の災難を除き惡魔外道といへども犯すこと能はず中品の凡夫にても一日一夜戒を持て其功德に由て必ず淨土に至る爾れども是の守り難きものあれば是を守るべき至要の譬へを示す今是處に艶色の美女立並て歌舞音曲を學ぶ其前を鉢に滿る油を汝等に持せて行しめ其後より其油一滴たりども翻すに於ての速かに首を打と劍を持者附添は其歌舞音曲を汝ら見るや見ざるや此の正しく見ざる者と思へど汝らの所意を聞たければ坐中皆其答をせよと捉し給へば大衆同音に夫の尊師の仰の如く其油の一命に替るものあれば誰も夫を一心不乱に携ゆれば其歌舞音曲に眼の移るものには有すと答へければ奈何にも夫あらん爾れば其油鉢の則ち戒なれば夫を其如くに能守る者の我眞の佛弟子にて能教に従ふ者といふ爲とも又歎息する例しあり前世狗樓孫佛の時に九十八億の出家禁戒を破りて皆龍の眷屬と成し者あり又狗那合佛の時に八十億の出家放逸邪見にして是又龍の中に

入たり今世にても未熟の出家互に法を争ひ猥りに經戒を誹謗せし罪に依て是も普く龍の中
 に生じて三劫の苦を受る者九百九十億あり斯の如く出家として後世の苦を願はず現世を錯る
 者多き中に又凡俗の身として現世に戒を能持て後世の安樂を求し者數多ある其一二を云バ
 既に此毘舍利國未だ魔界の樓とありし中へ我佛法時至りて入際の時ありしが此國の片邊り
 に住旃陀羅の家に七男子あり末の一男の未だ幼稚されば是を除き上六男と其母密に我佛法
 を誠心に信じけるゆへ終に六男の須陀洹果を得其母の阿那含果を得せしが此國の法として
 旃陀羅の殺業を以て世渡すれば今の法王其六男の上一男を呼上て國中の罪人を殺す役を
 を命じければ吾の疾戒を持て魚虫の殺生さへ致さぬ假令我一命を召るゝとも人間を殺す
 業の御請の致しがたしと逃げれば國王怒て渠を殺さんとする側へ尙進みよつて我身の此國
 の民かれバ王威を以て殺し給ふとも心の我物ゆへ我心を殺す劍の國王といへども持給ふ事
 おそらく有まじと恐るゝ色なく答へければ國王益々怒て渠を殺し又其次を召けるに次も又
 同じ答へかれば是をも殺し夫ら夫へと續けて六男を殺し終に幼稚の末子を召ければ是に
 の母の附添來を見て國王其母に向ひ先の六男も同腹の子あるに渠らに附添ず是に已附添

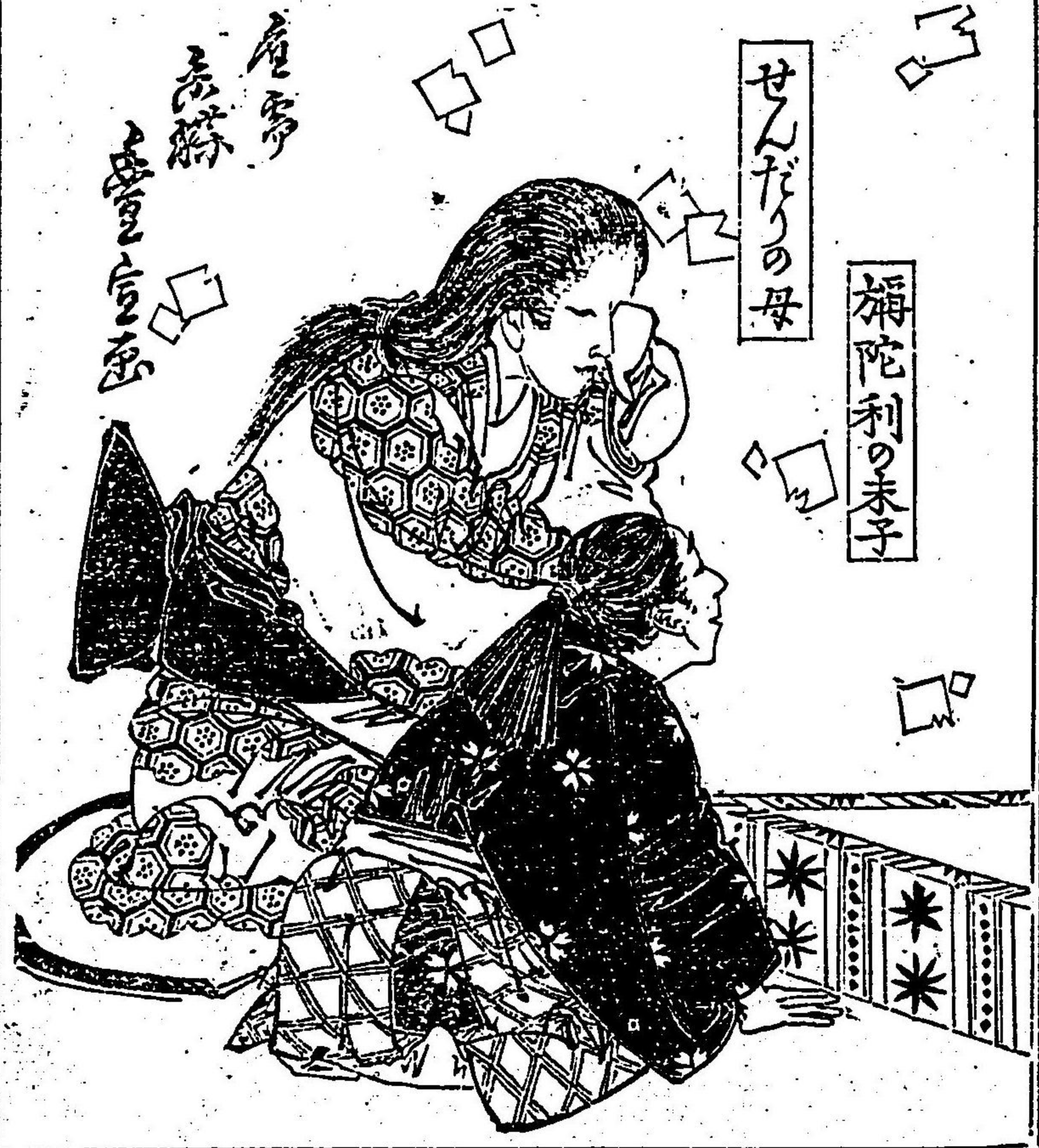
殺

來の如何と尋られしうバ先の六子の皆證果を得たれば大王身を粉に碎給ふとも惡意を犯さ
 ず此末子の未だ少年にして戒をも受ざれば凡夫心を以て大王の命に従ひ殺業を志して來世
 奈落に沈を專不便に思へば是に已附添し願くバ戒を得し妾を此末子に替て殺給ひ忝さし
 と逃ければ流石の惡毒王も此母子の戒を堅固に守るに驚き此母子を宮に止め置て我方へ戒
 の如何あるを尋られしうバ戒の假の身を厭す本心を未來永劫安住さする寶殿ありと答へ論
 しければ國王忽ち慙愧して渠ゆへ無上の寶語を得たりとて深く悦び其止まきたる母子へ衣
 食を授て家へ戻し其誅せし六男の屍を茶毘して厚く葬り六基の塔婆を建て國王自からは
 向ひて朝夕懺悔供養すると今に至るを汝ら始め庶人も是を見て能知どころあり此旃陀羅の
 緣者波羅奈國の屠兒廣額も彼六男の始終を見聞して我身も無數の殺生罪を負は是を遣んど
 舍利弗に附て八戒を授り一日一夜戒を持て死りしが其功德に依て後世北方の大主毘沙門天
 王の子と成ことを得たり此の如く戒の貴きものなれども凡身の意馬心猿を縛したる已あら
 ず菩薩より沙彌にまである其戒を數ふれば先三歸戒より五戒八戒十善戒乃至五百戒までの
 多數あれども諸比丘の專に持べきの五戒あり此五戒の中殺生戒の謂の總て生ある物に天

の與へる食の殺生といへども是の尤めざるものあれども凡夫の身に宿命智なければ我世をへだつ六親眷屬多生の物の親形を換たる鳥獸魚虫を猥りに殺し或の喰へども生ある物の命を惜むの我も人も同じことあるを知らぬ者も一時の甘味に他を殺して未來世其報苦を受ける者多くわり此殺生罪に又上中下の三種あり其下あるの鳥獸魚虫の類を殺す者の畜生餓鬼の中に墮て下苦を受其中あるの凡夫より阿那含を殺す者の三惡道に墮て中苦を受其上あるの父母河羅漢辟支佛を殺す者の阿鼻大地獄に墮て最大の上苦を受るあり此外故なく殺生を爲者の現世に於て福祿薄く多病にて又歿死をする者あり殊に子孫に祟りて五胎不具の者あるを見るべし六群比丘より我法中に入し黒比丘の迦留陀夷の前世羊を殺したる報によつて今世檀家の婦と奸賊の爲に殺され馬糞の中へ埋めらる又罽賓國の沙門跋摩の母の殺生肉を好みて是を跋摩に求めければ殺生の必ず報苦ありと肯いざりしうバ母汝が報苦に我代らんどいふより跋摩熱油に手を焼て母に此痛に代る事を乞は汝が身の痛を何ぞ母の代ることを得んと答へしゆへ眼前の苦さへ代ること能ずして况や三塗の苦をやと論しければ此一言に母の前非を悔て夫より殺生肉を喰ず祇園の尼院へ入て今維那を務めける又五戒の中

偷盜の堅く爲べからず人の天を見ざれども天の常に人を見て其善惡の報を與ふるの闇夜に物を盗みて人の知ざるが如きものいならず過し萬燈會の布施を罽尼吒國の夫人使を以て遣されしを三摩耶外道是を奪いんと姿を波羅門に變じて其使の旅宿へ合宿とあり言葉を巧て縁を結び其翌朝共に宿を立出道中にて密に草の葉を摘とりて其使に見せ今朝宿を立出るまされ此草葉我衣裳に附どもおらず茲まで來りしが我一生他の物を侵す業を爲されば是を戻し來まで此邊に憩ひれて共に精舎の結縁を頼みたしと述けるゆへ一樹の宿りも他生の縁あれば其奇特に感じて是に待といへば其場を去て木影に休み時間を計りて走來り我草葉を戻し來まで是に待吳し報に其包を我精舎まで持行んといへば其信を見しゆへ包を心置おく渡しければ是を持より早く逃走り其影さへ見失ひしが猶追りけて行山路に獸の嘯殺したる者あり是を見れば渠あるゆへ奪れし包も手輕く取戻せしと其場の有様迄を彼の者語りて布施物を納めしり皆知べし其三摩耶外道の提婆の看督使と稱るゝ豪傑ありしが三寶供養の布施を奪しゆへ現罰の斯の如し又五戒の中邪淫の爲べうらず是を犯す者の必ず劓林地獄を免れず彼波羅門の婦の奸賊との密通を他へ漏すまじと迦留陀夷を殺す已ならず馬糞の中へ

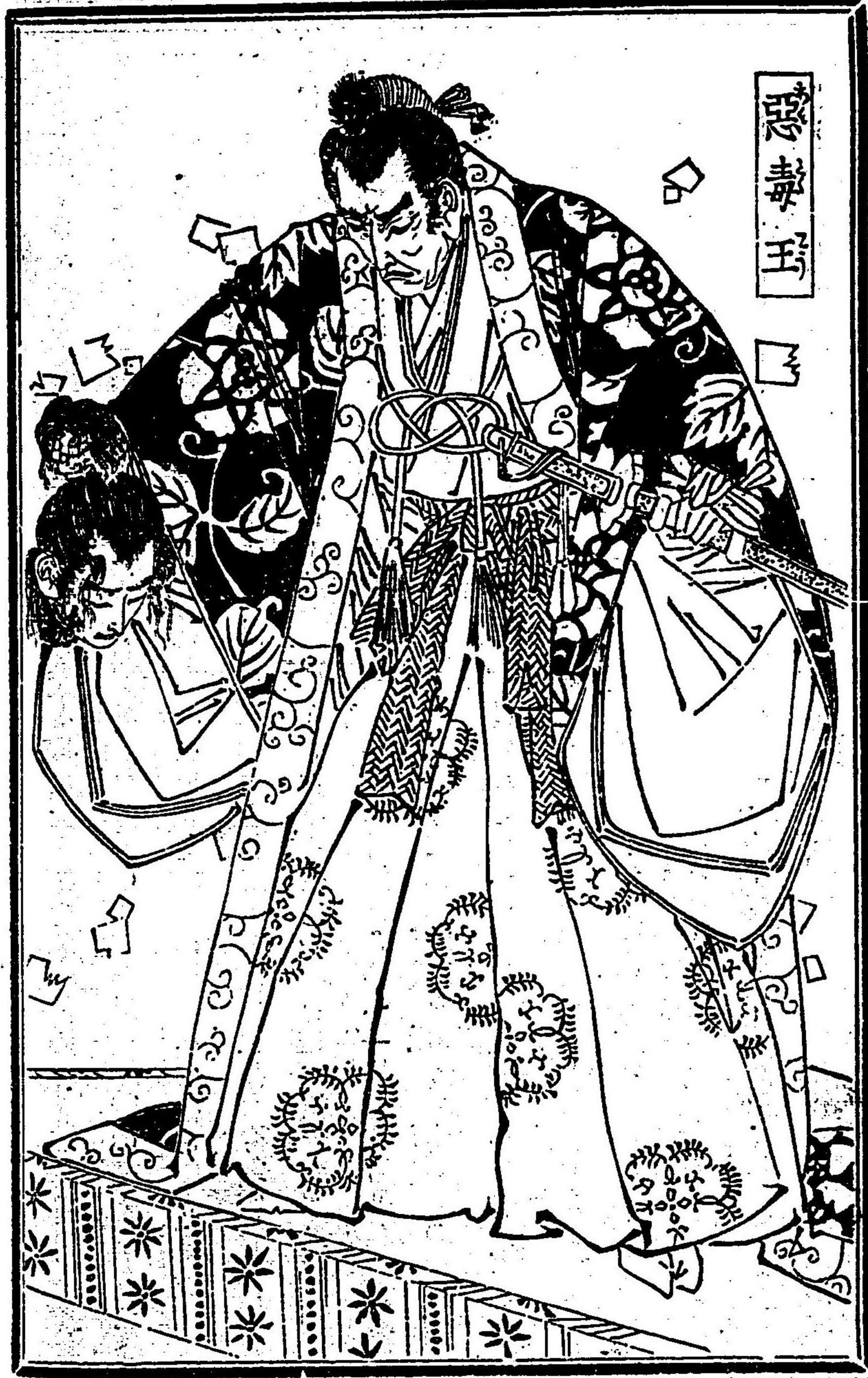
大莊嚴論の説
毘舍離國の旃
陀利の子戒を
守りて死なば
終り國王の大
供養を受ふ



せんだいの母

旃陀利の子

惡毒王



戒語妄

埋めたるを波斯匿王問より其憤り甚だしく其波羅門の家を始め左右十八軒を殺し其奸賊の
 同類五百の群賊迄を探り捕へて本人と共に手を斬足を切て搽り殺に爲られし因縁ある
 と、いひながら邪淫の報ひ怖しき事ならずや又五戒の中妄語毀謗の一言たりとも佛性の
 門を塞いで邪惑顛倒の道を開けば其報ひ三惡道を免かれず過去迦葉佛の時波羅門の子に迦
 毘梨といふ者あり此子聰明博識ありしが母の教へに従ひて持戒堅固の羅漢を百獸異形の身
 に譬へて罵り辱めし報に依て己今世百獸異形の大魚の身となり此梨越川へ浮び出て漁者の
 網に罹しを汝等と共に我是を見て迦毘梨魚と號け其因果を示せし事覺へ有べし我子羅喉羅
 も未だ道を得ざるうち妄語多かりしが越方我妄語を覆盆の水に譬へていましめしより能
 是を守れり又實語といへども其時に合されば綺語ともあり又妄語を以て人の命を救ひ助る
 智もあれバ夫等の意味の各々能分別して知べし方便と妄語の其趣同じけれども方便の露
 の如くにて芳草を生し妄語の霜の如くにて芳草を枯すあり又五戒の中の飲酒より三十五の
 惡疾われバ是を諸行を破る怨敵とも又人の出世を害す黒闇女ともいふあり今我法敵の提婆
 達多に紐す好古梵士の元陶婆塞にて我門弟となり性來氣力もよけれバ勤學に怠らず能五戒

戒酒飲

を持て仁惠厚けれバ日あらず上足の羅漢の部にも入べき身ありしが一時喉の渴を凌ぐんと
 傍にありし器を水と思ひて飲けるに夫の酒ありしゆへ忽ち酒氣腹中に満て心狂へバ其余り
 をも飲盡して飲酒戒を破り其醉に乗じたる處へ隣の鶏來るを見つけ是を盗みて偷盜戒を
 犯し是を又殺して喰ふがゆへに殺生戒を失ひ此鶏を隣より尋に來る婦人を捕へて邪淫戒を
 犯し夫を隣より官へ訟へしりバ其糾に向ひ其事無と官を偽りて妄語戒を破り終に逐轉して
 惡趣とかりしが其元は一口の酒よりして斯の如く五戒を一時に皆破り堅固の身を錯れバ
 我諸比丘へ對して酒の草の葉の沾ひ程も決て飲まじと禁ける耐奇がら酒の又天の美祿とも
 稱して其人の性質に仍ての百藥の長どもかれバ既に過日舍衛國の波斯匿王厨を務る修迦羅
 を斬せんとする時皇妃末利夫人飲酒戒を破りて王の怒を宥め妄語戒を破りて下へ勅意を通
 じ修迦羅の一命を救ひしは是犯戒といへども其功德廣大ありと我賞せし事ありされバ機に
 臨んでの犯戒の持戒に勝る功徳ありと思惟すべし扱以上に述し五戒の外に又方便も死るべか
 らず开も空を以て形をなし機に臨んで物を利する是を方便といふ譬へ寶玉と雖も自から光の
 顯いさず元の皆荒石に掩れたるを切磋琢磨して光を世に著すあり衆生の身とても其如く善

便方

巧方便の智を以て煩惱の垢をさり真如の法體を爲ものあり汝等も始より無事にして我法門へ入し者の少し或の敵とあり或の三毒の逆意ありしを我方便の智を以て皆道を得さしめしゆへ今清淨の身とありし其昔を各々顧みよ又瞋患すべからず一度瞋患を起せば百種の善根を失ひ一度瞋眼を以て人を見れば五百世の悪業を結べば是を法樂の怨敵とも又善心の大賊とも又惡口の府藏ともいふ我徒弟滿慈比丘の瞋患を能慎むがゆへ渠をして嫉妬慳貪の者を化度させんと諸在家へ赴けしに或時山中にて飢に及び獵者の食を乞ければ獵者怒て携へし弓に矢を附射殺さんとせしかば滿慈比丘衣を脱いで腹を現し其矢先へ向ひて進めば獵者恠て其故を問ければ我此腹ゆへに汝を怒しめしゆへ此腹を射さしめよと答へければ獵者此詞を聞より弓矢を棄て食を脱へし事ありしとあり然れば我に石を打者あらば其石を綿にて受かば身の平穩あるべし我長老の舍利弗の過去の世に檀波羅密を具足して庶人の望む物の何ありとも布施する行を爲けるゆへ一人の婆羅門舍利弗の兩眼を乞ければ眼の天の日月の如くよて衆生第一の要具なり我佛道を行ふも此眼を以て爲れば余の物を望まれよと答へければ好む物に是非ありての檀施の行にあらざるといふ此一言に返りて眼を挑て與へければ取よ

り早く地に棄て此眼の汝が身に有ての第一の寶あれども我手に取ての光りも亦き第一の汚れ物と唾を吐け土足にかけて去りけるゆへ舍利弗怒ら大瞋患を發して渠を恨みし一念によつて九腕劫の德行を失ひ今世其宿念にて正道に入がたき身ありしが前年私良摩國の玉磨の家にて達婆太子の摩尼寶珠を吞し齋を助けんとして身に疵をうけ大苦惱を忍たる功徳に由て其瞋念の夫にて滅せしゆへ阿羅漢道の得たれども前世若年の時短慮にて父母を苦しめ沙門を訶責したる宿業の今に失ざるがゆへに多病あり耐るがゆへ瞋患の永劫身を燒薪と知べし又物に憚らず懺悔を爲べし譬へ百劫の造惡といへども一時の懺悔に消滅するの百年の閻室に一燈を挑るが如きゆへ懺悔の惡人三界の門を出て煩惱樹に菩提の華を見る眼ともいふ上品の智者の惡報を懼れて造惡を爲ず中品の智者の造惡を爲ども懺悔をして其罪を免かる下品下生の人の造惡をして懺悔を成さず腹藏するがゆへ閻より閻に入て身の苦患を免るゝ期なし褻扇國の婆羅門の家に提草女といふ一人の婦人あり元の祐福の家ありしが夫に夙く死別て養ふべき子もあければ次第に貧窮に及びしゆへ婆羅門の法として身の迫る時其身を燒て那羅延天に生を換る風俗あれば其法の如くして死かんと薪を積て今や其火の中

定禪

へ入らんとせし時沙門鉢底婆といふ者は是を見附て其女に向ひ男女とも我に受たる罪業の心
 魂に附纏ひて生々世々離るるものにあらざる譬へば重荷を引牛身の苦患を免れんと其車を幾度
 も破却せば車を又幾度も造り替て引するが如くされば今無益の事に身を焼て苦みを見んよ
 り寧懺悔をすれば身軀安く罪業も忽ちに消滅すと示しければ提摩女立處に發明して懺悔を
 せしゆへ忽ち十善果を得たり爾るがゆへ懺悔の月の雲を拂ふ風の如く又百年の垢衣を一時
 に洗て清くする水の如くにも譬ふあり又禪定を爲べし燈火能照すといへども大風に其火
 保ちがたし是を其覆ふ器に置べ其光り散亂せざるがゆへに能長久す庶人も是に等しく心を
 清淨の座に置とき智水動ざるゆへ眞如の満月を見るあり我雪山の北眞禪定臺に座して三
 業九品の修行に五定心を煉とき群鳥果を含み猿猴蜜を持來りて我にあたる禪定の一心不
 亂されば目前の雷電も知ものにあらざるが我幼年の師たる巖頭藍非の道徳万人に勝れたる
 身ありしが院中に座禪する時諸鳥來て空心を妨ぐれば樹木亦き池の邊へ閑室を營み是へ入
 て定念を構へければ又池の魚類躍上て水の音觀念を妨げれば忽ち瞋恚を起し我未來世に
 へ翅ある獺とありて樹に上りて飛鳥を普く喰盡し又水に入て一切の魚を喰盡して今世の仇

を報んとする此惡念を以て非想三昧を證して疾死しが此後身非想非々想天に生じて八万
 大劫の果を受ると雖も前世の惡願に依て終に又欲界に墮て樹に上りて鳥を喰ひ水に入て魚
 を喰ふ飛狸身と成ものありと説給ふ折うら舍利弗聲を打鳴せば世尊説を止めて嘿し給へば
 大堂に滿たる聽衆何故の御法中斷と皆々不審の首を差延して高座の方を望みける

釋迦八相倭文庫五十九編終

釋迦八相倭文庫六十編

却説十大弟子の中天眼第一と稱る、阿那律尊者高坐の前へ進み出て「御説法半途に切ての
 聽衆全きを得ざるより疑念を生ずる事もあれ、何等の大用あるとも法演中決して中聞まじ
 と兼て仰渡しもありけるが唯今私慮に能ざる義より御法中斷を願ひける、諸今日法名王世尊
 へ歎願の義ありて自然御入幸の御供仕度中法坐開口の聲の響き大城へ聞へしかば、幼帝感喜
 踊躍の余り乗物をも待せられず御供僅て只今至られし旨輔臣より中聞有しが今日の凡俗
 を除らる御法坐にもあり又國王聽聞の坐席の設も是なきゆへ此義奈何計ふべきと述ける世
 尊泰然として「汝奚ぞ夫ら又思慮なきや法名王の血脉を授し我法弟にて凡俗よあらざれば
 附従ふ臣下迄も聽聞勝手爲べし又佛法の大海の貴賤を撰ばざるがゆへ國王といへども坐席
 の上下をわかたず徒弟同様に聽聞隨意たるべしと答へ給へば阿那律其旨を輔臣へ告て立戻
 り坐に附を見るより舍利弗又磬を打鳴り世尊再び説せらる「扱又此娑婆を堪忍と号れば各
 々是を能守べし人の善心閑靜あるに二ッあり其輕きを忍辱と号け其重を禪定とすれば其重
 きに至らざる者此輕き忍辱を行へば心を樂み諸々の惡事を免るゝがゆへ忍の萬福の元ども

忍堪

力神

いふあり譬へ正道を得るとも忍を持ざる者の惡趣の苦患を免れ難し我前世に名を修行處と
 号仙人たりし時五百の惡魔さまぐの物に化身して我行住臥他家往來閑所まで一晝夜附
 纏ひて或の罵り或の訶責せらるゝ其苦患五百年の間ありしが我夫を少しも恨まず反て彼等
 を哀憐救護する事のみを思ひし功德によつて今世斯の如く正覺を遂たれば忍の大徳に持
 戒苦行も及ばざる處ありされば一時の怒氣を忍び百日の患を免るゝといふに宜あり又務て
 神力を行ふべし西方無量壽佛の神力の自在廣大無量なれば十方國土に於て大身を現し給
 ふ時の大虚空に滿又小身を現し給ふ時の丈六八尺に至る此尊躰大小とも皆金色あり世の
 一文不通と頑固の者を教化するよ、此神力の外他なし我靈鷲山耆闍崛に法會を開きし時頻
 娑婆羅王より若干の寶物を布施せられしに阿闍世太子未だ善心に歸せざるうち若し若し
 臣の軍婆羅に命じて其寶物を途中に於て奪する巧をあたし其上又城下に住婆羅門の中に第一
 の惡者と名の附し者に向ひて我父王の城下の親しき民を惠す縁も由緒もなき出家のみを敬
 ひて數多の寶を布施するは是王たる者の道にあらねば我其布施とする寶物を奪ひ取巧を
 せしゆへ汝頭人と成て數多の婆羅門に異形の姿をさせ云々の計策を以て父王に迫る時に出



王舎城 須弥沙羅
の王宮 五百の婆羅門

目連の化身



魔醯首羅と偽り乱入
せし急難を救ふ為に
目蓮尊者神力を
以て沙弥と
化し渠等と
取喰ひて

須陀洹果を得
させし説く阿育王経の
意と模疑せり

家に送る財寶を汝らに取られば自然城下の潤にありて汝らの賑ふり又國の樂あるゆへ我
 是を悦べば早く其計策をせよと理を以て言合ければ其惡者其意を悦び同氣を求る數多の婆
 羅門へ夫を告れば皆太子の志を感じ此計策月日を延さば國王の財寶の悉く出家に奪盡れ
 て一國の衰微と成し其難義の出家にかゝらず皆我々が身にかゝれば此企の早きに利ありと
 悦び勢む者忽ち五百人の徒黨とされば彼惡者先達とありて頻婆娑羅の王宮へ朝まだきに聞
 をわけて乱入せしかば大王殊に驚きて其故を尋れば頭人進み出て我輩の食を求に來る者と
 答ふるゆへ大王安堵して俄に珍味の膳部を出させけるを見て我々の斯の如き人間の食を喰
 者にのあらず表の城下に住婆羅門の如く見ゆる者もあれど本心の皆魔醜首羅されば剃髮三
 衣を着たる出家のみを取喰ふ者あり大王の親しき國の民を惠す由緒もなき出家已を尊び是
 を多く抱へ置て衣食財寶を給ふとわれば夫を普く乞て取喰ひんと斯の如く大勢參内すれ
 ば夫を早く喰せ給へ遲滯すれば飢渴の者ゆへ是非なく王宮の男女を取喰ふと口々に喚ぶ其
 聲も出立も皆懼しければ大王是に殆ど切迫して常惑の余り普聞處の方をむき今斯の如き者
 殿中へ乱入せしが其者らの眞の羅刹あるや人間あるや夫の知ざるが出家を取喰ふ者どあり

偏に此急難を救ひ給へと我を頼む一念を我神通にて知ば速坐に其救護を目蓮に命じければ
 目蓮又神力を以て忽ち沙彌と成て須臾に王宮へ至り急難を救ふ我使と述べ大王厚く悦び
 道の早きを勞ひて清淨の膳部を進めければ我の斯の如き精進潔齋の食を喰沙彌にあらす我
 好て喰もの魔醜されば幸ひ王宮へ來るところの首羅共を取喰ひて空腹を補へんと大聲に
 述るを彼方に集る徒黨らの聞耳立て聞いたれば何者あるや羅刹を取喰ふ杯と大言を吐て我
 々の魁に徳を得んとする憎き奴の手足を引拔是を喰ひて大王の眼を驚せず大望の成就せ
 ずと怒を發せし處へ四尺に足らぬ柔和の沙彌一人出來りければ此徒黨の中にて此沙彌の姿
 を夜叉天と見る者もあり又阿修羅と見る者もあり是等の其威徳に恐れて事からぬ先に皆逃
 さり残りし者其小身を見設りて頭人又引續き多勢取かゝるを沙彌の少しも恐れず右左の
 手に請どめながら取喰ふ有様のさながら蠶の羽虫を呑ぐ如くに忽ち五六十人を取喰ひし
 ゆへ是に驚き逃出んとする者の後髪を引摯て取喰ひ其座の者を皆取喰ひ盡して逃延し者あ
 るを見るより手を鉈玉の飛ぐ如くに長く延し引戻して取喰ふを大王の見るより此沙彌こそ
 眞の羅刹されば此害必ず我身に及ばんと愁傷の色を露せしを沙彌の見るより脚下に座し

智慧

て大王聊り患ひ給ふ奇君の佛法の大檀越なれば我命を受けて不肖の目蓮の神力を以て不意の急難を救奉る已と其座に目蓮の本身を顯しければ大王疑念を拂して其功を感じ我へ此謝を述んと目蓮同道にて著閣窟に來られしが沙彌の取喰ひし者ハ皆大王より前に我手元へ來りて比丘と成けるゆへ大王と目蓮の至るを見て前非を述て慚愧せしうハ惡報を受べき身も翻つて終に須陀洹果を得しハ是全く神力の功德奇とされハ神力の刹那に凡を聖とし聖を空として衆生を濟度するものなれども道德ある者は是を行ひ用るとも其座に夙く取棄べし夫の何故なれば神力の虛妄の法にて非常に用ゆるといへども尋常の教道も用ゆる正法に在ざるがゆへあり又智慧の無明長夜の黒闇を照す燈火の如くなれば老病死の大海を渡るハ智慧を以て楫とす又智慧の弓矢を携へる者ハ奈何ある魔軍の大敵攻來るとも退治せざるといふことなき天の帝釋ハ一智を以て大阿修羅を滅せらる人の貴賤共に我志を立れば必ず一智を設く其一智に由て又志を立てれば必ず二智を設く乃至十智百智を保つ大智者と成る唯我志を立てる已にあり彼豐樂王の寶藏に滿る世の一切の寶を持あがら尙此上の寶もあらんと博學の臣を使として諸國を尋させければ其使の臣諸國を普く廻て一切の寶とする物を悉く

惡造

穿鑿して見れば我國の寶藏に有物已ゆへ本意なく歸國する途中に於て萬寶の根元ある智慧を買んといふ者なれば是ハ未だ國にあらざる寶なれば大智と印せし一偈を千金に換て歸國し奉りしかば豐樂王夫を疑念なく常住坐臥怠らずに信讀せしより終に其一偈の深意を皆解して大智を得たる例なれば世の萬寶ハ智慧より生ずるものにして是又佛法中の大要具あり又造惡をすべからず此世の人を一木に譬ふれば造惡ハ花なり其報ハ實あり實ハ花より成るのなれば實とありて花の善惡ハ改められざるものあるに凡俗の效として我造惡の花ハ願ず其報の實を捕縛する繩取を恨むハ笑ふに絶たり地獄連も十王の獄卒に命じて造ら令しものにいならず皆世の惡人の集て造し惡所あり極樂も彌陀觀音勢至の造りし處にあらず皆世の善人の集て建立せし淨刹あり此前世に牧牛を活業とする家あり其妻娘を連て牛を飼付る牧へ趣き牛酪を搾て二器とし其輕き器を母携へ其重を娘に持せ是より戻りの嶮岨の山路なれば日の暮ぬうち急ぎ行べしと再三娘に促しければ娘答へハすれども心中の隱あらず母の輕きを持ハ足元輕し我ハ重きを持ハ行に遅きハ知し事を情なくも道を急するハ恨めしと柔かかに惡意を起して母に向ひ妾少しの用事を足うち此器を持くれよと渡しけるゆへ母ハ身

貪慳

養供

よ余る二器の重を携へて山路六狗廬舎戻り來る其後より徐々として身を軽く來りし此娘の則ち今世我妃の耶輸陀羅女あり斯の如く前世母に重き器を持たせ六狗廬舎の道を辛苦させたる殘業に依て我子羅喉羅を六年懐胎して腹を惱せ生死煩惱無量無實の苦を受たれば惡事の少しとても其報の世を隔ても通れざるものあり又衆生に三ツの大毒病あり其一の慳貪其二の瞋恙其三の愚痴あり此三毒の毒中の大毒あれば是を身に持者堅く三惡道を死れず家の鼠も足事を知ぬ鼠の世の常の食を越て甘味を貪らんと瓶の中に入れて出る事能はず終に瓶の中に死ぬものあれば人は是を見て淺間敷ものと笑へども人の中に此鼠の如き者あり既に摩訶南長者の此鼠の如く貪欲に眼も閉み邪智に聳て妻子眷族の意見も納ざるより欲深き瓶に入て今身を失ふ際に至る是まで長者たる者の皆慳貪ありしが其度する時至りて皆度しけるが此摩訶南に限りての度し難き者と見る渠に引替須達長者の生々世々福祐にて佛縁深き者あれば今世迎も祇園精舎迄建立して佛に供養させしが今の長者に至りて殆ど困窮に及びしが慈悲ふりく三寶を供養する其功德に由て西方の風困苦の雲を吹拂ひ東天の日の昇が如くに元の豪家に立歸る其時節近きよ見へたり又出家の第一の供養心あるゆへ是を能務むべし諸佛

進精

の法身の皆平等として差別なければ一如來を供養すれば其功德諸佛に及べども三世の諸佛の諸法の實相を師とせられて福德を求ず庶人の精進ある功德已を受けて感善せらるるがゆへ香花茶湯の供養の眞の供養と思ふべからず况や信心なき財寶を以てモシ布施する者の後世重荷を負て鞭に纏れ人に愛せらるる牛馬の報を受るありモシ瞋恚を懷て布施する者の後世宮殿の中に住て妙色美食を恣にする龍の報を受るありモシ多慢心を以て布施する者の後世如意珠を瓔珞として變化自在の金翅鳥の報を受るありモシ貪欲の財を以て布施する者の後世五塵變化を娛む鳩槃荼鬼の報を受るあり此外布施の穢行によつて種々の夜叉に報を受る者あるが是皆布施に異心あるがゆへに其身も又異形の報を受けば是を能顧みて庶人清淨の心を以て佛を供養すれば佛も又清淨の利益を與へ給へば火宅を放れて永劫不退轉に快樂を見る報を受るあり又今世後世の道德利益の精進に依るものあれば精進を一切諸善の根本とす法の無染あるを精と号け念々に是を求るを進といふモシ無量の諸惡を拂ひて道德を求めんと憤發する者の兩股へ錐を刺て眼を除き勇猛に精進をすれば十年の發願も一年にて達すあり我弟子の億耳比丘の耳に金環を附て是を二十億の金貨の價と自負するがゆへ諸人渠を二十億



本行經の説小耶輸陀羅女の前
 世牧牛家の女も時母の牛酪の重荷
 と持せ六狗盧舎の道と辛苦せ
 報よ因て今世羅婆羅
 太子と六年懐胎
 て無量無実の苦と
 受られ

六狗盧舎の道二重とも
 まして五里とも

恩報

耳と異名せり渠道徳を求めんと晝夜眠らず勇猛に精進を成けるが解脱をせされば自から心に
 思ふに佛弟子の中に精進の行をする者に於ては我第一されども未だ其道を得ざれば逆も沙
 門の法の得難きゆへ幸ひ我家の祈禱されば今より出家を止て我家に立戻り白衣となりて布
 施の行をもつて道を得べしと巧みしを我余衛國の給孤獨園に在て是を知れば渠を呼寄て汝家
 に在時の能琴を弾けると聞しが歌の音と調子の緩急と相應せずして謠ひけるやと尋けれ
 ば中々以て音と調子と相應せざれば音樂に成ものにはならずと答へしゆへモン音に調子の
 合ざる時の何とするぞと問ければ其時の琴柱を揺して音に合て謠ふありと答へしゆへされ
 ばころ佛道修行も其如くされ汝は是まで調子の急が如き大精進に凝しゆへ道を得ず又調子
 の緩が如くに行へば精進懈怠とありて是又道を得ざれば心を琴柱の如くに揺して調子の緩
 急の中間に置音弦和合する度を以て精進ささば何ぞ道を得ざるといふ事かすと諭しければ
 億耳此意を能會得して夫より閑室に入り泰然と精進を専せしかば日ならず無漏の大道を悟
 て四果を得たり此譬へ精進已にわらず何の修行も皆爾り又恩を報ずべし墻を穿て物を盗を
 賊と号け恩を受けて夫を報せざる者を大賊と号く牛馬鳥類に於ても能恩を知あり就中大の人

に恩を報せし例の萬國に多くあり然るに人として恩を報せざる者の鬼畜よりも甚だし人父
 母の恩愛を棄て出家とあり無爲に入時の是真實の報恩あり又孝を營むべし孝の百行萬善の
 基よて諸佛の善法も皆是より生ずれば孝を以て戒とす夫れ孝天に至れば風雨時に順ひ孝地
 に至れば萬物盛育す孝人よ至れば衆福多し我孝を盡さんと天地神佛に誓ひ王位を棄て出家
 し終に正覺を遂しかば優陀夷を以て成佛の神變を父へ奏聞させ再び王宮へ入て父を初果の
 位に入奉り親屬群臣へまで戒法を授し偏に孝を重ずるがゆへあり爾又孝の爲べから
 ず我前世波羅奈國の長者の女に生て名を慈童女と号しが父早く世を去て老母と此女已ち
 財寶盡て家衰へしゆへ慈童女薪を市に始て賣て二錢の利を得しゆへ是を以て老母を養ひ
 次の日又四錢の利を得しゆへ是を又母に與へ其次の日又八錢の利を得其次の日又十六錢の
 利を得しも皆老母へ與たるを近處の人達是を見て皆憐み汝が父在時の常に海に入て寶を得
 て長者と成しが今汝孤と成て老母を養ふに辛苦を盡して小錢を得るよりも寧海に入て大利
 を得老母を安樂に養ふ方宜うらんと歎異しうば慈童母に向ひて我父の海に入て寶を得たる
 と聞しゆへ我又父の如くして母を安樂に養はんと述ければ母の慈童の孝心厚きがうへに女

子の身あれば何て我側を片時ありとも離るべきものならずと思へば戯れに夫の能志あれば
 父の如く海に入て寶を求よと答へしより物に馴たる朋友と海入て寶を取約束を定め既に
 に家を出んとして母に暇乞をしければ母の驚き我子とて汝已ちあれば母の死を待て行へ行
 べしといふより母上前に夫を免ちがら今又夫を遮し給ふとの最早友と行を定めしうらな後
 の日の期しがたしと出行んとする脚に母取すがりて泣きむるを連れんとする掻まざれに
 母の髪を毛を抜しとも知らず朋友を誘引て海へ行珍しき寶を取得て悦び返る道にて友を見
 失ひ其上道に陥迷ひて一ツの山に登りしが飢渴の折から食を求めんと左右を見渡せば瑠璃
 城と見ゆる中より四人の玉女四ツの寶玉を捧げ妓樂を奏して慈童を引入しゆへ此城中に慈
 童快樂を受けること四方歳あり終に此城中を厭ひ出て道を行しに又頗梨城と見る中より八人
 の玉女八ツの寶玉を捧げ前の如くに引入しゆへ此城中に歡樂を爲すこと八萬歳あり又此城
 中を厭出て道を行しに又白銀城と見る中より十六人の玉女十六の寶玉を捧げ出て前の如く
 に引入しゆへ此中又快樂すること十六萬歳あり又此中を厭出て道を行しに又黄金城と見る
 中より三十二人の玉女三十二の寶玉を捧げ出て前の如くに引入しゆへ是に大快樂を爲すこ



と三十二萬歳ありしが此城中の玉女慈童女に向ひて是迄所々の美城よ入て歡喜を得られし
 が最早此城中より先に好處のありしと示しければ慈童此詞を疑ひ是の正しく我を此處へ引留
 置んどの計意あるべきゆへ是に勝る好處へ趣かんと又此城中を厭出て道を行しに今度の鐵
 城と見る大なる廓あり此中より一人の玉女も迎に出ざるが此表の斯の如き鐵にても内廓
 より必ず美麗の宮殿あるべしと奥深くへ入ければ頭に火盆を載たる獄卒一人出來りて其火
 盆を慈童の頭へ移し載ければ忽ち總身火熱に惱亂するに絶かねて頭を振ば火花四方へ飛散
 て尙苦しく是を脱んとすれば其重こと大盤石の如くよて脱ざる上に手を焼爛かす其苦患甚
 だしければ其獄卒に向ひて汝何故に我へ斯の如き大苦の器を授けしと尋ねければ獄卒の答へ
 ん汝閻浮提に於て老母に慈仁の孝養厚ければ名を慈童とよび貧窮の苦を扶んと薪を市に賣
 し第一の日二錢の利益を母に供養せし其功德倍して四玉女より四如意の寶珠を授けて瑠璃
 城に四万歳の快樂を受たり第二の日四錢の利を母に與へし其功德倍して八人の玉女より八
 ツの寶珠を授けて頗梨城に入て八万歳の歡樂を受たり第三の日八錢の利を母に供へし其功
 徳倍して十六の玉女より十六の寶玉を授けて白銀城に入て十六萬歳の榮花を受たり第四の

日十六錢の利を母に奉りし其功德倍して三十二の玉女より三十二の寶玉を授けて黄金城に入て三十二萬歳の大快樂を受たり此四ヶ所の想數合せて六十萬の快樂の皆孝養の報あるが汝海に入て寶をとり母を安樂に養へんとする其志の厚けれども母が脚に抱付て泣止むるを遣れんとする其かいまされに母の髮毛を扱しゆへ前に孝養の大花報を受しが今其不孝の報に其火盆の苦を受ると答へければ慈童の其善惡の報を感得して又獄卒又向ひ此獄中に我が如き罪報を受る者又有やと尋ねければ汝が如き罪苦を受る者此獄中に千万無量ありと聞より慈童歎息して我此罪苦の免れざるも願くば此獄中に苦しむ千万無量の罪人の苦を我身一ツに引受て普く與樂させ令んとする此慈悲の一念發起せしかば忽ち頭の火盆地に落て清風身をすいしめ心魂安く終に命終りて親率天に生れしが又此娑婆に生れ出たる我身則ち其慈童女あり誠に孝養の福の難有くも四大城にて六十萬歳の華報をうけ又不意の少罪といへども不孝の報ひ通ざりしが獄中の罪人の苦を普く救へんと思ふ慈悲心より其報苦を免れて天に生じたる此因縁を深く顧みて慎まざらんやと述られける扱此慈童女の因縁に至りて聽衆深く感伏して面を上る者一人もあきを世尊御覽ありてモシ心腔を惱す者もあらんかど

怠懈

前結脉書錯

暫く嘿給ひしが昔面を上て寛きし色を見給ふより又説せらる「諸諸業を學ぶ者必ず其業に懈怠をすべからず農商懈怠をすれば人食家物供へらず出家懈怠をすれば生死の苦を離れず無量の功德を滅するのさあがら火の萬戸を焼が如し百川東の海も流て何の時西に歸らんされば少年にして努めされば老て必ず患あり時に聽衆是に在す法名王の御身の上を能聞べし此御方の名の元修摩那と稱せられしが幼年より世法佛法に響ある御方と見究しゆへ我法名の御名と血脈を授け進せし操の今日の御行體を以ても知べし我法坐の常の大鼓を打て凡俗の聽聞を促せども今日の内徒已の法坐ゆへ小磬を以てすれば此響き何ぞ毘舍離大城へ聞へるものにはわらぬが幼帝常に我法問を渴仰せらる其信を以て聞へざる響の音を聞給ひ説法半途も來られ法意を委く聞し召れんとて我法臺に近付結跏趺坐して恭敬せらる八才の此幼帝すら斯の如くあるに彼方に在す老僧迦維那比丘を見よ三衣を着て法座に連なりながら恭敬心も亦く肱を枕として脚を舒へ顔を掩て眠る様にと指し給へば聽衆皆渠が亂形を見て憫はてけるうち十大弟子の其一人多聞第一ある阿難尊者此程維那を務むるゆへ此迦希那の亂形を其儘に見捨ぐたければ世尊の前へ進みて「斯の如く大衆滿坐にて渠が亂形を上足始め

私も見付ざるの甚だ不念あり夫又つき渠を其儘に致し置ば諸比丘の風義にも拘れば大衆の
 見る前にて三衣を剝とり懈怠の罪として鞭三十をわて此處より追放致すべしと述べ世尊
 愁然たる御氣色にて「爾も有可きことながら渠が放逸にも因縁あることゆへ先夫の死して
 眠れる儘寐しおけ我渠が因縁を説聞すべし抑渠の前世燃燈佛の前にて出家し名を阿純と号
 利根聰明にて智慮も又勝しが憍慢放逸されば四念處觀を修せず唯聰明已を頼て無道あり
 しゆへ黒暗地獄へちし其後亦五百生の間毒龍となり又猿と生れて前世持戒の功徳に由
 て辛くも又天上に生れ其壽盡て終に又人間となり前世讀經せし利益に仍て我弟子となりた
 れども前世の放逸心未だ失ざるがゆへに斯の如し渠が自然眼の覺るを待て汝等集て能教諭
 してモシ道を得る身とされば汝等が功徳廣大あり穴賢と云まへば舍利弗退坐の聲を打より
 世尊高坐より下給ひて幼帝の手をとり是れより御歎願の義承まらんイザ此方へと常住の
 室へ至り給へば上足の羅漢と共に輔相の臣も從ひける

釋迦八相倭文庫六十編終

釋迦八相倭文庫六十一編

諸も説法終りて世尊を始め羅漢諸比丘の聽衆の皆退坐せし法堂に迦希那比丘唯一人脇を
 枕として高麗に眠り居ける處へ下品の比丘沙彌達四五人迹掃除に寄集りて渠を見るより擦
 り慰まんと若比丘等の毛を引ぬき是れへ常燈明の油煙の墨を付來りて迦希那の顔をさま
 らしに驚どりちらせば樂特又黒き紙を以て凡俗の髮の曲を拵へ剃髮の頭へ張付て異形の様
 とありければ若比丘其側へよつて「コレ長老殿起ませコレ迦希那殿へ」と呼ぶも更に正躰
 なきゆへ沙彌達よつて耳を引やら鼻を抓やら舌を刺されれば其丈六尺に滿る迦希那比丘眼を見開
 き獅子頭の如き大口わいて欠をし松の木の子の如き腕を張て伸を志すがら「ヤレレ口騒じき
 童めらこゝの何處あるやと聞ければ若比丘笑をこらしてこゝの大林精舎の法堂あり「奈何
 にも夫じや幾時の間に御法の濟しぞ」今濟べ此廣ひ法堂に居者其許一人迹掃除が遅い
 れば早く起ませ」をこらして起するが諸々残念な事をした「是の何事か」と自分の勝手に寐御
 法を聞ぬのが今更残念な事が何であらうぞ「イヤ御法をその事ていあひ其残念の事を汝ら
 よ語り聞せば羅漢達へ必ずいふまひぞ我今日計らずも日頃心安き檀越へ非時に招がれしが

常に替りて我大好物の般若湯も水神の影向せぬ美味を出し蒟蒻やらぬ鮮魚の造り身五色の山を積上たる硯蓋其外好た酢物鉢肴まで取並べ其坐へ美しき歌舞の菩薩天降り来て我右の側へ坐し観音の化身ともいふべき柔和の押輒も来りて我左のそばへ居り夫から其右左の花楓か諸ふやら舞やらして此長老様を供養せしゆへ我も感喜踊躍の余りに三衣を脱ぎトテチントテチンと踊り騒ぎ夫から其歌舞さんに手を引れて兜率の内陣へ入肉布團に包れて虚空無天の大快樂に及べんとする其肝心要の場に至りて汝等が起せしゆへ其坐の酒肴も何も筒も立處に皆夢と消失ければ何と是の残念奇事てのゝあるまひか「奈何にも夫でのゝ嘸残念てあろうが其時に踊ら唄おぞの毎時のまに何處て習ひれしぞ」夫の日外城下の町へ分衛に行し時人が多く集て窓の中を覗て居ゆへ我も何事と覗て見れば其家の音曲の指南處にて誦ひ舞其手振の面白さに念佛稱名も打忘れて見て居うち鉢に乞受た賽銭の者盜れて仕まうたが其替りに其唄や踊を能覺へて戻りしゆへ毎夜看經に替て百萬編づゝ復讀した歌ゆへ夢おがらも其坐の者の皆感心して褒たり「夫の嘸面白き唄おらん其許が否がる羅漢達ハ一人もこゝに居ぬが其唄や踊を我々に見せ給へ」夫の安き事といひたひけれど折角寶の山へ入し

我に手を空しくさせたる夢の怨敵おれハ唯ハ見せられぬ何成とも我に徳の付事を爲ハ見せまひものでもおひ「さらば今日其許に授る福の有を教ん」夫おれハイザ見せん扇を出せといふより樂特腰に差たる扇を渡せば其中を開き見て「ヤア是に書てある此障眼布薩自恣維那押輒般若湯杯ハ何のために印せしぞ」夫ハ常に出家がいふ詞おれども其意が我にハ別ぬゆへ上足達に其意を聞ん爲の覺へ書おれハ貴様其意を知ハ我に教へよといふ傍らより若比丘手を振て「イヤハ法義の事ハ人中にて聞ても濟が其踊ハ今さらぬハ見られぬゆへ長老殿早くハ「チット合點と立上りて〇戀といふ字ハさんハ謎よ解てくだされ私ハ言糸ておがらむ其下心およんがいまよぼハ降雨も西が晴れば止むいさトテチントテチンと踊る其さま異形の顔に能うつり皆々大笑ひして褒ければ樂特其扇を取戻し我も一踊り見せんと嗔聲をわけて〇十七八の棹に干た細布取よりや糸したがりよりや糸し抱つきや尙糸しどおどりおがら庫裏の方へぞ走りける若比丘迦希那に向ひ「イヤ其許の秘藝感心せり斯の如き博學多才の先生おれハ已に今日世尊御身の事を大衆へ説せられしと云より迦希那驚き「ナニ我事を世尊大衆へ何と云れしぞされハ長老殿ハ前世燃燈佛の前にて出家をし名を阿純と



號しどあり「奈何にも開のさもあるべし夫より又何とありし」夫より又利根聰明にて智恵も又勝しと云れし「夫見やしやれ此長老の前世からの智者あるを世尊の流石御目が高ければ夫を知ど羅漢を始め汝らまで夫を知ぬがゆへに我をば輕しむる夫から何と云れし」夫から又夫程の身ありしが憍慢放逸にて黑暗地獄へ落られしとあり「ナニ己が地獄へ墮たど」奈何にも夫から又五百生の間毒龍とあり夫から又猿とあり夫から又コノノ我尋もせぬ事を其様に夫から「と先走つていふに及ぬ我前世其やうな事の決してあけれど一体世尊の意地の惡ひお方されば我ばかりてのさく誰を見ても彼も爲さるも爲さる夫も喰さるも喰さる喰物までを世知幸くおされて骨放れする物とての小雑魚一疋を喰せささらぬが夫とてのさひ今に見よ豆腐も喰せささるまひ其中に我正覺を遂るゆへ其時汝ら我弟子とされば夫もせよ是も喰と何ても箇でも人の好物のさせもする喰せもするが夫の扱後の事今差當て聞たひの汝がいふた其福の天から降か地から涌か東から西から何らの方から向ひくる我其福を求めたければ是まで人にも見せぬ隱藝をも見せしゆへモン夫が偽りにてもわらうものさら松癩のやうさ此振り拳を以て汝らが頭を釣鐘とし百八煩惱の數も限りもさく打

のめしてゴンくといふ際聲を出させると握拳を構へし其様鳥惜もあり又懼しくも見ゆれば若比丘忽滑ぬ顔にて「されば其福といふの長老殿が毎風俗を褒らるゝ元目蓮の妻ありし金支尼を始め美しき若比丘尼達を彼ある簾の中にて最前迦希那殿に布施物を取せたりと呼せられしが身眠りて夫を知ぬがゆへ我其福のふの字の集りたる處を教れば早くアノ簾の中へゆきて福くしき婦人の懐ろから出る布施物の福を受給へといひければ「夫は何より忝さひ夢の酒肴の飽ほど喰しが少しも腹に溜らぬゆへ先刻から空腹あれば其布施を以て早く我咽佛を供養せん是といふも此長老に大徳があれはこころ寐ても覺ても斯の如き果福の自然めぐりくると言誇ながら袈裟衣の所躰を繕ふ中に其坐の者の皆逃去ける扱今日參詣の比丘尼達の貴賤等しく簾の中にて聽聞終り立晩し尼三人居たる處へ異形の迦希那簾掻上てぬつと入たるを見て皆々驚きアラ懼しや是へ惡魔が來りしと泣叫ぶ聲の甚だしきと惡作せし比丘沙彌が物影にて高笑ひする其聲に上足達の驚きスハ何事あらんと引續き簾の中へ入て迦希那を見て憫しかば迦希那も又上足達を見て沒然と其坐に居りければ十大弟子の一老大迦葉尼達に向ひて「其方衆少しも驚き給ふか斯の如く懼しき姿に見ゆれども是の

魔族にあらす佛弟子の迦希那といふ比丘ありて心静に立退給へモ鏡を持ち方わらばまばし貸給へといふより若比丘尼懷の鏡を取出し是の不用なれば此處に置と述て皆一體しつゝ其坐を共に立出ける大迦葉其鏡を迦希那に渡し「汝夫を以て顔を見よとわれハ迦希那其鏡を以て顔を眺いたりしが忽ち怒の色を露して鏡を投棄其坐を立出んとするを阿難引とめ「汝何へ行んとするこれハ長老たる我顔を斯の如くに悪作せし比丘沙彌共を捕へ打擲をもして此恥辱を雪んと答へければ「夫のよしあし先是に坐して我々が論しを聞べし今日ハ出家至要の法義ゆへ皆威義を督して法坐に連れハ一國の幼帝すら結跏趺坐して聽聞せらるゝに汝の年もたけて三衣を着身ハ有ながら恭敬心の無已ならず法坐の中に脚を延て眠るさまを世尊御覽されて大衆へ告給へハ我維那を務るゆへ汝を其儘に見捨がたければ諸比丘の見せしめに大衆の中にて三衣を剝取鞭をわて、追放せんと訟へしかば世尊其罪を免し給ふ已ならず渠今道を得ざれば未來永劫道を得る期をければ我々に能論すべしと寛仁大度の御慈悲を受けるハ誠に難有身ならずやと論す側から目蓮聲荒く「イヤ阿難斯の如き嗔方の耳へ慈悲や情ハ無益ありコヤ迦希那今汝の自から長老の我と吐しが其長老といふ意ハ年已關



し者をいふにのあらず何業にても其道に長じたる者の名されば法名王の如きの御年八才にもせよ又五才六才の幼稚にもせよ道を得たる者の長老老あり然るを年のみ長じたる物を長老とせば庭の古木も朽土壘も皆長老と呼べばあらず汝が如く牛馬に等しく物をくひ格の如くも能眠り年のみを重し者の婆婆とさげの老耄といふ者ありと教團あらく論しける此強異見を密行第一の羅喉羅尊者聞かねて後より進み出て「喃目蓮去ばし待れよコレ迦希那年端も足らぬ我口より年闕たる汝を論す誠に徑庭しけれどもコレを能聞給へ今日常の御法坐されば其許一人の乱形ゆへに世尊を始め三千余人の法弟達凡俗に後指をさされる處ありしが幸ひと其汚名のきけれども其放逸の身を以て惡作せし其者を今打擲をも爲す雪がんとする辱に取をかさねて其身も惡趣に落るがゆへ其打擲せんとする瞋患の猛しき心を修行に換て務めさば道を得ざるといふことをきければコレを爲と顧みよ放逸無道の身といふも道さへ得れば雪がすして是まての恥辱をも雪ぐありされば一時の怒りを忍び百日の愛を除くとも聞り耆闍崖の山中にて優波鬼といふ豪傑の鬼神舍利弗の剃髮せしを憎み打擲せんとする意を同類の伽吒鬼といふ鬼神に語りければ舍利弗の大徳の大力ある沙門されば是を

打バ必らず其の身に禍ひあらんと伽吒鬼が再三止るをも聞はず優波鬼拳を以て舍利弗の首を打ちながら汝口惜くバ此優波鬼を煮て喰へ焼て喰へと喚罵りければ忽ち其地裂て阿鼻地獄へ墮けるが其時目蓮舍利弗の鬼に打るゝを聞傳へて其場へゆき苦痛を問ければ苦痛ありといへども我堪忍の心つよければ重からずと答へければ目蓮驚き彼優波鬼の手を以て耆闍崖山の爲躰を世尊天耳天眼を以て遙に御覽ありて是を稱し給ふ偈に○其心剛石ノ如ク○堅住ニシテ傾キ動カズ○染著心已ニ離テ○瞋者モ報メルニ及メ○若シ此ノ如ク心ヲ修ナバ○何ツ苦痛ノ憂アラシ」と説れし事ありと我世尊より是を聞り又我もいつぞや慳貪ある婆羅門の家へ托鉢にゆきければ其主人惡口して鉢の中へ泥砂を投込其上杖を以て我頭を血の出る程に打たゝきける其狼藉甚だしけれども我導師の謹戒を堅く守れば五蘊無我にして打れし我身の痛みを思はずして其打し人の永く報苦を受べしと是を深くき思ひて恨む心なく其家の門をさりて川へゆき鉢と衣の血をそゝひて戻りし事あり是らに汝が其恥辱をくらふれば物の數にも當らず其顔へ受し惡作をわるさと思へば腹もたてど夫を又身を改る師と思

へ願ふてもなき幸ひゆへ其幸ひをもとめたる今日只今を以て改心せよ一老阿難の理解するも目蓮の怒られるのも詞のさまり替りても心のおおじお主の爲ゆへこゝを能わきまへよ迦希那比丘と詞優美く諭しける放逸無道の癖者も眞理の刃に腹をえぐるゝ其苦しさは平伏して聞居たりしが老眼より流出て顔の墨に染りし黒き涙を押拭ひつゝ其手を一坐の前へつきて「各方の唯今の御異見心魂につうじて謝するに詞おし是まてい愚老の腹中に悪魔外道住て正心を妨げしゆへ善言をも聞流せしが今各方より名語の名劔を更に渡し給へば是を尙先に世尊より授りたる菩提心の砥へかけて能押みがき腹中の悪魔を退治する其修行も百日の越まじきゆへ是迄の無道放逸ありしを他人とせられて只今より新の迦希那と思召下さるべしと述べければ大迦葉欣然として「夫の能も解悟せり然あらば其如く修行をばげみて早く上坐の法師に昇進せよと示すに續き阿難目蓮羅喉羅も共に懇志を告て其坐を立退ける諸此迦希那比丘其日より他念なく一心に観想の修行を勵み務めければ九十日に及び出家自恣の日に當りて第四の阿羅漢果を得三明六通を具足せしとある禪秘要經の説を摸寫したる此物がたりぬ茲に止る扱又法名王の世尊の常室に至らせられて今日の御法の臨時といへ

目蓮の元妻金
支尼の道為小
燒鐵以て華
顔と壞る



前結の脈字

前千の香字

ども特別殊勝の旨を祝し給へば輔臣今日幼帝より世尊を始め五百の羅漢諸比丘諸沙彌まで
 へ惠る、布施物の目錄書を舍利弗へ差出しければ舍利弗夫を高らかに讀上て披露しければ
 世尊幼帝へ厚く謝し給ふより輔臣坐を進みて述るやう「尊師へ只今歎願する三義あり是を
 納られて何卒御救助の命を蒙りたしと述ければ世尊泰然として「我血脈をもまへらせし幼
 帝の御頼みと有へ何成とも協させ給ふべしと答へ給へば幼帝御側へ進まれて「其願ひ朕自
 ら述べしとある其語をも待せられず其三義の中二義のモシ母公の御身に附し事あらずやと
 ある「奈何にも其如くあり」然らば其二義の御身よりあらためて仰せに及ばず其一義とする
 母公の御眼の盲きの母公心中に疾より我へ頼ませられしが今日又閑室暗夜に光を放つ希有
 の義を添て殊更頼まる、宮中の御一念我へ能通じければ此坐に於て其二義の由縁を説て御
 安心をさせまへらすべし抑も此毘舍利國の大城を創立せられし大賢王文武の兩道を以て國
 家を永續させしめんと文殊菩薩が荒玉の摩尼珠を乞受られて是を踐幸の玉と號けて文とし
 又毘沙門天王より寶劍を乞求られて是を傳國の劍と号て武とし此文武の二種を以て子孫代
 々即位の寶物とせられしより國家長く靜謐ありしが今の法王に至りて文武の道衰へ終に魔

國とありしが我佛法初て入法王正道に皈し給へば夫まで大城を樓とせし魔屬共他國へ退散
 する其怨念より灸匿龍王其國寶を盗み出せしが其武とする傳國の劍の由縁の幼帝の知給ふ
 ところされば夫の今更説す其文とする踐幸の玉の光りも亦荒玉されば灸匿是を石と思ひ
 て舍衛國の山中に棄けるを又乾陀標ある者も石と思ひて拾ひとり是を以て元幼帝の靈性を
 求る代價に偽り渡しけるより終に母公の手にいれれば母公是を我子の寄物として今以て肌身
 を離し給へぬゆへに御眼の盲し其謂ひ總て寶玉たる者、國王の手に有へ國家を納る寶物と
 なるれども無位無官の者の手にわれば奇特あきうへよ其身に必ず障りあり又一義とする閑
 室暗夜に光を爲も其玉の威徳あれば是を早く元の寶函に納るべし御眼の盲きの順に癒暗室の
 光も止り掌るを見るが如し誠に幼帝の孝心より國に失たる寶物を得て元の寶函に納めら
 れ忠死せられし父の名を顯されて身を立給ふに誠には前代未聞の功あり二義の斯の如く
 されど其一義の我未だ知ざるゆへ夫を述べられよとわれば「されば其一義の我幼年無學にし
 て未だ國民撫育の道を知ざるゆへ何卒國家平安ある御賢慮を授け給へるべし」夫の御心や
 すかれ世法佛法何ぞ異ならん御身今日出家至要の法意を委く感得せられし其功德によつて

當まさしく七日の中に四神足しじんそくを得え四諦しだいの法身ほふしんを以て國家こくかを能治よくさめ給へば前に他國たこくへ去さし忠臣ちゆうしん良民りやうみんも皆御身みみづかみの德風とくふうに靡なき志こころたがい各々競あつて御國みくにに立戻たちもどれば内に奸佞かんねいの臣しんあく外そとに不毛ふもうの地ちあく風雨ふうう時ときをたがへず國家こくか萬々まんまん歲榮さいえい久くする其基もとを目下めげに究きまて見給みたまふありと示しめされければ幼帝ようてい輔臣ほしんも怡悅いゑつの色いろを滿面まんめんにわらひされて再拜さいはいし母公ぼこうの安心あんしんを急いそがるゝがゆへに萬謝ばんしゃの一ひとを述のて還幸くわんかうある其頃そのときの千代ちよを壽こいよく御堂みだう雀すずめの色いろ時ときあり

釋迦八相倭文庫六十一編終

釋迦八相倭文庫六十二編

爾程そのほどに法名ほふな王還おうわん幸かうありて上足じやうそくの羅漢らかん達だちの今日こんにち幼帝ようていより惠めぐれし布施物ふせものを積重つみかさねたる廣間ひろまへ至いたて其割振わりあにかゝりしに目蓮もくれん一人世尊よせそんの前まへへ進すすみ出いで私兼かみ々亡な父傳相ふでんさうの退善たいぜんを營いみたく思おもひありしに尙なほ又母青提せいだい女身にょみ持宜もちよろしからず夫おとこが爲ために惡死あくしせしよしを聞傳きつたへ誠まことに寢食しんじよくも安やすからざれば時ときを見て御暇ごいそを願ねがひ古郷こきやうへ赴おもせたく存ぞんじありけるに今日こんにち慈童女じぢゆうにょの因縁いんげんを聽聞ちやうもん致いたしてより俄にわかに父母ふぼの菩提ぼだいを吊つりたくぞんずれば何卒なにぞぞ古郷こきやうへの御暇ごいそを願ねがひたしと述のければ世尊よせそん御景ごけい色いろよく「夫おとこの實じつに尤なほもの事ことあり父ちちの汝なんぢが身みの種母しゆぼの汝なんぢが出世しゆつせの門もんあれば今いま汝なんぢと舍利せり弗はつの我われ兩手りやうての如ごとくにして諸人しよじんの尊敬そんきやうも厚あつければ其身そのみを以て其身そのみの元もとを思おもひされば鬼畜きちくにも劣おとれり其親そのおやに孝かうを盡つくすの天地鬼神てんちくわんじんに事ことへんよりいはるかに勝まさるが我われ今世上いまじやうじやうを見るに鳥獸とくの如ごとく其口服かふく已やを養やしなを孝かうと思おもふ者もの甚はなだ多おほければも人ひととして奚鳥獸なんぞの如ごときを孝かうとせんや夫人たいの大たい孝かうとするところの其親そのおやの心こころを尊たつび慈愛じあいを厚あつくして辱はづかしめず而しかして能養あたを次つぎとすれば世よにさき父母ふぼの孝養かうやうにも香花かうげより信しんをもつて第一だいいちとせよ汝なんぢが存意ぞんい奇特きとくあれば此坐このざに於おて暇いそを取とりす出立しゆつたつの心こころに任せよと仰おほせわれば「夫おとこの忝かたじけあし右みぎにつき又一またツの願ねがひあり我元われもとの妻金支つまかねしの



過し頃祇園精舎の鐘供養の節色欲を棄て尼法子となり同所の尼院に有しが元此毘舍離城に
 宮仕せし者されば此節幼帝の母公清羅君の看坊を依頼されて宮内に有しゆへ今日幼帝に引
 ついて一人聴聞に來り渠も慈童女の因縁を聴聞して不孝の罪の怖しきを思へば我と共に
 古郷へ赴き舅姑の追善を致度と私へ申聞ければ其志の感心するが我出家の身として尼と
 いへども女人同道の人の嫌疑われれば協がたしと答へければ妾斯の如くに煩惱の黒髪を切棄
 て色なき衣に女の姿の姿いなき身とされば其やうな事いなきと思ひしに爾とて又人の嫌疑に妨
 げられて人の第一とする孝道を欲し口惜けれ私同道を免さず自から世尊の御前へ是を
 願ひて私同道を公に致すと執ねくやによつて然らば夫の我御暇を願ひ濟せし上にせよと
 申聞せ置ければ金支かからず御前へ出べきゆへ其時の宜く御差留を願ふあり「イヤ夫の差
 留がたし其故の我孝の人の福田にて百行の本ありと説聞せし事あればモシ夫を差留て金支
 より孝道と人の嫌疑との輕重を問れば我答へるに詞なければ汝人の嫌疑を憚らず渠が望
 にまかせて古郷へ同道して何あるや」されば夫の御詞までいなく私とて一度妹脊の契
 を結び厭もわかれぬ中にてさまゝの憂苦勞をさせたる上に凡情をすてさせ尼となり

て其志のたゞしきを常に見るより不便に思ひあるところされば障る事さへおければ私よ
 り誘行て古郷へ至り心の儘に孝道を盡させて悦ばせたり山くされども今般の義の法友
 の見る目古郷の凡俗へ對しても世尊の法義に掲る嫌疑されれば譬へ目蓮御勸當を受るまでも
 同道の致しがたしと其理を盡して述べければ「奈何にも夫の尤も是を思へば金支五牀不
 具の身か但し三輪紐老の額に年浪よせて雪をいたく身にもあらば汝も心おきなく連行ん
 ものを未だ色ある花の顔ゆへ思ふ願の叶ぬ醜女に劣りし金支かかど歎息をさし給ふ折
 から彼方にて玉ざる女の一聲すれば目蓮驚き尙聞耳立る其處へ袖を以て顔を掩ひ走り來り
 て打伏者われは目蓮あやしみやをら取あさへ何者されば此不作法と引起して見れば金支の
 顔に大なる痕われば「コハ何ゆへに其有さままづ兎も角もあ次へ來りて子細を述べ抱つ
 れんとする其手を拂ひのけて世尊の方へむき」斯の如き見苦しき牀にて御前へ出るの恐れ
 多けれども是を見死させて今日蓮に告るところを世尊も聞しめせ是喃目蓮殿最前御堂にて
 其方に別れお暇の左右を聞んために接待所に待と暮せど其音信あきうち日に暮ければ宮
 内より乗物持せて我迎の者來りしゆへ夫を待せあきて其方に逢んとお茶の間へ入て様子を

うかぐへ御前の物語りの皆我身の上の事にてやるせなく思ひありしうち我身五脉不具あるう又年寄にもわらば人の嫌疑もあるまじと世尊の仰せを聞よりも一夜二夜にて年寄にあらうとておられもせねば誰が如意り其坐にありしを見つけしゆへ夫を焼て此やうある顔とされば五脉不具も同じ身なれば是を以て心よく古郷へ伴われ舅姑の追善回向を其方と共に營ませ給へど涙ととも託ければ凡心はあれし目遣も涙ふくみて答へるやう「汝が孝心驚きいる其様もある上の同道の心安ければもさりとて又其大瘡を其儘にも致しおかれずと答へければ「イヤ妾古郷へ行れぬ愛思の忍にも志のたれざるが此瘡の其方妾を伴ひても多き人目の關守に咎を受ぬ手形と思へば忍ぶの安しと痛をこらへ述るを世尊聞給ふより「コヤ金支女に稀なる天晴の孝心感心せるが其瘡を我見るからの譬へ目遣同道をゆるすども我同道の堅く差留ると云ふより金支の驚き「开の何とせん此瘡われば世尊も同道を免給のんと思ひのほか是を見給ふて同道と差留さるとい「されば汝其身に於て旅立せば野風山風に其疵を破られて古郷へ至る頃必ず重き病の身とされば其身の勿論目遣まで其介抱について勤べき父母の追善を務め得ざるところを我今知がゆへ差留る我意に従ひ目遣一人に自

説の經華法

説の經槃滉

由を授けて旅立せむば汝が身も安泰にて目遣も又能孝道を營み盡すべしと示し給へば金支其理に伏し「ヲア難有や世尊さればこそ翌日を知ぬ我身の危きを示し給ふ夫につき今身を顧みれば誠に女の淺間しき心より後先の考へも亦く父母より授けし身に斯の如き無益の疵を自うら求め孝道に充らずして不孝に至ると身を思へば今更辱しくもあり又口惜くもありと泣伏ければ「イヤ金支其疵の中々以て無益にわらず舅姑の追善に當て大功徳とある其例あるを説聞せば心を正しくして能聞べし諸喜見菩薩の修行の時日月淨明徳佛の寶塔を供養して成佛をどげ一切衆生を濟度さし普く安樂さしめんとの誓願を立られしゆへ百福莊嚴の兩臂を燃して七萬二千歳を経たりしに一切衆生其菩薩の臂さきを見てふかく悲み讚歎しければ其誓願の空しうらざる功徳に依て其兩臂元の如くに癒たり又我前世貧窮の身よて佛を供養せんとする心厚ければ惡病ある家へ身を賣て金貨五枚をうけ夫を佛所へ納めて一偈の妙文を授けしゆへ夫を唱あがら日々我身の肉を三兩づゝ然どりて惡病人へ與へければ其妙文の利益によつて身の苦痛を知ぬ已ならず其皮肉元の如くに平癒し今世成佛の縁も夫より求めたりされば汝が其疵も斯の如き身體供養に當れば我意に任せて是より宮内に

戻り正心に舅姑の菩提を念じるに古郷へ赴き香花の回向をするよりも遙に勝る功徳あり
 と懇ろに示されければ金支兩手を合せて世尊を拜しける目蓮是をつくづくと見て「誠に養
 ひがたき女の胸に張つめし愚痴の厚氷も世尊の春風に解脱したるの私までの安心にて添け
 ちしと述る處へ上足の羅漢達出來りて金支の有様を見聞し其孝貞を感じければ世尊宜まふ
 やう「汝達此尼法子を見よ斯の如き勇猛の真心ある已ならず此大城へ我佛法の入はじめ
 に大迦葉及び舍利弗目蓮の三名我神力方便を以て國王を度してより此大精舍もたち一國の
 萬民佛法皈依とありし其根本の是なる金支尼あれば各々慰勞して宮内の迎の者へ渡すべし
 とわれへ舍利弗金支に向ひ「是喃其方の功聞が如くされば今より尙身を大切に養生して
 目蓮の古郷より戻るを待べしといひ聞しければ金支世尊を始め羅漢達へ一禮しつゝ目蓮に
 暇乞しければ目蓮も又まめやかに無事を告て介抱しつゝ迎ひに來る乗物に移すまで羅漢
 達も附添て異なく大城の宮内へ戻らせつゝ夫より又目蓮御前へ出て旅立の御暇乞をしけれ
 ば世尊近く召よせられて「汝古郷へ赴き夫より何處何成處へ至るとも我へ頼む事もあらば
 其處より立返り來るに及ばず何事に限らず頼む事を心中に念すれば其事を我聞とるに此



坐に有が如く速かあるが我よりの答へ言葉を以て通じがたければ其答の常に携へる錫杖を以てす此錫杖の響の天上天下東西南北物の有かざりまての通せさるといふことおければ是を能思惟すべしと示され夫より御身にかけ給ふ袈裟を自からとらせられて目蓮に與へ給ひて夫の汝古郷へ出立する餞別ありヤヨ舍利弗諸羅漢ヲ合せて目蓮旅立の離別を祝し常精舎に有限りの諸比丘諸沙彌まで目蓮の門出を賀さしむべしと身を重んぜらるゝ難有き御詞を聞より目蓮雀躍して頂戴の袈裟を身に重かけ威儀を正して慈悲圓滿の尊顔を三拜してぞ罷りける扱其翌朝とありければ羅漢を始め皆々目蓮の門出を見送り濟せしに今朝より世尊の御持病の頭痛肺痛重らせられて御寐處を放れ給ひぬいまさしく目蓮の旅立せし離別を惜給ふ故あらんかと云わへる者もある折から世尊の古郷摩迦陀國摩迦耶山切利天正寺に住居する元迦毘羅城一位の大臣にて世尊を守奉りし優陀夷沙門右梵士太郎を同道して來りし其さまを見れば優陀夷の大老の身に甲冑をつけて強刀を帶し其上へ袈裟をかけ又右梵士太郎も勇々しき軍陳の出立されば皆々驚きけるに舍利弗此二人に對面して此由を世尊へ言上しければ卒然と世尊三衣を召れて對面所へ出給へば上足達も残らず其坐に列したる處へ

優陀夷進み出けるを世尊見給ふより自ら立て其手を取給ひ御側近くへ坐さしめられて「アヲ久しや優陀夷イヤ優婆離比丘我汝にあふの愛敬く嬉しけれども其替りし姿を見るゆへか今朝より身を悩め其様に是へ來りし事故を早く語り聞せよと仰せあれは「先以て御安泰の尊顔を拜し難有存奉る情私斯の如き躰にて尊師を拜謁するの此度摩迦陀國に大變ありたるゆへあり其大變の謂の提婆達多頼に思し阿闍世交匪に放れてより一味の惡徒を一手にまどめ迦毘羅城を責取て我住國にする其下組に國中の庶民を手得馴と六群比丘の内難途跋難陀馬宿万宿の四名おらびに伽留羅提舍貪曾官等に命じて迦毘羅城の四方を廻らせて和合僧を破り跋難陀伽留羅提舍の二名の神變をげんじて女子童男と化して摩法をすゝめ或の長者と化して種々の金錢を手の中にあらしめて市在の者に與へ佛法の亡國亡家の基我法の子孫榮福する根元と詞をたくみて言すゝめければ文盲無智の凡俗の競て魔族にいり先に世尊より血脈を受たる公家大臣優婆塞優婆夷婆羅門の中にも血脈を燒すて或の珠數を切て彼が門に入し者も又少からず已に矩奢那國の顯明王の皇子龍種太子の其摩族とされば佛法依の父王を徒多河といふ難處へ流し又臘奢國の先陀羅王の餘泉太子の父王提婆の法を信ぜ

ぬとて深山の谷へ獄屋を造りて此内にいましむるもあり斯の如き世態とされば難陀王軍隊
 へ悪魔追討の命を下し給へど其評議未だ一決せざるうち早くも右梵士三衣を着たる魔属二
 名を打取て其首二級を政府へ差出しければ悪魔といへども三衣を着者なればとて夫を天正
 寺へ渡し給へど某未だ正身の出家に有ざれば其法則を辨へざるが三衣を着者の皆世尊の
 法弟あらんと存するがゆへ其二級を右梵士に携へさせて同道せりと逃ければ其坐へ右梵士
 進み出て袈裟に包しまし、實檢にそあへければ世尊舍利弗にむりひて誰あるを問せらる舍利
 弗其二級を熟覽して「此二級は共に難陀山の聚落に住し六群比丘の馬宿万宿あり渠二人の
 元我と目蓮の弟子と成しが多瞋放逸にて近頃提婆に従ひ法敵あること疑ひなしと言上しけ
 れば法敵たりとも師弟の縁を以て引導してとらせよとわれは舍利弗其二級を庭前に並べ居
 て陀羅尼を唱へければ不思議や忽ち其二級二龍と化して飛さりける世尊是を見給ひてアラ
 宿業ある哉と歎じ給ふより優陀夷詞を改め「扱前言の如きされば私老年致仕の身といへど
 も國家の大變は見すてがたきゆへ悪魔追討の軍隊に連り先に法性妙顯の妖怪を退治して
 妙惠比丘尼の御一命をも救ひたる此獅子王の劔を以て惡徒に向ひさば提婆はあろり十羅刹

といへども退治せざる事なれば難有も世尊より先に授けし持戒法名此袈裟をも返上いた
 さんが爲に遠路を是迄來りしと述ければ世尊譴然として告給ふ「汝が心底國家に忠あるの
 感心せるが我佛法の又然らず其罪の憎ども其人を惡されば譬へ法敵の惡魔外道たりとも救
 護する慈悲心を以て法跡とすれば汝が望みの協へがたしと仰らる「爾らは何を以て國家の
 大變を取鎮むべし」其心配心やすうれ我是より古郷へ赴き善惡の人をあやまさず國家を安
 くおさめしむれば汝の此坐に於て更に眞の出家とあり世法をゆだねし優陀夷の名を棄て今
 より堅く優婆離と名のるべし我汝夫婦の忠心を報ずる爲に疾より十大弟子の中に加せし
 其懇志を今更破るべうらずと示し給へば優陀夷の心中忽然と武意 翻つて佛心とありけれ
 ば感涙を流して合掌しつ、「アラ忝じけあや妙覺無位の法身に於て善惡の差別なく國家平穩
 に至る法語をき、我本懷此上何うおらん然らば尊命にまたがひ此坐に於て眞の出家を遂ん
 ど次の間に下りて武具を脱すて清淨の姿とありて御前へ出しを右梵士つくく」と見て共に
 出家を願ひければ世尊渠にも出家を免し給ふより舍利弗三衣を授けて 髻を切わたへけれ
 ば世尊善男子右梵士比丘と稱せられ夫より大迦葉に古郷への出立を命じ給へば大迦葉其赴

きを諸比丘へ達しければ皆々其用意をぞ致しける去程に世尊の大眾の徒弟を誘引て大林精舎を立出給ひしが諸佛諸天の守護によつて遠里の道も日ならず摩迦陀國切利天正寺に着給へば舍利弗を以て迦毘羅城へ到着の旨と某の日降魔の法會を營みて武器を用ひず國家を穩かに安んずむるよしを奏聞させ又阿難を以て夕陽山の麓に住給ふ妙惠比丘尼の方へ當着を告給へば早に雨を得られし如くに悦び給ひ阿難の御身の戒師あれば懇ろに饗應されて越方の方の心盡しを謝せられ又大愛道尼と過つるかた親子の契をむすびてより此方も此庵中に移り給ひて共に佛道をばげみ給へども御老躰の上は當時の御病氣にもわれは明暮世尊の御法のみを渴仰さるるといへども逆も山上の御法坐にの登らせられがたき御身あれば國家平安の御法すみには何卒此庵中へ渡らせられて御老躰へ御法話をしくださるやう尊者の扱を偏へに頼どあれは阿難其志の深きを感じて「夫の御尤もの仰かき世尊も常は大爱道尼公の御養育を受しし實の母の如き高恩ありと仰らるゝがゆへ其御願ひの必ず協ふべしと述て立戻り其趣きを世尊へ聞へければ御得心の御答へあり扱又迦毘羅城へ御使に行し舍利弗立戻りて世尊に向ひ難陀王を始め諸大臣方世尊の御當着を聞て暗夜に燈火を待たる如くに喜悅

あし給ひ夫より私輿殿へ告ければ官女達走あつまりて世尊御當着の恐悅を述る中にも優陀夷の女房の老眼より感涙を流して祝されける又御使の戻り道にて魔族にかたむきし和合僧を多く教化いたし此外優婆塞優婆夷の變心せしをも能解さとしければ此者等法會參詣に各々頭へ曼陀羅花を指こを約せりと述ければ世尊其隨機應變の頓智を感じ給ひて厚く勞いれける去程に國中四方の辻々へ降魔法會の當日を志るせし札を國王より立せられしゆへ已に其當日とありければ國中の貴賤老若男女天正寺へ早朝より參詣する其群集の有さまいさかから群蟻の連行するが如くされば法堂の忽ち爪も立ざる程の聽衆ある中に花を頭にさしたる者も最多くあり扱世尊大法堂の高坐に上らせ給へば上足の羅漢を初め諸比丘に至るまで兼て仰渡されし嚴命の如く巍々蕩々と威儀をたいて高坐の左右に列坐しければ世尊微妙の御聲高く今日更に國家平穩庶民安心の法坐に於て天神地祇諸佛諸天に告奉る我既に因位に於て衆生の諸願を満ため大通智勝佛と現じて二十五種の誓願をたて四魔の惡心を翳して善心に歸せしめんと欲せり又淨光佛と成て五十一事の善法を以て無明の長夜に迷ふ衆生を照して是非の心を鎮たり又万燈佛燃燈佛燈明佛十二光佛或は盧舍那佛最勝佛

七現五智三十六尊ともあり其餘又菩薩摩訶薩仙迦人妙とまで應化して衆生のために功德を施こしたる此骨肉を集めて積上ちバ毘補羅山の峯よりも尙高かるべしましてや今世大國の皇子と生れ百福十善たる鳳鶴の身を顧みず錦繡の片袖を妻の手に残り檀特雪山の山鳥とありて難行苦行せしは是皆衆生の爲あり摩訶衍。今現在。千佛供養。一佛出世。一佛供養。千佛出世。二世通達。微妙普現。證誠化應。阿耨多羅三藐三菩提。一切の諸佛冥加あらせ給へど摩訶薩如意を頂給へばわら不思議や法界妙樂の光り四方にかいやり青蓮花天降り紫雲たあひくおかに諸佛わらわれ異口同音に告給ふ「善哉々々應身化益の釋迦牟尼如來慈悲万徳の說法正に利益あり若此語又誤りわらば三世の諸佛舌をたゝんと誓言したまへば佛法守護の天神降魔の鋒を擧へて虚空にあらわれ諸民安心の說法を障碍する者わらば斯の如くと大衆の中に潜伏せし魔屬の跋難陀を搔握て去ければ渠と共に忍び入し難途貪官の二人は是に恐て舍利弗の前へ至り名を露し慙愧をして佛弟子とあらんことを願へば其意を叶へて三衣を授け諸比丘の坐に入けるより世尊西方の無量壽佛の本願を説せられ次に一切善法の障碍とある欲魔身魔死魔天魔の四種を説給ふ折から伽留羅提舍出家の姿と化し懷劔を持て袈裟



提婆達多五逆罪を犯し阿鼻地獄す

提婆達多

くさくさ

智度輪の意

衣を着たる數多の外道を引連來りて佛弟子を望みしゆへ此由を舍利弗世尊へ聞へければ奇特の者ゆへ望に任せ羅漢の坐へ入置べしとわれば其如くいたせしに彼等羅漢の威儀の正しきを見て針の麤に坐するが如くされば伽留羅を始め皆其坐を逃去て提婆の陣所とする切陀羅山へ趣き法坐に入て佛を殺害すること思ひもよらずと述ければ待まうけたる提婆達多是を聞より忽然と獅子憤身の怒を發して斯ある上の我自から趣き滅亡させんと兵具に身をかため兩手の爪へ悉く毒藥をさし五尺の大劔を帶て伽留羅を先立飛が如く天正寺の山門に至りければ天より輪寶降きたつて伽留羅の眉間を破り速死せしをもまらず提婆の勇誇て進みける道にて華色比丘尼支へければ拳を以て一打に殺し法堂に荒入ければ法坐の濟て世尊の山下の尼道場へ今下り給ふと告る者あれば其處にて大劔を扱はち後より追かけゆき山上より下を望めば今世尊坂の下段に有を見るより忿怒の大力を以て傍の大磐石を抱かへ從者諸共微塵にされど投げかけたる此大石世尊の眞向に落かゝる大難を救んと山上の毘羅神金剛杵を打つけ給へば其大石碎て御一命の扶りしが其進り世尊の足の指にあたりて血の出ければ阿難ちどろき介抱せる其間に早くも提婆大劔をひらめうして走來り已に世

尊に近づくとする其地忽ち破裂して炎々たる猛火燃上りし其中にあられたる青赤の二鬼に兩手をとられ六万歳むそとせの書物を見きわめて神通自在の提婆達多も南無の一聲を此世に残し無間地獄へ墮るとい鳴呼天ある哉命ある哉

釋迦八相倭文庫六十二編終

書中五用捨

- 男女の畫面其年齡に應ぜざる者又同人の面容替る處ある用捨
- 各地の遠近を往來する其時日里程の目算に合ぬ遲速ある用捨
- 尋常の人世に合て數へ見ば其人の年齢長壽過たる者ある用捨
- 方等を報土又踐幸を千香と誤りたる如きの字違ある用捨
- 五天竺を我畿内の五國に見做し又見做さざるところある用捨

釋迦八相倭文庫六十二編

抑も此摩訶摩耶山切利天正寺の元夕陽山といふ大高山にて花木の風景逍遙に勝れたれば世尊の母摩耶夫人此峯を深く愛られしゆへ其志を永く慰めさせしめんとて夫人の遺體を此峯に葬りて十六丈の寶塔をたて其正面に世尊誕生の縁とありし彼藍毘尼苑の提婆羅樹を移し植此傍へ夫人の居住せられし青龍殿をも移し造られて香花の供養怠らざりしが世尊正覺を遂られ再び古郷へ入給ひしとき此法堂にて初て説法せられ摩耶夫人の身に善因あるを以て更に夕陽山を摩訶摩耶山と改めらる又此山の麓にある惠中庵といふの世尊の后妃耶輸陀羅女出家得道して名を妙惠比丘尼とあらためられ持戒堅固に修行せらるる道場あり此處の爲に御一命危うりしが山神の加護によつて大難を免れ足の指の小難を受給へど夫を少しも憎せられずかへつて提婆の墮獄を愁まれ又大愛道尼の老苦を早く問せられんと僅の羅漢を伴ひ惠中庵へ至り給へば庵主の悦び大うたあらず直に上殿へ御案内して此旨を大愛道尼の御寢所へ告給へば老尼の夢の如くに悦ばれて俄に衣服を改め侍女にたすけられて徐々

出給ふ其替りし様を世尊早く御覽あるより坐を立せられて自うら御手をとりて坐さしめられ「アラ久しや老尼公我の釋迦ありと宣へば老尼涙と共に「喃あつうしや嬉しや世尊にましまさうけふ此頃わけくれ暮ひまいらせし一念どいきて御對面をあすうららの慈悲を受たき願あり妾斯の如く眼盲も兎角よりらぬ上に老牀とされば此世の事に於ての露ほどの願もあければ何卒後世安樂の至要もあらば夫を偏へに投げられよと御手をとつて押頂き給へば世尊も涙に呉給ひて「开の御尤もの御願ひされば後世の大事を傳へ聞へんが夫を此座に於て御聽聞あれバ自うら神拜して恭敬心を増しめらるる御信念御病牀の心脛を悩ませば御寢所に於て御聽聞あるべし我説法の音聲の此坐にあつて聞も千里先に隔て聞も同じことあるの既に目違もためして老るところありと示し給へば「夫の誠に心安くありがたき事あれども後世の一大事とする其貴き御法を敷物に寐て聽聞するの勿躰さき事あらずやと答へ給へばイヤ夫の無病人の身あり御身の今御目病の上御老牀されば法意の委しきを得給ふに御寢所に入て枕を高くし他念なく御聽聞あるに越したることあし夫食物の美味を老るの物にあつて器にわらず法意を敬恭するの心魂にあつて五牀にわらずと示されければ老尼是を聞給



耶輸陀羅女
法名妙惠比丘尼

五世
法名妙惠

世尊妙惠比丘尼の恵中庵に於て大愛道尼のくまふ浄土の十樂法語給ふ



轎屋弥夫人
法名大愛道尼

ひて快く御寢處へ退き給へば庵主世尊に向ひて「老尼へ授け給ふ後世の大事とある御法の普く婦女子の至要とも成べくと思へば願くば妾をはじめ此庵中に行ひます諸比丘尼達にも聴聞をゆるし給へど願ひければ「夫の今我より告んどせしに能も夫に心づうれし女人たる者の尼法子に限らず誰にても此座に連りさすべし夫につき老尼の朝暮顔を洗せらる水盤の中へ清水を半分たへて是へ出すべしとわれば其如くして差上るより從者の羅漢達其座を取廣げ坐並を定めて聴衆を促しければ大愛道尼に附屬する比丘尼八十人妙惠比丘尼に從ふ尼法子百五十人其外數多の婦女子其座に連ければ世尊上座の倚子に寄給ひて「夫諸人の後世安樂の至要の傾承淨土の十樂に過ものありし此十樂の第一を聖衆來迎樂といひ第二を蓮花諸開樂といひ第三を身相通樂といひ第四を五妙境界樂といひ第五を快樂無返樂といひ第六を引接結緣樂といひ第七を聖衆俱會樂といひ第八を見佛聞法樂といひ第九を隨心供佛樂といひ第十を増心佛道樂といふあり諸其第一聖衆來迎樂といふの總て惡人の命終る時其性反對する風火の二つ身にまつわれば甚だ苦し善人の世を去るとき其性陸じき土水の二つ身まつわれば苦みさし况や念佛稱名の功德を積し者の彌陀の本願に叶ふがゆへに

其隨終に至る時西の空晴わたりて紫雲たあびき異香くんじて音樂の老らへ妙に聞へ金色の光りの中に彌陀如來二十五の菩薩を始め數多の聖衆を引きたがへて來迎あし給ひ添けあくも白毫の光明を以て行者の頂きを照し給へば如來の左右に連り立給ふ觀世音菩薩大勢至菩薩行者の側へ來らせられてありがたくも觀世音の百福莊嚴の手を捧給ふ蓮花の安座を差延らるれば大勢至微妙の聲を以て行者に向ひ汝いしく惡念を去て善念をもちし萬に慈悲ふりく念佛稱名せし其功德空しからず今如來の來迎にあづる芽山度身とありしと頂きを撫て寶の蓮臺に乗給ふ其嬉しさに他念なく一心に極樂淨土へ起うんとする其一念の間に西方十萬億土へ往て生るゝあり彼忉利天の喜見城の樂みを究る處といへども帝釋天を始め諸天人も身の果報盡る時の五衰あらはれて三惡道へ落る愁みあれども此極樂淨土へ生れし者の樂みの無量劫盡ることあければ誰も是を願ふべし扱て其蓮花初開樂といふの此淨土へ生し者此地の蓮花初めて開く色香の妙あるを見る樂みの何に譬へんものもあくさあから盲目の眼を開きたるが如くにもあり又賤樵夫が京の王宮へ入たるが如くにもあり其身を見れば紫摩黃金とありて美事の衣服身の飾も自然にそあり金殿玉樓縁のはやし寶の池に浮み

遊ぶ小鳥を眺たのしむ處へ觀音勢至出來り給ひて種々慰め論し給ふを恭敬禮拜して此二菩薩に従ひ彌陀如來のあひします處へゆき七寶の階に跪ひて慈悲万徳の尊容を親しく拜み奉るの誠にありがたき事ならずや扱其身相神通樂といふの極樂の衆生の其身金色にして三十二相を具足し五通を以て十方世界の事を居ながら能きり又過去未來の事までをも掌を見るが如くに知るあり此娑婆の凡夫に於て三十二相の中一相を得る者も亦く五通の中一通をも得ることおければ日の光り燈火にあらざれば物を見ること能はず紙一枚たてて其先を知ることおし此極樂の神通自在を得たる衆生に第六天の主を競ればさかづら帝王の前へ乞食の出たる如く又見ゆる貴き身とあるの誰も嬉しからずや扱五妙境界樂といふ此淨土の阿彌陀佛四十八願を以て莊嚴せられしゆへ道路の平うにして皆瑠璃と黄金あり五百億の宮殿樓閣講堂精舍に至るまで器物皆七寶にて常に如來の万徳を音樂に詠ひて樂めり又此廻りに八功德水といふ寶の池あり是をば功德水といふ意に此水の第一に能澄て清らうあり第二に冷やうにして涼し第三に其味甘し第四に柔かにして輕し第五に能潤ひ第六に安く和らうあり第七に飢渴を能益し第八に五臓五臟を補ひて心魂を清くする名水されば斯

の如く是を八功德水といふあり此外寶の草木光明を照して諸佛衆生の眼を悦ばせ月日燈火もかけれど常にありるく暑さ寒さもあらずに此處の衆生の安樂を究めるあり扱其快樂無退樂といふの娑婆に住者の樂みに其終りあらず三途八難生老病死の患ひあかじみわれども此極樂淨土の樂みの不生不滅にして各々宿命通を以て我身の娑婆に有しことを能きるゆへ我の何よりして菩提心を起したり我の何の因縁より佛道を求めし我の某の法師より戒を受し杯と互に善縁を得たる越方の物語を樂みとし又或時の思ふに任せて佛國中を飛行して數多の天人と交りをむすび我不退の快樂をうけし身とされば終に三界六道に迷ふ者を普く救んとする善念をおこす貴き身とあるあり扱其引接結縁樂といふのそれ娑婆の樹の静からんとすれども風來て是を動し月明うあらんとすれども雲來て光を掩ひ子養んとすれども親またすすべて善人の世を早くさり惡人の世に墜り思ふ事一つ叶へば又二つ叶のぬ事を協んとして心を苛つより六道四生に輪廻して各々其生を替ければ過去の人の今世鳥獸とあり今世の人の來世魚虫とあるもあれど宿命智をければ世を隔ちたる親どもあらずに是を殺し子どもあらずに是を喰ひて其恩を報ずることおければ此淨土に生じ衆生の自くら天耳天

眼宿命智を得れば三世の事を能まりて慰むるも思ふきも普く救て此極樂淨土に往生をさす
 るあり扱其聖衆俱會樂といふ極樂淨土の衆生の娑婆又有時名のみ聞たる諸佛諸菩薩の
 正身とむつまじく俱會するを樂みとすれば普賢菩薩より大菩薩心を授り一切諸佛の智慧の
 母とあむむる文殊菩薩より佛道の妙智をうけ彌勒菩薩より不退轉の利益を聞地藏菩薩より
 廣大の慈悲心を惠れ觀音勢至より福聚海の善根心をうけて彌陀の本願を稱讚することを増
 せり偕又見佛聞法樂といふ此娑婆の者の眞の佛菩薩を見こと能はざるが極樂淨土の衆生
 の眼の前に無量壽佛の尊容を恭敬禮拜すれば彌陀如來赫々たる光明を照して其者の機に應
 じて利益を説給ふがゆへ是を見聞して十方の國土より諸菩薩をはじめ聲聞緣覺諸天人集り
 來りて各々我國も斯の如き淨土を求めたしと願へば如來其時忽然と微笑れて尊容を動し給
 へば觀世音夫を見給ひて如來何ゆへにほゝるまれば給ふと聞へければ我十方國土より來る菩
 薩の願望殊勝あるを感喜して微笑りと告られ夫より其國々へ寶鉢を出現せられて苦海に
 たゞよふ一切衆生を普く救ひせらるゝの誠に難有ことあらざるや扱其隨身供佛樂といふの
 極樂淨土の衆生の夜晝のわうち常に天の妙花を彌陀に供養して禮拜し又他方の諸佛を

供養せんと思ふとき其由を佛前に告て八方の國々へ自由自在に飛行しもろくの佛菩薩
 に值偶して廣く菩提の記をうけ身の位の増を以て樂みとせり偕其増進佛道樂といふ此娑
 婆に於て佛道を修行すること甚だ難し其故いかにとされば貧究の者の佛心を起すといふ
 ども其貧苦にほだされて其意を遂ることかたし又祈樂の者の其身懶惰にして後世の果福を
 得ることを忘らずたまゝ事について善道に發心する者あれども内に煩惱の種盡されば忽
 ちに外の惡縁に引もどさるゝがゆへに魚の子の人とあるものさく家の木の實熟する秋もさ
 ければ煩惱樹に菩提の花を見ることがもさき有轉變の善心を物に譬ふれば廣き池に張つめ
 し氷を解んとて一椀の熱湯を其池にうげば其湯の熱ほど氷の解るを目の前に見れども
 一夜過れば其湯をかけし處の元よりも高き氷とあるがごとく勞して功なき境界より善道の
 遠ずして反て身の苦をまじ三惡道へ落る者多くあれども此極樂淨土の衆生に於て佛心堅
 固にして懈怠することなく日々に増進をする其此因縁といふ第一に彌陀の悲願力によつ
 て増進し又佛闍の莊嚴奇麗あるを見て増進し或水鳥樹林風鈴の妙音を聞て増進し其外
 諸菩薩の善友に交りて増進し終に無垢清淨の菩提心とありし其功德によつて永劫不退轉の

極樂往生をどけるあり是をもろくの行者ゆめく疑ふことあり斯の如くに無量の衆生を救ひ給ふ廣大の佛あれば其身に八万四千の相あり其八万四千の相に又一々八万四千の隨好あり其隨好に又一々八万四千の光明あり其八万四千の光明一々十方世界の念佛の衆生を照して攝取して捨給はず此光明 踊り出て地獄道を照し膝より出て畜生道を照し隱蔽より出て鬼神道を照し臍より出て修羅道を照し心より出て人道を照し口より出て二乗の人を照し眉間より出て大乘の人を照すがゆへ此佛の名を又無量光佛ともいひ又無邊光佛とも又無礙光佛とも又無對光佛とも又饒王光佛とも又清淨光佛とも又歡喜光佛とも又智慧光佛とも又不斷光佛とも又難思光佛とも又無稱光佛とも又超日月光佛とも云されば一切衆生此光明に照される者の三垢消滅して身意柔軟歡喜踊躍して善心を生ずるありと説かへらせられて一坐の聽衆を見わたし給へば妙惠比丘尼を始め數多の尼法子遠何れも感涙を袖にて拭ふ有様を世尊御覽あるより傍らの水盤を持せられて妙惠比丘尼を召よばれ「御身此水盤を自りら手に持て此水面にむりひ彌陀の名号を三べん唱へ夫より其如くに此法坐に連りし尼法子及び其外の婦女子の聽衆へもさせて其終り其水盤を我へ渡さるべしと命じ給へば

西方十万億土
諸佛聖衆不
退轉の極樂
淨土の園



妙惠比丘尼其仰の如くして夫より次の尼へ手より手へわたし終に數多の聽衆の爲たる終
 りを世尊へ奉れば世尊夫を受給ひて共に念佛稱名をさし給ひて又妙惠比丘尼に向ひ「うれ
 菩薩に三種の涙あり其一の菩薩衆生の功德を修するを見て愛敬よりこぼさるゝ涙あり其二
 の邪見放逸する衆生の功德なきを見て懸まるゝ涙あり其三の佛法を誹謗する衆生を見て驚
 き給ふ悲嘆の涙ありされば其盤水の其一とする菩薩の涙に等しき諸女の感涙と念佛稱名を
 浮めたる大功徳水あれば是を以て煩惱心を濯がば何ある罪障といへども消滅せざる事あけ
 れば是を早く大愛道尼公へまいらせて御顔を濯せよば是まで何くれとさく心を盡されて癒
 ざる御眼盲も此度の御身の信心と他力の功德を以て正しく癒へしと水盤を渡されければ妙
 惠比丘尼の如意寶珠を得たる如くに悦び直に御前を立給ふを又あしといめられて「其水の
 猥に捨べうらず夫を池川へろゞげばあまたの魚類佛果を得て必ず天上へ生をかへるあり又
 山林へそゞげば其地に住虫類草木までも右の如しと仰らる處へ妙惠比丘尼の元より召つり
 へれし局女中尼公と共に出家して今此惠中庵の維那を勤る比丘尼進みいで「今朝此庵中に
 同居する華色比丘尼天正寺へ參詣いたし御法聽聞の戻り道にて提婆の爲に打殺れし其死骸

未だ取おさめをいたさねば願ひくば其功德水を與へて後世安樂をさせましたしと述るより
 庵主殊に驚き「夫のさてくちげかわしき事ありさらば此水老尼公の濟しうへにといひ給
 ふを世尊聞給ふより「イヤ夫の老尼公の濟をまたず器にわけて早く與へよば其水のモシ華
 色比丘尼の返魂水ともあるべしと仰せあれば兩人とも悦び急ぎ御前を下りて其手當をぞい
 たしける斯る處へ迦毘羅城の奥殿より優陀夷の女房を先として好容夫人鹿野女此外世尊に
 因ある奥女中前に戒を授りし者も授らざる者もむつまじく數多同道して此惠中庵に來り維
 那の比丘尼にまみへて各々布施物を奉りて思く願を世尊へ立たき事を述べ維那其婦
 人達を皆客間へ入おさしに優陀夷の女房一人世尊の御前へすゝみいで恭敬禮拜しつゝ「私
 前頃御使の舍利弗より御當着遊されしを聞より早く尊顔を拜したく思へど御覽の如き老
 衰の身とあれば天正寺の御山へ登る事も叶はず近きうちには王宮へ御入もあらんと夫のみ
 待くらせしうち今日天正寺に於て世尊の提婆のため大難を受させられしとの取さたわれ
 ば難陀王を始め諸臣奥向の驚き大うたさざりしが其大難世尊の不思議と免れ給へど提
 婆の其天罪親面よ來つて阿鼻に墮獄せしと又注進ありしゆへ初の驚きに引りへて皆御代萬

歳を唱へる中に世尊の是にましますよし奥中へ聞へければ私同心の婦人達數多同道して参りたり扱私淨飯王崩御のせつ押て出家を願ひけれども難陀王御免しきき此度夫優陀夷眞の出家を遂たる事をうけ給へれば夫を予立て私首尾能御暇を乞濟せしゆへ何卒願の如く出家させ給へど述べれば世尊快然として「それの殊勝の事ありさらば今日出家をどけて此庵中を汝が老樂の菟裘とせよ汝夫婦の丹誠ひとかたぢらねば我其報恩として一子樂特の愚痴をわらためさせて道果を得さしむる事を嚴く舍利弗に命じおけバ幾時うの必ず道を得べしと仰せわたさる其處へ妙惠比丘尼出來りて優陀夷の女房を見るより「コハ久しや能越れし積る物語り山くわれども夫又ゆるく語らんと會釋して世尊に向ひ「最前の盤水を私老尼の御寢所へ捧ゆきしうバ老尼の仰に世尊の教へられし如く寢所に於て淨土の十樂を他念なく聽聞せしに眞の淨土にいたりし如く感喜せしとのたまひながら見へぬ御目の感涙を拭せらるゝ其御手へ水盤を授けてまうと示しませば尙御信心をまされて御顔を洒ぎ給へば誠不思議あるり亦月の雲を風が拂ひし如く立處に御眼明うにあり給へば「夢にのあらぬ現はのあらぬとまばしん感われしが御心正しくあり給ひて世尊の御仁慈

を深く責められ何の差おき此報恩は世尊を始め羅漢達數多の聽衆へまで精味の齋を進れど永年暗き目の開き始にと筆を取せられてかき給ひし名号の則ち是ありと差出給へば世尊夫を押したうりて優陀夷の女房に授けられ「汝夫を見よ輪量彌の方永年御目くらうりしが御信心と他力の功德にて今御目開けてかき給ひし名号とある斯の如き吉事の折うら妙惠比丘尼持戒堅固あるを以て今日より更に悉皆總比丘尼の大教師を命ずれば諸人も是より厚く敬ふべしヤヨ阿難出家入門の作法等を大教師及び維那の比丘尼へ能傳達して今日よりの出家作法を行なせしむべしとわれバ從者の羅漢を始め坐中の者皆大教師を祝し終れば大教師と維那阿難を別間へ連立けるが間も亦く其別間に於て優陀夷の女房を始め持戒出家を望みし者普く煩垢にまみたる花の衣裳を清き袈裟衣に脱替て元の坐に並びければ大教師念佛稱名を唱ながら玉の飾を落して持戒法名を授け給へば皆又大教師を勞ひつゝ世尊を拜しければ世尊の各々に對して善女人後世安樂と祝せらる此處へ大愛道尼大老の身に袈裟衣を着給ふ上へ婢女の用る襪前拭てふものを附て齋の臍部を捧げ出夫を世尊の前へ備へつゝ「妾越方まうゝあるたがひめより神佛のお憎みを受けて永年目も暗うりしゆへ過る年波斯匿王の

后妃未利夫人元須達長者の婢女ありし時用たる襦袢拭てふ物を優陀夷の女房を以て授け給へど夫を見ることも叶ねば唯手に取て日夜怠らず頂く已ありしが今日夫を見る事を得たれば斯の如く夫を身に附て世尊の給仕を自うら爲を以て聊かの報恩と思召給へど禮拜しければ世尊喜然として「それ百年の垢衣の一時の洒を以て一時に消し百年の造悪も一時の懺悔によつて一時に消滅す我御身の本身に復せられしを見るの優曇花を得たるよりも喜ばしと示さるゝ其處へ彼盤水の功德にて不思議と蘇生たる華色比丘尼其身の冥加を早く謝せんと押て出きたり世尊を禮拜する折うら老尼の施主たる齋の膳部其坐の者へ普く敷滿たれば皆々夫に附て自他平等の功德を互に唱へて二世の安心を悦びける穴賢

釋迦八相倭文庫六十二編終

釋迦八相倭文庫六十四編

去程に初利天正寺の降魔の法會成就して惡魔の退滅張本提婆達多の墮獄まで早くも遠近に聞へければ正法邪法の緒餘天下にあらはれ既に當日參詣の輩の眼の前に諸佛諸天の不可思議を見て世尊の威徳を感じ夫を親族へ傳へて信心を起させ又是まで惡趣にかたむきし者其現罰を聞傳へて膽をひやし自から我慢の角を折て佛道に入者も多ければ其翌日より天正寺の參詣の日々に増ける扱前に惡徒とありし矩奢那國の龍種太子の父顯妙王を流刑せし徒多河の島へ自から早船よて趣き不孝の大罪を前非後悔して王宮へ連もどり夫より名馬に鞭を打て初利天正寺に來り惡徒のために不孝の逆罪を犯せし懺悔し又臘舍國の祿泉太子も父千陀羅王を獄屋より出して厚く敬ひ不孝の改心を誓て是も天正寺へ來り逆罪を懺悔して父の二世安樂を願ける扱又當國の難陀王の前に用意せし軍隊を解て市在の辻々へ立たる降魔法會の札を大救徳政の札に立替られて日ならず天正寺へ參詣せられ國家平穩の法恩として世尊へ摩黎山の牛頭旋檀香木閻浮檀金等を備へ諸比丘へ若干の白布を布施せられて尙提婆達多の轉末を聞給はんことを願ひければ世尊夫を諸衆へも聞さんと法堂に於て提婆の轉



目蓮の母
提婆達多

千四百六十一

目蓮如來
以地獄之火
消滅母之
提婆達多

目蓮尊者



末を説せらる「それ我親戚たる解飯王の一子提婆達多の惡業の其小とする處の算ふるに違
ちし其大とするの王舎城の頻婆娑羅王の世子阿闍世太子を妖術にて狂惑させ其父母を殺害
爲しめんとせし逆罪を以て第一とす是についき又其身大衆に圍繞されて我と等しく庶人の
恭敬禮拜を受ん爲に我和合僧を破りて身に從がらせ佛法皈依の諸王子諸民を勾引して惡徒
にいれ或の華色比丘尼を打殺し又我足より血を出せし斯の如き逆罪つもつて終に天罰免れ
がたく墮獄に及べども其最後に提婆能も南無の二聲を唱へしが責て其時今一聲佛の名を
唱へるに墮獄の身とらぬものを其一聲の出ざるが則ち惡運の切めにて博學多才の豪傑
も獄卒の手にかゝりて甚重の罪果を受るといへども其最期に稱へし二聲の功德と渠地獄へ
落て因果の道理を能辨へしゆへ其利益とによつて熱鐵輪の大苦一大劫を受る曉に四天王
の上に生れ又展轉して他化自在天に至り六十劫を経て三惡道に落す正しく辟支佛とありて
其時の名を南無といふ斯の如き大惡無道の提婆といへども最後に唱へし南無の功德を以て
免れがたき宿業をまぬりれ終に成佛を遂れバ况や念佛の行者に於ての後世の安心疑ふべり
らずと示されければ皆感伏をぞおしける諸今日難陀王の供奉の中に從ひ來りじ前王の臣今

の老年にて致仕とありたる光明大臣右將軍初大臣其外の諸臣前に戒を受たるも共に講坐近
くへ進みて持戒法名を願ひければ世尊其各々の面跡をつらとと御覽ありて「汝達老て又
我子に在るの殊勝ありと仰せられ夫より光明大臣を光明大居士右將軍を右善大居士初大臣
を波都奈大居士と号せられ其外の臣へも居士号持戒を更に授け給ひて昔の勤功を慰勞され
んとて夫より難陀王を始め其供奉の臣及び此前王の臣達を大殿に移されて切利天喜見城の
音樂の第一とする法苑樂を奏すべき旨を世尊より命ぜられしゆへ優留彌螺迦葉の瑠璃の七
弦琴をひき伽闍迦葉の羯鼓をうち那提迦葉の笙をふき安陸比丘の篳篥をふき寶頭盧の大鼓
をうち此樂器の調子揃ひしを見て迦難立て舞ければ此音樂の妙音五欲をはおれて潔く人身
を慰めければ王臣一同歡喜斜ならず世尊の厚志を謝し國家長久を賀して還幸せられける諸
又目蓮尊者の大林精舎を立出て古郷の王舎城近き道までいたりしが此道の彼方西高山とい
ふ山の麓に元家召遣ひたる僕の益利我母終りてより身を退き其麓に小商ひして居よしを
聞傳へければ夫へ尋ね行て益利に見へ我母の世に有しうちの行ひより死去の節變りし事わ
りしまてを能聞たいさんと其處より三里道を曲て尋ね行ければ益利の二年前に死りて今

其家もあしと告ぐれし者に向ひて夫どいしらず是まで折角尋ね來れば責ての事に其墓へ念佛の二遍も唱へたしといひければ其者又其葬りし地を能致へてくれしゆへ其墓所へ行て渠が後世を懇に念じて回向をどげ夫より道をいそぎ王舎城の京より一里余へだつ我傳相屋敷へ至りし頃にはや日の暮たれども折しも七日の月灰に照すを以て傍を見わたせば年ふるく我家の田畑を作る者の住家とせし長家又ハ機織場とあしたる立家其外も彼是合せて五十余軒ありたるに今見れば其家作一軒もかく我本宅とせし七千余坪の中に建つらぬたる家藏も皆轉倒して見る影もかく朽崩て衰へしに荆芒のみ我儘に生茂りたる野原とありし我屋敷迹を見て神通得たる目蓮も涙を合て心の中に思ふやう我此有様をしらぬが家に入て日を定め舊友知己小者までを呼集めて追善の營を爲んと思ひし甲斐もなければ先今宵の墓場へ一遍の供養を濟して近邊の家を宿にたのみ夫にて又思案をすべしと屋敷の裏方にあたる家代々の墓所地へ赴き荒果たる石塔へ持來りし供物を備へて回向をどげ取わけ初て見る母の石塔へ向ひてハ一心不亂に罪障消滅の經陀羅尼を唱へ終り夜の更ぬうちに近邊の家を旅宿に頼さんと足早に立戻る後の方にて羅下くと呼聲の正しく母の聲にまされければ是に

驚き再び母の石塔の前へ至りて見れば彷彿と其様瘦衰へたる老女丈長き髪をまどろに亂し渦々たる嗔聲を以て「喃おつりしや羅下我ハ汝ガ母の菩提あり我夫傳相殿死去せられてよハ慳貪放逸の身とありて汝や嫁の異見をも聞かれず家の財寶を悉く失ひ夫已からず汝金地國へ出稼に赴く時我ハ一千貫の手當をくれ其外に又一千貫父の菩提の爲五百の僧齋を營めど渡されしが我夫を以て一僧の供養もせずさまじくの鳥獸を買もどめ手づから殺して獨り榮耀に耽りたる其罪によつて此世うら苦み死をあし今の專苦しき處に落入しガ汝ガ回向の功德によつて其苦所を一寸の間通れしゆへこへ來りて今汝に逢ハ百万金を得しよりも嬉しく思へばどうぞ我苦を扶てくれよと兩手を合せて拜む折うら忽然と火車を引たる獄卒あらいれ出しを見て母ハ驚きアラ懼しや免し給へと目蓮に取すがらんとする其後髪を搔つうんで火車へ投込引行ハ手足を悶へて喃苦しやくと母の苦しみを目蓮眼の前に見て血の涙を流しつゝ泣かあしんで其場へ倒れしが忽ちムックと起上り夫人として親の終りを見透すハ鳥獸に異ならず殊に我三界の教主釋迦無尼世尊の法弟とあり一切衆生を濟度する身を以て我母の苦を救ふこと能ハすハ出家とハ名のられずされば是より火車の行衛を普く尋ね

て再び母に廻りあひん娑婆の芥の塵つもる地獄六道遠しといへども我身に奚ぞ遠うらん寸善尺塵の噫それよといふ間に目蓮神通をもて忽ち地獄へ至りけり

八大地獄大意

○八大地獄の第一等活地獄の此閻浮提の下二千由旬にあり其堅横一万由旬あり人間の五十年を以て四天王天の一日一夜とすれは其命五百歳あり此四天王天の命を此地獄の一日一夜として其命五百歳あり娑婆にて殺生したる者はへ落る此地獄の四方の門外に附属の地獄十六あり是を別所といふ其一を屎泥所其二を刀輪所其三を梵熱所其四を多苦所其五を閻冥所其六を不喜所其七を極苦所といふ此余の九所も皆是に等し其呵責の有様は此書の上巻の口書に出たり

○第二黒繩地獄の前の等活地獄の下にあり堅横とも前に同じ人間の二百歳を切利天の一日一夜として其命一千歳あり此切利天の命を此地獄の一日一夜として其命一千歳あり娑婆にて殺生偷盜を志したる者はに落る此處にも又別所の地獄十六あり其中ある等喚受苦處又畏驚所といふ殊に懼しき呵責あり此書上巻の口書を見るべし凡て此地獄の罪人の前

の等活の苦みより十倍重く受るあり

○第三衆合地獄の前の黒繩地獄の下にあり堅横とも前に同じ人間の二百歳を夜摩天の一日一夜として其命二千歳あり其夜摩天の命を此地獄の一日一夜として其命二千歳あり娑婆にて殺生偷盜邪淫せし者はに落る此處にも又別所の地獄十六あり其中の惡見處又多苦惱處又忍苦所といふ所の責苦甚だ重く山の間へ罪人を入れて押つぶし又鉄の臼の中へ罪人を入れて搗くだき又熱鉄ある異形の獅子虎狼鷲ありて罪人を責るありさまり此書の上巻の口書を見るべし

○第四叫喚地獄の前の衆合地獄の下にあり堅横とも前に同じ人間の四百歳を都率天の一日一夜として其命四千歳あり此都率天の命を此地獄の一日一夜として其命四千歳あり娑婆にて殺生偷盜邪淫飲酒恣せし者はに落る此處にも別處の地獄十六あり其中の火末虫又雲火霧といふ所の罪人の人間の四百四病を一ツにまごめたる程の大惡病をうけし其身より異形の虫飛出て自分の皮肉骨髓を喰われ又猛火の中へ投入れて殺され又獄卒に活々と呼生されて又責らるゝ苦みあり



繫持

系持

法句經の諸
愚鈍周利
繫持自口意
の三業と守て
神変と現も

○第五大叫喚地獄の前の叫喚地獄の下にあり堅横前におちじ人間の八百歳を化樂天の一日一夜として其命八千歳あり此化樂天の命を此地獄の一日一夜として其命八千歳あり娑婆にて殺生偷盜邪淫飲酒妄語せし者は是に落る此處にも別處の地獄十六ある其中の受降苦又受無邊苦といふ所の罪人の口と舌を熱鉄の針にてつらぬき又兩眼を拔出す責あり總て此地獄の罪人の前の四ヶ所の大地獄其別所の責よりも一増倍重き苦を受るあり

○第六焦熱地獄の前の大叫喚の下にあり堅横とも前におちじ人間の千六百歳を他化自在天の一日一夜として其命一万六千歳とある其他化自在天の命を此地獄の一日一夜として其命一万六千歳あり娑婆にて殺生偷盜邪淫飲酒妄語邪見ありし者は是に落る此處にも別所の地獄十六ある其中の分荼離迦又閻火風といふ所の責苦の甚だ嚴しければ此地獄の罪人の前の五大地獄の火を見て雪霜の如くに羨む程の懼しき處あり

○第七大焦熱地獄の前の焦熱地獄の下にあり堅横とも前におちじ此處の命の半中却あり娑婆にて殺生偷盜邪淫飲酒妄語邪見持戒の清淨比丘尼を汚したる者は是に落る此處にも又別處の地獄十六ある其中に全地は一切針の目ほどもすきまなく火入んのもえ立中に責苦を

受る罪人あり又其別所の中の普受一切苦惱といふ處に罪人の顔手足身の皮をはぎとつて
猛火にやき又熱湯を洒ぎかけて無量億千歳の大苦惱を受けて苦しむ有様の上卷の口書にあ
り

○第八阿鼻地獄に又無間といふ前の大焦熱地獄の下欲界の底にあり此地獄の命一中劫
あり是へ落る罪人の前に中有に苦しむ身を深く愁しめ獄卒其罪人に向て汝此中有の苦
の一寸の水の如し是より行さきの苦みの大海の水の如しと示して此無間へ引連きたりそ
れくの苦を受さず此無間地獄のみ堅横に八万由旬ある其大地八方とも皆火炎燃たち
七重の鐵城に鐵の網を七重にはり其城下に又十八の隔てあり城のめぐりに劍の
林あり又身の丈四十由旬の銅の犬四疋のく口より猛火をふきいだす又六十四眼のあ
る夜叉羅刹の如き十八人の獄卒あり又口より炎を吹出そ十八角のある牛あり又火をふく
爐七本あり又銅の熱湯を吹上る八十の大釜あり又口より毒氣をふく鉄の蜂と大蛇あり
又虚空より罪人の上へ降くだる熱鉄の玉あり又五百億の毒虫あり又此地獄の惡臭を遮る
出山没山といふ二ツの大山あり此外異形の類あれども數ふるに遑し切婆娑にて五逆罪

を犯せし者と因果の道理を無ものとして大乘の法を謗りし者と信施をむさしく喰たる者
等此阿鼻地獄へ墮るあり是にも又別所の地獄十六ある其中の鉄野干食所といふ罪人の
身の上に十由旬ほどの炎火もえたち又黒吐所といふ罪人飢かわきて我肉を喰ひ又毒蛇
の責苦にあふ又雨山聚所といふ罪人鐵の山に押つぶされて微塵とある苦みあり又閻婆
度所といふ罪人閻婆といふ惡鳥に握まれて虚空へ上られ又夫に蹴落されて其身百千に
碎たるを炎の牙ある狗に喰る責苦あり物じて此處の阿責の前の七大地獄其別所等の苦
みより千増倍の苦惱を受けるがゆへ此阿鼻地獄の罪人の大焦熱の地獄の罪人を見て他化自
在天の快樂の身と羨といふモン此地獄の一切を説盡し又其一切を聞盡す者あれバ其説し
者も聞し者も其坐に血を吐て死す程の怖しき處あり

○六道四生の大意

第一 餓鬼道の大意

○六道の第一餓鬼道の其住處二つあり其一の地の下五百由旬閻魔王界にあり其二の八天の
間にあり其形さまざまあるあり或の身の丈一尺あるもあり或の八丈あるもあり或の八丈

に倍す鏡身といふもあり或ハ其身廣大なる食吐といふもあり或ハ佛事の施物の外喰物を
 き稀望といふもあり或ハ植木の中に生じて押つめらるゝ木賊虫の如きもあり或ハ己ガ髪
 の毛劔の如くにちつて身を切又ハ火に變じて其身を焼もあり或ハ夜晝五人づゝの子を産
 て其子を喰ふもあり或ハ一切の食を喰ことならず己ガ頭をやぶりて腦を喰もあり或ハ口
 より火を出して蛾といふ虫を喰もあり或ハ膿血糞水を喰もあり或ハ外の障ありて呑んど
 する水忽に火焰とちつて身を焼れるもあり或ハ内の障あるによつて腹ハ大山の如くにち
 れども口ハ針の目の如よて喰物を目の前に見れども夫を喰れぬもあり或ハ内外の障りあ
 くて食物を見れば火とちりて喰ことのあらぬのもあり件の餓鬼類何もろれゝの報によ
 つて其形の變れども皆等しく人間の一月を以て一日一夜として其命五百歳あり

第二畜生道の大意

○畜生道の其住所ニツあり根本ハ大海に住其末ハ人天の間に交り其類三十四億あれども是
 を又三種とし其一ハ鳥類其二ハ獸類其三ハ魚類あり鳥類の數ハ四千五百種獸類の數ハ二
 千四百種魚類の數ハ六千四百種あり正法念經にハ是を一に合せて四十億とす往生要集

波斯匿王
 の三子瑠璃
 太子天罰
 少海
 の猛火
 死す



天罰
 少海
 の猛火
 死す

瑠璃太子

に魚を虫とせり此種類各々大の小を喰ひ強の弱を害せば晝夜まばらくも安き暇のちし
況や水に住類の獵者に殺され又牛馬の類の重荷を負鞭に打れて駈使せられ常に食とする
水草も心に任ずることなし又鼠狼の類の間に生て間に死し又蚤虱の人の身に生れて其人
に殺され又龍の類の晝夜三熱の苦みあり又微塵の如き種々の虫あり又一万由旬ほどある
大身あるもあり此畜類の命或の半日或の一日或の一月或の一年或の十年或の百千万億亦
いし一切を経もあり

第三修羅道の大意

○修羅道の住所二ツあり其根本勝たる者の須彌山の北大海の底にすみ其末の劣りたる者の
四大州の間だ高山の岩岨にすみ雷の鳴るとき夫を天の責鼓と思ひて周章ふためき恐怖
をとし又諸天と戦ひさんぐに犯して終に害せらるゝ者あり又毎日晝三たび夜三たび修羅
同士の戦あり此有様さながら百千の雷の鳴はためくが如きときの聲をわけて互に切
結び切つきられつして身を破り骨をくだき巷に血の涙を流して終に皆倒れ死す又思ひも
よらざる事より兵具の戦ひ起りて身を害せらるゝもあり又旦に朋友の交りを結て睦む

酒樓に化樂天の遊興を爲といへども夕にたちまち修羅とありて互に惡聲を發して握み
あひ五臓を破り血眼にあつて近處合壁を驚かすもあり

歌に

面白く踊る手先もたちまちに修羅の拳とかはる酒の坐

第四人道の大意

○人道より三ツの相あり其一の不淨の相其二の苦の相其三の無常の相あり其一の不淨の相と
いふは人母の胎内を出て七日を経れば其胎内より八万の虫自然とわき出て其身の彼是を喰
惱せば夫がゆへにさまぐの病といある此五臟六腑の外に皮肉に抱るゝゆへ其の人の眼
にも見へぬが是程の不淨の物のかければ人の五臟六腑の大海の水を傾けて洗ふとも清く
のちらぬものとせる諸其二の苦の相といふは人男女とも母の胎を出て此世の風に初てあ
たり衣服を身につけられて取扱れる苦みを受るよりして成人するに老たがつてさまぐ
の病をうけ五臓を惱と是等を内苦といふ又牢獄に入て身を糺明され或の人のため我た
めに怪我をして身を苦め或の蚤蚊の如き毒虫に身を痛られ又の風雨雪霜暑さ寒に身を惱

すより常 住坐臥の立居まて一ツとして苦ありらむことおければ是等を名づけて外苦といへり
諸其三の無常といふに此世の凡て貴賤貧福の隔てなく老病死をいだく風前の燈火の身にて又光陰の矢の如くおれば彼仙境に遊びて此世界の天地崩れて泥海となり又元の如くの世界となりしを七度眼の前に見たる斯の如き長壽の仙人といへども終に無常の殺鬼に誘引れて冥途の旅立を爲にいたれば况や五塵六欲を貪る者に於てや

第五天道の大意

○天道に三ツの住所あり其一を欲界といひ其二を色界といひ其三を無色界といふ其一の欲界ある忉利天の天人の各々よろづの樂を究れども命終らんとするにいたれば身に五衰の相あらはる其第一の頭の花鬘たちまちおぼみ第二に天の羽衣塵垢にけがれ第三に腋の下より汗を流し第四に兩眼をくくめくるめき第五に本坐に著こと能はざるより觀喜苑の花の宴も五妙の音樂も夢と覺て三惡道へ落るあり此上界の天に斯の如きまぢいおければとも非相天まで阿鼻の業の免れされれば已に菴摩羅といふ帝釋の宿業によつて海中の摩訶羅大魚となり又憍尸迦といふ帝釋の惡道に墮すること七度ありしが佛法を歸依

せし功德によつて終に須陀洹果を得たるもあり此外餓鬼畜生地獄へ落し帝釋も又ありける

第六地獄の大意

○此書の前に述べ根本八大地獄其のく別所等を合せ其數一百三十六地獄を是に加へて厭離穢土の六道といふ爲ものあり

釋迦八相倭文庫六十四編終

釋迦八相倭文庫六十五編

爾在ほどに又毘舍離國の幼帝輔相の大臣の王舍城の伽藍陀長者と其同國なる善賢長者の一子幼名火光明童子成人して今の樹提長者と名乗者と舍衛國の奇特人財徳との三名を具して切利天正寺に來り大殿に居並て世尊を一同拜謁し提婆の危難を免れ給ふを祝しつゝ輔臣先述るやう「扱先日大林精舎に於て幼帝より三儀の事故を歎願せしに御觀察明白の御示言ありし如く母公の身に秘藏せし賤幸の玉を元の寶函に納めければ其日より母公の兩眼明かに相あり閑室も閑夜に光を爲されば母公其喜悅のあまり自から大林へ參詣して万謝を述べられんとせられしに世尊是へ來り給へば幼帝某を以て其謝の使とせられ將又別儀の趣あるの世尊前見の命ありし如く前王の時他國へ退散せし官士農民も競て歸參を願ひ出る者多くあり又他國よりも幼帝の德澤を慕ひ來者多くある中に彼爰匿が住し雪山の麓ある龍穴山の山下にすむ農民よりの幼帝の爲に一村安全を得たる報恩に山上の燒亡したる山神の社殿の迹へ更に法名大神の社をたて山の名をも法名山とわらため毎歲春秋二季に祭祀を營たしと願出しゆへ群臣一同の評議に於ての異儀なく夫を差免さんと其旨を幼帝へ聞へければ

其願奇特あれども其山の我方先の中より一生を得て國家の怨敵を滅し二種の國寶を元の寶函に納め長く國家の安泰を見るも是ひとへに佛法の奇特されるによつて其山を尸陀林とさば我自他の功德のために夫へ玉石を以て末代不朽の萬靈供養の大卒都婆を建立して世尊の法施を世に永く殘さんとの王命に任せ夫に評議一決して其卒都婆已に彼地へ造營に相成しゆへ是ある三名其地へ又法施を營たれば夫を宜く納受わらせ給へと述べられれば伽藍陀長者座をすゝみて「私先提婆の爲に建立せしを後日世尊へ献上したる伽藍陀竹林精舎此程燒失いたしたるが後日夫を思ひ合せ見れば提婆の墮獄せし同時刻に當れば是正しく渠が執着の慎火を燒しものと放念いたし心障も是なきゆへ更な清淨の木石を取集め再建の手當も調ひし折から法名王尸陀林を開基せらるゝに依て其木石を彼地へ引移し伽藍の造營も成就いたせば是を世尊へ獻納いたすと述て退けば又樹提長者すゝいて「私母の怡内は在し時母提婆の爲に毒殺せられ既し尸陀林の荼毘とありしを世尊夫を聞しめされ著婆を以て其火中へ燒たる母の懷より取出させ名を火光明と世尊附給ふよしを私幼少の折から聞つたへければ世尊の法徳を厚く信じ住宅の中へ僅の佛堂を營て父母の供養を世尊の法弟へ絶

ず頼ミ來りし此程法名王龍穴山を尸陀林に爲給ふとき其地へ赴き見ければ爰匿が住し
 岩崖の中に元祇園精舎の鐘有しを見て私其鐘樓を其地へ築き又其岩崖の中に數多ある無
 縁の鬮籠を取集め其一々の在世の有様を鹿頭梵志に見わけを致させ夫を其地へ葬りて世尊
 の御回向を受させたき迄を偏に頼上奉ると低頭して述る傍より舍利弗進みいで「夫の長者
 殊に勝し功德あるが其鬮籠を見て其者の男女在世をしろ其鹿頭といふ何者あるやと尋ね
 ければ「されば其出所しらざるが世に稀ある博學多識の者にて星宿の行道を委くあきら
 めければ人身の吉凶水難火難までを能占ひ又醫藥にも通達して諸病の根元をしり或人の
 音聲を聞て其者の死生の因縁を示し又草木の榮枯鳥獸の啼音までを聞わけ何ほど古き鬮
 籠といへども手に取て夫を叩き其音を聞とき殃死病死を知のみならず其者の後世何と變
 生したるまでを能知れりと告げれば舍利弗驚き「开の珍しや我いつぞや維摩居士の住所へ
 至りしに一丈四方の小室の中へ三萬二千の師子の座をあらべ夫へ諸佛を招接して供養する
 其座中に一人の天女あつて我と男女の相を論じたる神術を見て又どのなきものと思ひしに
 今聞其鹿頭梵志の夫又勝りし術者されば彼地へ世尊の至るを待て其鬮籠の見わけを致させ

よと座をひけば財德進みいで「私の數ならぬ身なれども法名王より賜りし地所の中の田
 畝を以て永代尸陀林の香花の料に奉ると述べれば世尊快然として其各々に向ひ「ア貴や我
 法界に斯の如く法施をぬきんてし施主のため我又其堂塔の供養に普く大衆を引きたが
 ひ卒都婆の功德を説法すべし諸其相當の日のいつあるやと尋ね給へば輔相の大臣「されば
 夫につき當時我宮内にある金支道尼母公に頼ての願ひに其供養より何卒目蓮を加へたし
 どわりけるが未だ目蓮の古郷より立戻らずやと問へければ「我渠が逐一を是にて觀察せし
 に渠古郷に於て惡死の母の罪苦を救んとて地獄へちもむき我へ歎願する難儀も疾協へわた
 へしが今又六道の中の餓鬼道に入て數萬の餓鬼の爲に廣大の難儀にあへば夫を扶けて是へ
 呼戻さんヤヨ舍利弗錫杖をどのたまへば舍利弗卒然と錫杖を御手へわたせば夫を世尊尊ら
 かに振ならし給ふを上足以下の諸比丘其座の施主達夫を見て今冥土の餓鬼道に在どのたま
 ひし目蓮何れの方より此座へ立戻らんと各々奇異の思ひをなしけるにふしぎなるかな世尊
 の椅子の前へ忽然と朦朧たる一陳の團氣あらわれしと見る間又其團氣立處に目蓮とある其
 様の三衣袈裟もなく疲勞の姿よて世尊の前へ跏趺して禮拜するを世尊見給ふより「汝目蓮



釋迦八相倭文庫六十五編

千四百八十三



千四百八十二

未曾有の神通感喜せり大衆後學の爲に冥府の有様を此座に於て物語るべしとわれ目蓮其座の一同に會釋して傍に座し「我母の罪苦を救へんと冥府へ入し其始め先等活地獄より乃至阿鼻地獄に至りければ堅固の鉄門扉とちけるゆへ夫を開かんとて獄卒に乞へば此門扉の冥府に於ては十王の浄土に於ては彌陀觀音勢至の娑婆に於ては釋迦世尊此令旨をければ開くこと能はずと答へしゆへ我の其世尊の法弟目蓮されば開くべしと大音に促せども其答へさへせざれば我神通を以て押開かんとせしに神通さらに利さればイヤ此時と心中に是を尊師へ歎願しければ一彈指の間に其御答へあしくださるに仍て其扉開けしゆへ尊師の給ひし御袈裟を以て猛火を打けし心安く阿鼻中を廻りけれども母に逢ざれば夫より六道へ趣かんとする我前へ瘦衰へたる罪人よろめきいで我の提婆あり娑婆にて云云の惡業身につもり終に此阿鼻に墮獄して火山身を燒鐵杵骨を碎く此阿鼻によつて因果の道理をしり娑婆にて大乘の法を誹謗せし前非を今後悔する此一言を以て百思の慙愧と世尊へ傳へ偏へに救護あらんことをと合掌しければ其頼みをうけ我又念佛を以て其苦を慰め夫より十王の廳へ趣きて母の居所を尋ねければ六座の間魔王鉄札をしらべて餓鬼道に有を教へしゆへ又餓鬼道へ至

りて獄卒に十王の免しを述て母の住所を問ければ食氣の食法の二部の餓鬼中に有と告しゆへ其二部を尋ねければ食氣の中より我母我を見つけて走り來り三衣に取すがりて懇慕渴仰するさまを數万の餓鬼見つけて我四方を黒山の如くに取かこみ濁々の聲をあげて食を求むるさま甚だおそろしければ夫を神通もて退け母一人を救ひ出さんとせしに神通さらに驗しかく我身も危うく其處に迫りて唯忙然たる折から世尊我を呼せらる御聲を聞淨へ戻る道とせんと母へ袈裟を打かけ數多の餓鬼の手へ三衣を残し斯の体に至るまでに辛苦を盡して母の苦を救ふこと能はざる不肖の目蓮の身に取ての棄恩入無爲眞實報恩者の偈も一子出家を爲べ九屬天に生るといふも今更虚妄ありと大音に託ちければ世尊微笑まじくして「コヤ目蓮其意をすて、此譬へをきけ凡て物を求むるに我よりするに難し彼より至るに得るに安しされば其意を以て心安く母の罪苦を救ふ善法を示すあり今度法名王及び夫ある三名の信者まうとある創立あしければ汝歸山するうらゝ其供養日を來る七月十五日僧自恣の日に定むれば汝其日に齋供を設けて諸佛を供養し衆僧に齋を施して讀經をささば汝が母餓鬼道を轉じて上天の果を正に受れば汝我が代理となりて大臣にまたがひ法名王へ法施

を謝し金支へも齋供の施主たるを示し夫より彼地へ趣き一切の法式をどゝのへて我至るを待べし扱大臣外三名の信者達今より彼地を法名山摩訶尸陀林般若法堂と號け信施の法燈を永くかゝやかさんと示され尙長途往返を厚く慰勞されしゆへ皆所願満足せしを悦び彼地の再會を期して退きける

されば又樹下石上を家とする出家の法あれば手軽く世尊の切利天正寺の大衆を引て間もかく般若法堂に移らせられ一切の法式どゝのひ既に七月十五日とありければ幼帝の母公清羅夫人の金支道尼を連られて御參詣あり又惠中庵の妙惠比丘尼も數多の尼法子を伴かりれて御參詣あり此外遠近の參詣人爪も立ざるほどの群集の折から新築の鐘樓にて鐘をつきはじめければ世尊大衆に圍繞されて大率都婆の正而に向ひ一見卒都婆永離三惡道何况造立者必生安樂國と念誦せられ夫より大衆と共に經陀羅尼を讀せながら卒都婆を七度めぐらせられて尙禮拜され夫より樹提長者の案内にて彼岩岨へ入給へば所々にありし無縁の觸骸までを此内に取集めたる傍らに鹿頭梵志疾來りて居ければ世尊一ツの觸骸を取て鹿頭に渡し給ひ「夫の何人にて何ゆへに死せりと問せらるれば鹿頭夫を叩き「是の男子にて濕毒集り百節

酸疼して死す者なり若阿梨勒を密に和して服さしめあば必ず死せざるものと答へければ世尊又「其者死して今何の處にあるや」されば此者の今三惡道に展轉せりと世尊又一ツをわたされければ「是の女人にて懷妊の胎破れて死す若好蘇醒醜を服さしめあば死せざるものを今此者の畜生道にありと世尊又一ツ渡さるれば「是も亦女人にて難産に死し今人界にありと世尊又一ツ渡し給へば「此者の他の害によつて死し今天上に生れりと答へければ世尊夫を難詰られて「コハ不審あり他の害に死す者の三惡趣に生ずべきものを天に生るゝといふ其理あるや」されば此者の常に十善を營みたる果報によつてあり「アラ奇なる哉妙ある哉汝が斥どころ一ツとして差はずと賞讃せらるれば舍利弗一包の中より一ツの觸骸を取出して世尊へ差上げれば夫を又鹿頭に渡されて「其觸骸の何者にて生死何ある因縁有ものあるやと尋ね給へば鹿頭取あへず叩き見けるに其音紛々たれば尙右に叩き左にたゝき見ければ夫を知ること能はざれば御前に踰躡して「此觸骸男にあらざ女にあらざ夫をさへまらざれば况や其因縁をさや抑も是の誰あるやと尋ねければ世尊泰然として「やみかんく汝譬へ無量劫を經ども夫を知ること能はずと答へ給へば「我字内の生類に於て其生死來去を知ざ

世尊の涅槃
般小諸羅
漢皆洋天
為中小大
迦葉一人大
聲小三笑



ることおけれども夫に限りて知ことあたはず誠に世尊の大智慧正法の奇特の九十六道を超
たり唯願くば其觸儀何者あるや夫を教へ給へど禮拜しければ「是の香醉山の南に住て無餘
涅槃を逐たる無學の大阿羅漢優陀延比丘の觸儀ありと示されしゆへ鹿頭低頭して「我其觸
儀の上に其誰を知と能はず況や其比丘の深法の妙理おや仰ぎ願ふ今より導師の法弟たらん
ことをと恭敬しければ世尊喜然として「コハ殊勝あり然らば今より我法弟とあつて無上の
道果を得よと示されければ其場に於て大衆と和合の誓ひを結びける扱世尊の其場の觸儀に
誦念し給ひて夫より法堂の講座に於て卒都婆の功德を説せらる「それ卒都婆の五智の功德
備はりて五明神力の尊形あれば東西南北中央の五佛の功德も是にあり或の五妙境界の空風
火水地の妙體をあらわし又木火水土金の五法身の成就をさせば五脉不具ある者卒都婆を一
見せば其利益あきらりにあり諸佛出世の妙法も唯是卒都婆の功德あれば一切衆生に於て
は是を貴とび恭敬禮拜する者必ず三惡道を免かれて不退の蓮臺に往生するものありと説
せられ夫より世尊の今日施主とありし目連の取設けたる諸佛供養の供所まで敷つらぬたる
敷物の上を諸羅漢諸比丘の大衆と共に其場へ至りて御覽われば皆あらたなる盆器に百味の

飲食を盛からべ其外妙花をかざり妙香を薫らせて其傍らよ扣へたる施主の目蓮と金支の世尊及び大衆の至りしを見て禮拜しければ世尊をはじめ大衆皆青提女の位牌へ回向をどげ夫より同音に經陀羅尼を稱へ諸佛を供養する其那謨サンバの聲の陽を發して天につうじオンサンバラサンバラウンの聲の陰を含んで地になびき是まで魔界の地なりしも今日時を得て無垢清淨の佛場となりしうば鳥獸草木も佛果を得る此念佛の大功德を諸佛感應まじませば其利益たちまち青提女の身に及び餓鬼道を免れられて上天の果を受たる證なるる前に目蓮餓鬼道にて母へ授けし娑婆妙花と共に天降り來て位牌の上に掩ひかゝるを目蓮見るよりは是を取わけて金支もろとも天を拜し世尊を拜し羅漢諸比丘を勞ひつゝ夫より清羅夫人の惠れし資用を以て調へたる精味の齋供を大殿に取りひらき世尊を始め諸羅漢諸比丘を供養して年來の志願を此日こゝに遂げるされば後世七月十五日の盂蘭盆會といふの則ち是が元なり斯て清羅夫人の今日此法堂にて妙惠比丘尼を教師として飾を落れて諸比丘へ布施し金支に暇を給ひて戻らせらる然るがゆへ妙惠尼の金支を我道場の維那どかさんと其日同道して其處を立給ふ諸世尊の此法堂に二十日余り法事を營まれけるも祇園精舎に置せられし富留那尊

説の經句法

者是へ來りて世尊へ見へ此程須達長者故わつて貧を轉じ元の祐福に立かへりければ父の追善を營みたま旨を願ひ出ける故渠の別格の信者なれば御迎ひに來りしと述ける世尊是を聞給ひて「夫の悦ばしき事あり汝がいふ如き長者なれば我祇園へ赴けば汝是に於て説法せよと富留那を此法堂に置せられて上足以下僅の比丘を召連られて問もなく祇園精舎へ至らせられ須達の爲に法會を開かれしを波斯匿王聞給ふより此王も亦王宮の法會を願ひければ世尊御承引あり已に其招接の日を以て舍利弗に嚴命せし樂特の威力を庶人に見せしめられんと御鉢を樂特に持せられて舍衛城内の正殿へ入給ひしに内廊の門番樂特一人を差留ければ樂特我の世尊隨從の比丘と答へければ「汝佛弟子といへども一偈さへろくくゝに覺へぬ愚鈍の身を以て我大王の布施物を受に入謂やある智慧なき比丘の俗にも劣れば此門内へ入可らずと棒を振て追拂はれ樂特一人門外に唯勃然とぞみける諸正殿の法座には波斯匿王其世子祇陀太子未利夫人を始め群臣又祇園の尼達其外數多の聽衆も久々よて世尊の御説法を聞て感喜踊躍の余り布施を献ずる者多くあれは世尊自から夫を受られんと鉢々と呼給ふ此御聲門外にぞむ樂特の心に通じけれども身の闇人にせきとめられて入こと能はざれば近



頃解悟せし神念を以て鉢を世尊へ進めければ其鉢忽然と世尊の前へ懸れて捧じ者の姿見へざれば皆怪しみけるうち大王世尊へ夫を尋ね給へば「是ハ我弟子の槃特門卒に身を止められ臂を伸て捧たる鉢なりと答へ給へば大王驚き「其槃特なる者の御弟子ながらも愚鈍の身と聞及びしが斯る奇特を見るからの急ぎ是へ入よとあるより近臣忽ち槃特を連來るを世尊御覽あるより「コヤ槃特我又替つて此高座に上り説法せよと仰あれは祇園の尼寺より來りし聽衆此仰を聞よりコハ珍らしや名に聞へたる槃特の説法の富留那尊者の辨舌よりも嘸貴く可笑うらんと皆口へ袖を當て笑ひをこらへし中に心惡しき尼一人アノ愚鈍の得意とする例の守口攝意の偈の外何一ツ知ことおければ渠説法を演んとする時其偈を此方より唱へて愧をか、せやらんと座をすゝみて待けるほどに槃特高座に上りて座中を見まひし「我ハ智慧も才徳もなき愚鈍の比丘あるハ庶人の能知どころあれと唯一偈を能解しゆへ夫を説くと述るをき、彼尼其一偈ハ是あらんと口走らんとせしよ不思議あるか其尼の口甜て舌縮まり一身惱亂するに絶かねて其巧を自ら責て懺悔しければ聽衆皆驚き夫より座を静めて説法を待ければ槃特謹然として身口意の起る處又其滅する處より罪福内外の差別の法理

を悉しく説て庶人を感喜ささしめしゆへ大王殊に感じて世尊又向ひ「槃特ハ犬打童にも慢どらる、愚鈍ありしが何故に斯の如き大道を得たるやと尋ね給へば世尊怡然として答へ給ふ「夫學ハ多きを以て要とせず此槃特ハ唯一偈を能了解して神に通じ身口意の三業を守ぐ故に斯の如し世人ハ多く學べども其理を解せず徒に識を費し想を勞する已かれハ其偈に曰

雖レ誦二千章
句義不正
不レ如二一要
聞可滅意

雖レ誦二千言
不レ義何益
不レ如一義
聞行可度

雖レ多誦經
不レ解何益
解二一法句
行可得道

と示されし折から俄に法座散動き聽衆散乱すれば群臣其故を尋ねんと立騒ぐを世尊見給ひて卒然と眼を乞れければ大王祇園の兩公世尊の兩袖又すがりて名殘を惜まれしゆへ世尊も愁然と兩公の顔を見給ひて念佛を授られ夫より法弟と共に祇園へ戻らせらるれば離婆多法師御前へいいて「尊師もしろしめされし彼兩手なき牛といへる童子私實子の如くに養ひて三寶を信ぜし其利益によつて終に五鉢具足の身となれば世尊太子たりし時の后妃瞿陀彌女の家の御由緒もある釋種ゆへ其代々の名を嗣せ執杖と改名させ此精舍よて學文を致させおき

經論譬

しにふと行方しらずに相成扱の猿の子人にならずと多年の丹誠を放念いたせしに今日分衛先にて其者の胸ありけるゆへ尙深く聞糺しければ渠先年丹車なる者に勾引されて提婆に屬し名を富蘭那と名のりしが提婆の滅亡より又丹車と共に波斯匿王異服の二子瑠璃太子の副將となりて世尊の法を信ずる者を斷滅させんと已に迦毘羅城の人民を塵しに爲んと計りしが提婆の滅亡に怖れて夫を止まり又此舍衛國の釋種を普く殺さんとする隠謀世間に昨今露れしと告げる處へ須達長者走來りて御前へいで「今日世尊舍衛城より御歸山の迹にて瑠璃太子父兄を殺し其母ある善愛女も未利夫人を毒殺なさんと厨官の修迦羅へ密意をつらじけるに修迦羅の先年死罪に行かひるべき科ありしを未利夫人持戒を破りて渠を扶られし大恩あれば其毒味を善愛の方へ調へしゆへ其部屋に同居する丹車まで其毒味を喰て速死せしゆへ修迦羅退身して未利夫人を密に我方へ運來れば此兩人の私扶持いたせども瑠璃太子六万の軍卒を以て市在の釋種を斷滅させんと攻闘かふ戦さも釋種の方の皆戒を守れば是を防ぐのみにて敵を殺す者一人もあければ大道十路に尸ばね滿て血の涙を流しけると認へければ目蓮憤然として「アラ憫然至極なり沙門の身として釋種の斷滅を見るに忍びされば我神

説の

力を以て舍衛城の地を虚空へ藏て暴太子に見せざらむべしと彼方の空を見上れば世尊怒然として「コヤ目蓮疾るまひ凡ろ衆生に遷れざるもの七ツあり夫の生老病死罪福因縁是なり此業力感報するに至つての汝の大神力を以て能救ふこと能はずと云まへば「爾あらば責てのことに今日王殿の法會に來りし者已をも救ひて見んと其座より神力を起して城内に悲嘆する五千人を鉄鉢に納め星辰の際に隠して暴軍の鎮靜するを待けるに惡太子三億の人命を亡して終に平定しければ目蓮急ぎ鉢を下して見ければ皆渴死しけるゆへ是を世尊へ告て其因縁を問奉れば「されば其如し其釋種の前世も人民にて飢饉の時取喰ひたる大魚即ち瑠璃太子なれば斯の如く宿報の然らしむる處といへども又瑠璃王不孝の逆罪深重なるに仍て此七日の中に必ず阿鼻の猛火に焼死するものなりと示し給ふ此語を瑠璃太子の王宮にて聞より此火難を免れんと執杖を伴ひ海中に大船を浮べて七日過るを待けるにアラふしぎや七日ゆに至りて俄に暴風起り海中より猛火燃立て船をやき執杖もろども瑠璃王毒熱狂乱して遂に海底へ沈みける諸世尊の輿に七十七歳を顧み思惟せられて靈鷲山に至り諸精舍の法弟を普く召呼れければ三千餘人の諸比丘皆耆闍崛の大法堂に集り各々修行の位をたらし

座具をばへ功德三昧に座しければ世尊師子の高座よ於て金婆羅花を左の御手に持せられて
 仰らる「今日の説法の是功德三昧の肝要なれば更に能聞べし夫一葉の船に四州をつみ一粒
 の芥子に四天下を包の理あり此花にも又三見あり其一の説法功德の摩訶衍其二の眞如無爲
 寂滅の摩訶衍其三の舍利非寂滅の摩訶衍是の則ち功德の附屬なりと花を捧給へば大衆其意
 を悟らんと皆座禪工風に凝たる中に大迦葉一人微笑して座具を志ぼり其座を立て虚空を觀
 じけるを世尊御覽ありて渠を呼給ひ「我に正法眼の涅槃の妙心の微妙の法門あり是の不立文
 字教外別傳されば汝が心を見るより此摩訶衍の功德を汝に附屬すと正覺下化衆生の金婆羅
 花を授けられて夫々の羅漢へも諸山の精舎を附屬せられしゆへ大迦葉を以て滅後の如來
 ともいへり斯て二年をすく杓戸那城跋提河の邊り娑羅双林にて四部の大衆の爲に涅槃經二
 十五品を説せられ已に涅槃の時至れば世尊師子の高座に於て僧伽黎衣を退けられ紫摩黃金
 の御身を露されて大衆に告給ふ「汝等當に知べし我汝等が爲に累世苦業を行ひて菩提を成
 就し此金剛不壞の身を得て三十二相を具足せしが今其緣畢りて涅槃に至る汝等心の誠より
 我此金色を看て能淨業をいとなみつゝ未來世斯の如き果報を得べしと金言し給ひ終に寶筭

世尊在世四十九年

空則是色
色則是空

燈火の
火の光の
眼の光の
何れも色に入らぬ



物のつらみは

万亭座の心

説法道場三百餘會

七十九歳にて二月十五日寅の上刻に頭北面西に伏給ひて寂光の都へ歸り給へば三千餘人の法弟天天下の諸佛諸神百國の王阿修羅龍王五十二類まで此場に来りて御別を深く啼かちしみける是よつて又世尊の母たりし忉利天の后女惡夢を見給ひ世尊に見へんと不老藥を携へられて玉車に乗天下り給へんとせられしを七種の異鳥羽風を以て玉車を遮されば不老藥を虚空より投給ひしが雙林の樹に止まりて世尊の御手に至らず扱又上足の羅漢の評議に定まりて尊骸を金棺に納め淨所に送りて香木を積かさね梅檀の煙に爲奉らんとせしが火燃付ざる處へ大迦葉鷄足山にて涅槃をしり諸羅漢の涕哭するなかへ來りて大音に三笑しければ皆驚き夫を咎むれば迦葉其三笑の道理を説て尊骸を拜せんとするを皆止めければ金棺の戸たちまち開け赫々たる尊骸大迦葉を召れて法衣と鉢を授けられ又阿難を召れて袈裟と臥具を授けられ夫より自から金棺の戸を閉られて五妙の神力を露し給ふ其光明より自然の茶里となりて微妙の舍利と成給ひければ夫を帝釋天及び百國の王達龍王諸羅漢是を別取て何も寶塔の中に納め永代恭敬禮拜する其功德の貴き説の僧家に譲り此杜撰の物語りの茲に筆を止めける

十大弟子

冥府十王

頭陀第一	大迦葉尊者	第一	泰廣王
多聞第一	阿難陀尊者	第二	初江王
智慧第一	舍利弗尊者	第三	宗帝王
神通第一	目犍蓮尊者	第四	五宦王
天眼第一	阿那律尊者	第五	琰魔王
解空第一	須菩提尊者	第六	變成王
說法第一	富留那尊者	第七	泰山王
論義第一	加旃延尊者	第八	平等王
持戒第一	優婆離尊者	第九	都市王
密行第一	羅睺羅尊者	第十	轉輪王

五時六題說法

- 華嚴經 七所扎會 ○阿舍經 十二年間
- 方等 十六年間 ○般若經 四所十六會
- 法華經 二所會 ○涅槃經 娑羅双林

釋迦八相倭文庫第六十五編大尾

版權免許
刻成出版

明治十八年一月廿三日
明治十八年四月十八日

定價金貳圓五拾錢

編輯人

静岡縣平民

服部應賀



淺草區西三筋町
五拾二番地

出版人

辻岡文助



日本橋區橫山町
三丁目二番地

發兌所

金松堂



日本橋區橫山町
三丁目二番地

東京京橋區西組屋町秀英舎印刷

發兌書林

同	同八ノ戶	同	同	同弘前	陸奥青森	同	小樽	天鹽增毛	札幌	全	函館
鈴木	浦山	宮本	野崎	武田	柿崎	菊地	佐々木	小野寺	津田	常野	魁文
吉十郎	太郎兵衛	甚兵衛	九兵衛	莊七	忠兵衛	重平	常吉	喜兵衛	教助	嘉兵衛	社
同	同宮古	同土澤	同黒澤尻	同	同盛岡	同岩谷堂	同	陸中一ノ關	同	陸中八ノ戶	石岡
中村	阿部	大澤屋	中島	佐藤	澤田	大黒屋	年岐	壺屋	工藤	新助	吉十郎
喜助	源内	利兵衛	兼松	庄兵衛	正助	惣吉	鐵五郎	養藏			

發兌書林

同	陸前石ノ卷	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
高橋	淺野	山口	久道	平塚	佐々木	伊勢屋	菅原屋	山下	阿部	木村	下田
八郎治	利兵衛	啓之助	惣五郎	鶴次	長藏	安右衛門	安兵衛	勘右衛門	勘右衛門	文助	彌兵衛
羽後秋田	同	同	同	同大曲	同大館	同増田	同山本郡能代	同酒田	同	同	同
本間	土屋	渡邊	渡邊	能味	村上	東海村	村井	白崎	須田	加納	岩谷
金之助	善三郎	久四郎	八右衛門	直二	平造	重太郎	理助	善助	傳次郎	次郎兵衛	八郎兵衛

發 兌 書 林

同	同	同	同	同	同松本	同	同上田	同	同	信州長野
窪田重平	精華堂八十兵衛	竹内禎十郎	飯田一三	高美甚左衛門	水琴堂為吉	官島舍市三	伊藤甲造	成田良太郎	葛屋伴五郎	西澤喜太郎
同	越後新潟	同	同飯田	同	同上諏訪	同須坂	同高遠	同白田	同	信州小諸
淺野六平	林富吉	榊屋忠助	皆川半四郎	官坂喜代治	宮坂吉左衛門	山下八右衛門	矢島金八	井出孫一	相場七左衛門	小山左傳次

發 兌 書 林

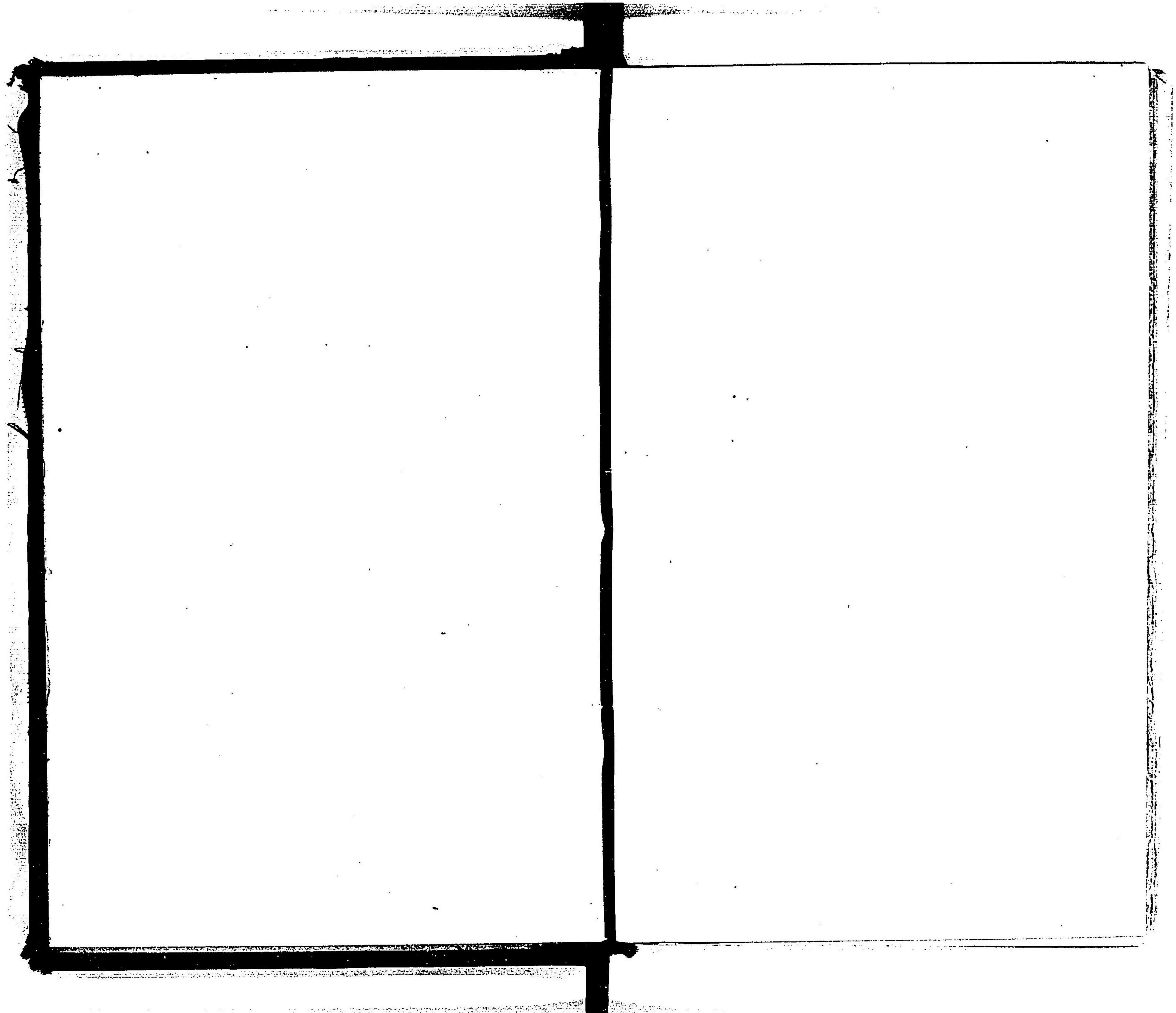
同	同高田	同三條	同	同水原	同	同	同	同	同長岡	同小千谷
玉川屋佐太郎	室直三郎	樋口屋小左衛門	西村鐵二郎	西村六平	山口萬吉	大橋新太郎	覺張治平	目黒十郎	松田周平	野口保太郎
同	同	同	同佐渡	同五泉	同中頸城郡	同六日町	同	同加茂	同地藏堂	同葛塚
金子惣八	萬屋長五郎	本間紋兵衛	本間孫次	松田金吾	佐藤友吉	目黒宗内	丸山音人	番場吉次郎	江口藤吉	弦卷七十郎

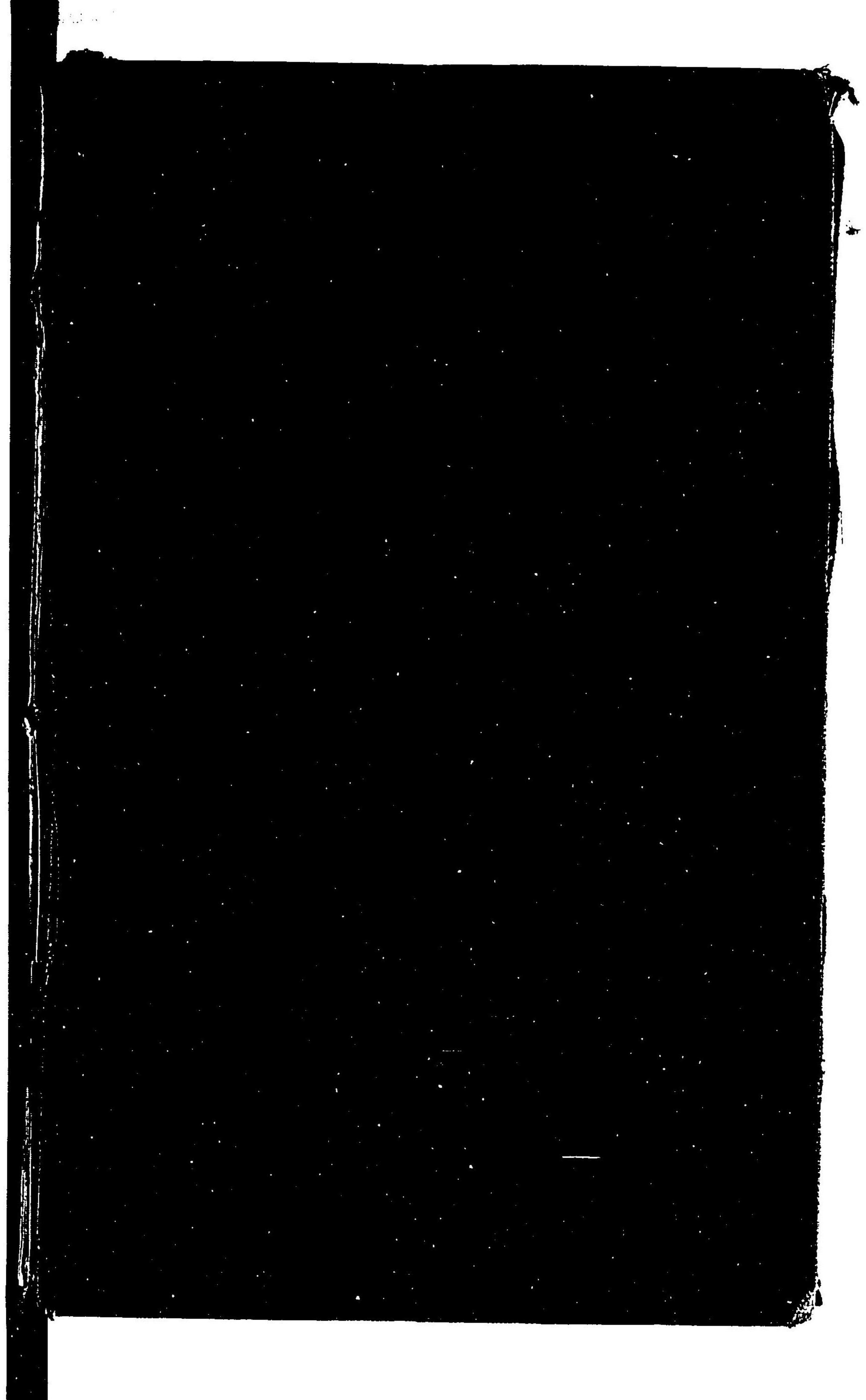
發 兌 書 林

同沼田	同藤岡	同館林	同	上州高崎	同	同	加州金澤	越中高岡	越前福井	同
塚田屋	松野屋	森尻	竹内	後藤	牧野	近	知	國本	森下	山本
佐太郎	貞吉	太吉	輝吉	綱吉	作平	八郎右衛門	新堂	吉左衛門	元次郎	與八郎
同足利	同	同椽木	同	同	同	野州宇都宮	同堺町	同安中	上州伊勢崎	同
和洋商社	永樂屋	叶屋	田中	佐藤	西江	萬年屋	永井	小林	川木屋	山田屋
	吉造	儀右衛門	庄太郎	靜雄	宥造	忠兵衛	貞次郎	房二郎	平吉	金兵衛

發 兌 書 林

同小見川	同野田	同	下總千葉	同	同安房北條	同	同	上總水更津	同佐野	同同
高寺	茂木	立	藤屋	鈴木	山下	織本	鈴木	長坂	堀越	川島
清兵衛	林藏	眞社	錠二郎	郡爾	安民	彌惣治	啓次郎	宗三郎	常三郎	平五郎
同所澤	同深谷	同本庄	同熊谷	武州鴻巣	同	同	常州土浦	同水海道	下總佐原	同境
齋藤	小野	森田	杉浦	長島	塚本	柳	寺田	新々堂	正文堂	高木
佐兵衛	脩三	芳次郎	平左衛門	爲一郎	權左衛門	且堂	新助	爲吉	利兵衛	直二郎





東天知在館
和書門
七
九
二
四
冊

光緒

